ΔATTENTION
・西暦 2255 年の話。
・燭へしメイン。薬へし、燭薬要素あり。
・性描写、若干のグロ表現があり、審神者が喋ります。
※本作は既刊『Everyman,everywhere』の世界観を引き継いでいますが、
　単独でもお読みいただけます

目次

1　さいごの如月　……5

2　誰が降る卯月　……13

3　皐月が勝負時　……22

4　氷の水無月　……32

5　文月の黒い河　……41

6　いつわりの弥生　……51

7　葉月ならばｑの命題　……59

8　長月は焔のなか　……69

9　神無月でつかまえて　……76

１０　霜月の真っ赤な晩餐　……82

１１　師走めぐる記憶　……87

１２　睦月は帰らない　……95

１３　如月、ふたたび　……100

1　さいごの如月

スライドショーのように季節は流れる。

二月も終わりに差しかかったが、庭に面した回り廊下はまだ肌寒い。しかしアルジがここにあって取り外せないのだから仕方ない。俺はアルジの側面にくっついているレバーをそっと握り込む。するとそれに反応して、四つ並んだリールのバックライトがぱっと点灯した。

「こい…」

レバーの先端部分は球形になっていて、まるで縁日で売られているりんご飴のようにつやつやと赤い。手袋越しに触れているその表面を中指と薬指の先でせがむように撫でてから、一息にレバーを下げた。

かしゃんかしゃん、と覚束ない音を立ててリールが回り出す。回転は徐々に速くなっていく。

『1』『6』『1』『4』やがて左端から順に一桁の数字を示して止まり、そのリールの上にぽこんと盛り上がった黒いスピーカーからは、性別の分からないアナウンスが聞こえてきた。

「大阪冬ノ陣。部隊ヲ選択シテ下サイ」

その無機質な言葉の語尾が終わるのを待たず、俺の足元で砂埃が舞い上がり、次いで背骨に強い衝撃を受けた。後ろを振り向けば、庭の中央に巨大な黒煙が出現し、それはちょうど雷を伴った雨雲のようにとぐろを巻きながら火花を散らしていた。時計の向きとは逆回りに渦を描いている。これは、アルジだけが開くことのできる、刀剣たちに時間を遡らせるためのゲートだ。

俺はそれを一瞥しただけで再度アルジと向かい合い、いつの間にか元通りに起き上がっていたレバーをまた掴んで下ろした。

『1』『8』『6』『4』「池田屋事件。部隊ヲ選択シテ下サイ」

『2』『2』『5』『0』「六本木占拠。部隊ヲ選択シテ下サイ」

レバーを下げる。リールが回る動きに合わせ、ぎしぎしとひとりでに起き上がってゆく。

また下げる。起き上がる。

また下げる。起き上がる。

背後のゲートが開いては消滅し、また現れる。

「こい…こい…」

何度も何度もその動作を繰り返す。くじ運の無い俺は、お目当てをなかなか引き当てられない。

朝の色が濃くなり、雀たちが起き出して、梅の枝に集まり世間話をし始めた。数字、また数字、数字、また数字、もう何度目かなんて数えてはいない。ただ黙々とその単純作業を繰り返した先に、ようやく絵札が現れた。真っ二つに切られた西瓜の絵が四枚揃う。

テレレレッテッテレー。スピーカーからチップチューンの祝福音がノイズ混じりに鳴り響き、背後で光輝く虹色のゲートが口を開けた。
「演練。部隊ヲ選択シテ下サイ」
「……拝命いたしました、アルジ」
拒否と選り好みの許された命令に、拝命もへったくれもありませんが。
「それでも我々、御命令あっての自由です」
俺はうやうやしくアルジに一礼をしてから、庭先に揃えておいたモンクストラップの革靴に足を通した。
滅多に出現しない演練のゲートは、過去の戦地へ飛ばす鈍色の渦とは対照的に、目を焼くほどのまばゆい光を放射する虹色の渦だ。それは仏徒が苦行の果てに見る幻のようでもあり、麻薬中毒者が浮かされる夢のようでもある。
いずれにせよ、これは俺にとって唯一残された天国への梯子だった。
「どうか、俺たちに、二度と目覚めぬ安息をください」
七色の渦の向こうへそっと足を踏み入れたら、たちまち俺の全身は光に包まれ、見えない力で渦の中心へと引き寄せられる。
そのとき、首に掛けていた銀の十字架がふわりと襟から浮き上がった。俺はそれを一瞬名残惜しく見つめ、やおら引きちぎり、背後にみるみる遠ざかってゆく本丸と、その一角でただじっと俺を見送る静かなるアルジへと向けて、放り投げた。

＊＊＊

長い長い時間、はがねの中で眠っていた心は、あるとき突然呼び覚まされた。
人から、人の肉体を与えられ、人の争いを食い止めるようにとの命を与えられた。最初にそれが始まったのは、今からおよそ五十年前のことだという。
わけも分からぬまま俺たちは戦い続けた。与えられた体は不死身ではなく、戦いで負傷した場合、審神者なる人間から呪力を注いで貰わなければ回復できず、放置して負傷を重ねていくと、鋼と同じように折れて消えてしまった。体を動かすと疲労し、体が傷つくと痛みを伴ったため、俺たちが体を手に入れて最初に理解するのが、審神者がいなければ自分たちは生存できない――ということだった。
敵とされた勢力は、魚の食べ残しが服を着たような奇妙な姿をしていて、いつも目玉だけがぎらぎらと光っており、こちらが言葉をかけても、ぎちち、ぎちち、と羽虫のような声で鳴くのみで、意思の疎通は叶わない。
そんなものたちと俺たちは、五十年以上戦いを続けてきたのだという。

俺がその戦に身を投じたのはせいぜい三年かそこらだろうと思うが、近侍の薬研藤四郎は、開戦当時からずっとこの本丸の成り行きを見守ってきたのだと言っていた。
昔はアルジは人の姿をしていたんだ。審神者といって、呪術で色んなことをしてみせてくれた。その頃ならおまえさんに近侍を代わってやることもできたんだが、と。
そのころは、こんな悲しいことばかりじゃあなかったんだぜ、と。
その「かなしいこと」とやらを、限界まで濾過したように澄み切った瞳を俺に向けて、ぽつんと言った。

演練の舞台に選ばれた場所は、一面の荒野だった。ひび割れた大地のほか、見渡す限り何もない。
ヒントが少なすぎて、いつの時代のどこなのか見当もつかないが、そんなことはもはやどうでもいいことだし、空を遮るものがないこの場所は、永遠に寝ころぶにはむしろ最適な場所であるようにも思えた。
水面にできた波紋がいつの間にか消えてしまうように、俺という異物を排出した虹色の渦は、俺の足元でまだら模様になり、さらに淡くほどけて消えていく。
肝心の演練のお相手は、どうやら俺とはあべこべに上からおいでになるようだ。声が届く程度離れた上空、こちらはまだまだ鮮やかな七色の渦がぐるぐると回っている。

そのまま暫く待っていると、渦の中心から、黒い靴底が覗いた。そしてゆっくりと足が落ちてくる。これはなにやら逆子がうんしょうんしょと這い出してくるようだなぁ、と不意におかしくなり目を細めたら、その弾みでぽたたっと涙がこぼれた。
命乞いだと勘違いされたら困るから、相手の前では笑わないように気を付けよう。笑うと涙が出る自分の変ちくりんな癖を面倒に思いながら、濡れた頬を手で拭った。
虹の衣を剥ぎ取られるようにして降りてきた男の体躯は逞しく、腰に下げている逸物からも、太刀であろうと見て取れた。黒い髪、黒い武具に黒い装束、いい趣味だ。これでどこかに金の装飾でもあれば俺の好みどんぴしゃだなどと思いながら見とれていると、そいつは目の前まで歩み寄ってきて律儀にも握手を求めてきた。
「ん、待たせたねぇ。名乗る必要はあるかな？」
君はへし切長谷部だろう、と名を呼ばれ面を合わせればその瞳は金色。
「……先に礼を言っておく」
「え？」
「おまえのような美しい刀に斬られて眠れるとは。俺は他のやつらに比べて、なんて幸運な刀だろう。本当に、申し訳ないくらいだ」
「えっ、あ、ありがとう？？」
「ああ。それじゃ、よろしく頼む」
握手を済ませて、試合の配置につくためそそくさと背を

向けると、待って待ってと慌てた声で呼ばれ、肩を掴んで止められた。
「っ、なんだ」
「君、へし切長谷部だよね？」
「そうだが」
「なんか、僕の知っているへし切長谷部と違うんだけど。昔会ったときはもっと冷たかったよね？こっちに来てから演練で会うときもいつも無愛想でぶっちゃけ感じ悪かったし、敵に回るときも」
「悪いが他のへし切長谷部のことは知らないし、おまえのことも初めましてだ」
「そんな、嘘だろ」
「嘘なんかついてどうする。俺は――」
　こんな話を、これからすぐに別れる相手に話して何になるのだ、と思い、言い淀んだ。
「俺は？」
「……」
　余計なおしゃべりなんてしないですぐに始めて終わらせて欲しかったのに、相手の目には殺気の欠片も見えず、刀の鍔に手をかける気配すらない。
　こちらから仕掛ければさすがに応戦してはくるだろうが、空気を読まず駄々をこねるように斬りかかってのドタバタ劇というのは、最期の舞台にしてはあんまりに無粋な気がしてならなかった。
「はぁ…。俺は…俺は、おまえの知っているへし切長谷部とは、おそらく大分違うと思う」
　俺はため息をわざと長めかつ大袈裟に吐いてから、渋々と口を開いた。
「昔会ったと言ったな。俺は自分がどの時代にどの主人の所にいたかということを、聞かされて知ってはいるが、覚えていない。だからおまえのことも覚えていない」
「記憶がないの？たしか君の本体は現存して政府に保管されていたはずなのに」
「さあ、本体が残っていたかどうかなんて知らないさ。なにせ、ここに顕現したときの記憶すらないんだから。俺は、今のアルジの元に下げ渡される以前のことを、何も覚えていないんだ」
「下げ…渡された？審神者から審神者にってことかい。嘘だろう、どうしてそんな」
「事実だ。いや…事実だと、聞いている。俺には刀として致命的な欠陥があった。不良品ってやつさ。それで他の本丸に下げ渡されたらしい。移った先でも俺は一度も戦場に出たことがない。だからな、他の本丸のへし切長谷部にも、会ったことがないんだ」
「致命的な…欠陥って」
　目の前の太刀の持つ金色の瞳をいとおしく見つめながら、俺は自身の刀に手を掛けた。すると反射的に相手も太い柄に指を掛ける。
「見ろ」
　じわじわと右手で刀身を引き抜きながら、一方で何もし

ていない左腕がだらしなく揺れているさまを、自らの視線で指し示した。両手で構えられない姿を見て察し、動かないのかい、と憂いた声が降ってくる。優しい奴だ。
「ああ、動かない」
「それが、君の欠陥？」
「いや。動かなくなったのはついさっきだ」
「は？」
「さっきおまえに肩を掴まれたときに、たぶん折れた」
「嘘でしょ！？」
「嘘じゃない。他の個体よりぶっちぎり脆いんだ俺は。庭で遠征呼び戻し鳩に足を踏まれたときは三週間松葉杖をついたし、廊下の曲がり角で山伏国広とぶつかったときは意識が戻るまでに一ヶ月半かかった。今では骨が折れた程度では驚かなくなったよ」
「脆いなんてレベルじゃない！」
　信じられない、どうやって今まで生き残ってきたの、と珍獣を見るような目で見下ろされる。金の瞳は、俺を心配したせいか蜂蜜のように淡い色になり、それは俺に何かを思い起こさせた。
　こいつは誰なんだろう。不思議だ。見覚えがないし、言葉を交わすのも初めてのはずなのに、こうして至近距離で見下ろされると、ちりちりと胸の焦げる思いがする。
「……本当にな。今まで他の犠牲のもとに、おめおめと生き延びてしまったんだ。しかしそれも今日で終わりだ。おまえにはいくら礼を言っても足りないな」
「え？へし切長谷部君、ひょっとして君、僕と戦って死のうと思ってる？」
「ああ、そのつもりだし、つもりでなくとも、やり合えば結果そうなるさ。なにせ俺の戦闘力は兎以下だからな！」
「なんでそんなに堂々としてるの！？僕だって君に殺されるつもりでここに来たのに困るよ！」
「はァ？何言ってるんだおまえ、俺がおまえに勝てるわけないだろうが常識的に考えろ！悪いが死にたいなら、俺を殺したあとで自決でもするんだな」
「自分ばっかり刀の本分で死のうなんてズルい！僕だってまだ感染していない他の刀との真剣勝負の末にかっこよく幕を降ろしたいんだ！」
　これは困ったことになった。どうやら死にたがりのお仲間だったらしい。まあ考えてみればそうか。今になって演練になんて、しかもたった一人で出てくる奴なんて、俺と同じ境遇の『死にそびれた刀』くらいだろう。
　だからといって、あいにく初対面の刀に同情してやれるほどの慈愛は持ち合わせていなかった。ほんの一撃、それを貰えるだけで俺は一抜けなのだ。この滅びを待つだけの世界から。
「…ああ、分かった分かった、とりあえずやるぞ、ほら。万に一つおまえが負けるなんて奇跡も起こるかもしれないだろ？さあ最後まで諦めず、全力で向かってこい！」
「ええううううん…なにこの敗者の余裕…どうしよう…全然負ける気がしない…」

こっちはとうに刀を抜いているというのに、相手の太刀は両手を突き出すポーズでひたすら拒否を訴えながらずりずりと後ずさっていく。
「来ないなら俺から行くぞ。なに心配するな、いくら俺でも蚊に刺されたくらいのダメージは与えられるはずだ！」
「虫さされじゃ死ねないし！死んだら死んだでイヤだ！」
「あっ！こら待て！敵前逃亡は許さんぞ！」
ついに走って逃げ出しやがった。逃がすものか、このチャンスを逃したらもう他のまともな刀と出会えることはないかもしれない。機動だけは他の刀に誇れる俺の足は、あっという間に鬼ごっこする男の背中に追いついた。
「うわっ！なんで足だけ速いんだよ！骨密度スカスカ打刀のくせに！」
誰が骨密度スカスカ打刀だ。慌てて走る速度を上げた男の黒い襟足が風になびいて、それが俺の胸をどうしようもなくときめかせた。
楽しい。刀を振るうのが久しぶりだから、だろうか？
いや、そうじゃない。俺は前にもこんなふうに、おまえを傷つけようとして、その背中を追いかけていた。
「ははっ、おい、いいのか？敵に背を向けたまま斬られて死ぬのは無様だぞ！**燭台切！**」
「えっ――」
奴がはっと振り返った隙をついて刀身を振り下ろした。すぐさま応戦し抜かれた太刀で受け止められたら、びりびりと手首から伝わる衝撃で腕の筋が五、六本切れた感じがした。感じがというか、切れた。
「……確かに、君の言う通り、訓練だからって手を抜くのは格好つかないよね」
やばい。もう右手も動かない。…やばい？いや、なにもやばくない。予定どおりだ。さっきの一瞬、俺はどうかしていた。こんな強そうな太刀とやり合って万に一つも勝機があると思っていたのだろうか。
あっさり刀を取り落として膝をついた俺の頭上で、奴は黒塗りの『鞘』を腰から引き抜き、まっすぐにそれを振りかざした。
「な、ま、待て、なぜ刀を使わない」
「運が良ければ鞘でも死ねるよ？運が悪かったら、そうだな、そのときは――君がいらない君の命は僕に頂戴」
ごっ、と、頭蓋骨に大穴が空いたような衝撃を受けて、続けてぐらんぐらんと景色が回り、まるで蟻地獄に沈み込むかのような睡魔に五感を一切奪われていった。

ああこれで、ようやく、死ねるだろうか。
（もうこれ以上、生きていたくない）
そういえば、なぜ俺は、あの太刀の名を呼べたのか。
（記憶が少し戻ったのかもしれない）
けれどもう、どうでもいい。

ずっと、自分が何者かわからないままで、誰の役に立つこともできず、ただ息をしていた。
何が欲しいのかも言えない分からないくせに、漠然と足りないと感じながら。
死んでいるのが自然なのだ。俺のような、弱い刀。
でもなぜ…俺だけが、こんなに弱かったのかなぁ…。

＊＊＊

目を覚ましたら、部屋に随分と物が増えていた。
幾何学的な形の書棚に何冊かの本が仕舞われている。ばらばらに変な方向を照らすライトが銀の支柱に果実のようにくっついており、俺の寝かされている布団には直接光が当たらないが、ぼんやりと部屋全体を明るくしていた。
体を起こして室内を見回してみると、奥にもう一つ寝台が置かれていた。間違いなく俺の部屋ではない。かといって歌仙の部屋のように床に積むほど本があるわけでもないし、薬研の部屋のような匂いもしない。
いったい誰の部屋で寝こけてしまったのか。最後に酒を飲んだ記憶を手繰り寄せて首を傾げていたら、すらりと目の前の襖が開かれて、一人の男が入ってきた。
「……やぁ、目を覚ましたんだね」
右目は眼帯で隠れていたが、もう片方の目は、起き上がっている俺を見つけて驚いたように見開かれた。その男が同じ刀剣男士であることは気配で分かったが、見覚えのない刀だ。全く知らない刀かというとどこかで見たような気もするのだが、少なくともこの本丸では見かけたことのない刀だった。
「おまえは…誰だ。新しく来た刀か？ここはおまえの部屋か？俺はどのくらい寝ていたんだ」
「……まぁ、そういっぺんに質問しないでくれよ。順番に話すから」
男は俺の隣に来て、胡座をかいて座り、じっと俺の顔を見つめた。こちらの挙動を観察するような視線は居心地の悪いものであったが、不思議と目をそむけることができなかった。
「へし切長谷部君」
「長谷部でいい」
「じゃあ長谷部君、いつ出陣したか、覚えてる？」
「出陣？……俺が？…いや」
「覚えてないんだね。無理もない、命からがら撤退する最中で、ひどく頭を打ったらしいから。なんとか帰って来られたけれど、今日までひと月以上もずっと目を覚まさなかったんだよ。良かった、気がついて」
良かった、ともう一度繰り返し呟いた奴の顔には、素直な安堵の色が浮かんでいる。

「久しぶりに起きて喉が渇いてるだろう。ほら、とりあえず水でも飲んで」
　男はそう言って立ち上がり、小さなサイドテーブルの上から硝子の水差しとグラスを取り、水を注いだグラスを俺の手に握らせた。そして水差しを俺の傍らに置いてまた元の位置に座り、俺の表情を窺っている。
「ひと月も…寝ていたのか」
　確かに喉が渇いていたらしい。一口つけたら、土に染み込むようにするすると喉におちていく。あっという間にからになったグラスに、男がまた水を注いでくれた。
「その間、おまえが俺を看てくれていたのか」
「そうだよ。ああでも気にしないでくれ。僕は君が寝ている間に来たばかりの新人で他にやることもなかったし、そうするようにという指示もあってのことだよ」
「指示…薬研か。まったく、近侍だからって余計なことしやがって。顕現したばかりなのにひと月も怪我人の看病に時間を使わせて、悪いことをしてしまったな。後で俺から代わりに文句を言っておく」
「そんな、いいんだよ。こうして長谷部君も良くなったことだし、戦ならこれからいくらでも出られるじゃないか」
「それもそうだな。看病の礼に俺が鍛えてやろう。後で手合わせしようじゃないか」
「え、えー…大丈夫かな」
「なんだ覇気がないな。そうだ、薬研が帰ってきたら俺と同じ第一部隊に入れてもらおう。一日で特を付けてやるからな、覚悟しろよ」
「分かった分かったよ、でもね君はまだ本調子じゃないんだから無理は禁物だよ。薬研君にはあとで僕が話しておくから、君はもう少し寝て万全の状態にしてくれ。夕食ができたら起こしに来るよ」
「……そうか、悪いな」
　消化にいいものを作らないとね、と独り言を言いながら腰を上げ、廊下に出ていこうとする背中に尋ねた。
「あ、おい、おまえの名前を聞いていないが」
　ああそうだったね、と振り向いたときに黒い前髪がさらりと揺れて、その情景に既視感があった。
　説明のつかない感覚に襲われた。この男に名前を呼ばれて微笑まれると、触れて確かめられない場所、心臓の中の中のその中が、燃えるように疼いた。
「僕は燭台切光忠。これからよろしくね、長谷部君」

2　誰が降る卯月

風の匂いがささやかに甘く感じられ、庭へ出てみると、しだれ桜の枝がさわさわと揺れて、絶え間なく舞い落ちる花びらが、冷え切った土の上に薄桃色の絨毯を敷いていた。

「春の景趣か…もうそんなに経ったのか」

手のひらを枝に近づけると、返事をするように花びらが一片ひらひら落ちて、俺の手の中にふわりと着地した。しかしそれには感触がなく、指でつつくと花びらをすり抜けた指先がむなしく自分の手のひらをなぞった。

「やれやれ、なんて雅じゃない感想だい、長谷部」

名を呼ばれて振り返ると、縁側に腰かけた男がゆるやかに波打つ紫の髪を風に遊ばせながら、呆れた顔を自分に向けていた。

「ゴリ…歌仙。なんだおまえ、こんな偽物の桜を見ようとわざわざ起きて来たのか？」

「いや、もう手持ちの本を読み尽くしてしまってね。珍しく早い時分に寝たものだから、それだけ早く目が覚めてしまったんだ。長谷部、今度僕をゴリラと呼んだら殺す」

「悪かった。口が滑った」

「分かればいい」

最近じゃこれがなかなか良かったよ、と言って彼の袂から一冊寄越された本のカバーには、御誂え向きに『桜の森の満開の下』という題名が付いている。

また恐いやつじゃないだろうな、と先般借りて眠れなくなった歌仙チョイスの本に対する抗議を言中に含めると、ホラアブームはもう終わりさ、と全く悪びれる様子もない。

ちなみにその俺の安眠を妨害した本を薦めてきたときに歌仙が添えたコメントは「些かばかり子供向けだが、君の好きそうな冒険活劇だよ」だったので、震えながらも律儀に最後まで読んだ俺も悪いのだが、それ以来こいつの本の紹介は鵜呑みにすまいと思っている。

「いまは是非収集したいと思っている本があるんだ。この間、珍しく演練があっただろう？そこで会った太刀がね、なんと僕達と同じ刀剣男士が書いた小説を六本木で拾ったと言うんだよ。僕が少しでいいから読ませて欲しいと強情したら、もう自分は一度読んだからと気前良く譲ってくれた。もしあの続きがあれば手に入れたい。借りっぱなしは性に合わないからね。続巻があれば、おまけに付けて返してやりたいのさ」

「六本木？そこは、今の俺たちでは練度が足りないんじゃ」

「練度もなにも、君が行けば間違いなくゾンビに襲われてデッドエンドだよ」

「何だよゾンビって。やっぱりホラーブームを引きずっているんじゃないか。それとも馬鹿にしているのか」

「ああ卑屈にならないでくれ。君の身を案じてのことだ。察してくれたまえよ」

「余計な世話だ、おまえらがそれほどに使えぬ刀と思うの

なら、さっさと俺なんか」
「……噂をすれば、御命令のようだよ」
　まるで話をわざと遮るようなタイミングで、歌仙のすぐ後ろに佇んでいたアルジが点灯した。金属同士が擦れる音を立てながら、ひとりでにレバーが下がり、遡行先を示す数字をリール上に表示する。
「ごらん、アルジは僕らの望みをようく理解してくれているようだ」
「『2』『2』『5』『0』……」
「出陣先は六本木だ。さて、薬研藤四郎を起こして、部隊に入れて貰うとしよう」
　歌仙は庭先にぽっかり口を開けたゲートを指差し、「へし切、不用意に近づくんじゃないぞ」と、まるで器屋で走り回る子供に向けるような口調で俺をたしなめた。
「そうだ。もし暇なら、手伝ってくれないか」
「俺を同行させるのか？」
「六本木に？それは僕の決めることじゃない。そうではなく、隊長殿を起こすのに、僕ひとりでは重荷だと言ってるのさ。今朝は朝餉に使われて、少し体も疲れていてね」
「ああ……」
　立ち上がり、気合いの表れか襷掛けまでした姿で廊下を歩き出した歌仙の隣について歩く。
　本丸の長い廊下の一番奥の突き当たりに、近侍の部屋は位置している。アルジの近くに配置されていないことを不思議に思い、来たばかりの頃に近侍に直接質問したことがあった。そのとき薬研藤四郎は、その身体に対して随分広い部屋を見回して、「名残だよ。昔はここで、大将と話していたからな」と答えた。
「……おまえはさっき、アルジが俺たちの望みを理解していると言ったな」
「ああ、言った」
「何を理解していると言うんだ？ただ日課のように出陣させて、労いもなく、あまりに無機質だ。この仕打ちでは、まるで――」
「まるで『道具みたい』だとでも言う気かい？」
「……」
　歌仙は憮然とした俺の横顔にやれやれと肩をすくめ、庭へ向けて手を伸ばした。依然と舞い散る桜の花びらをひょいとその手の中に閉じ込め、俺の眼前でそっとそれを開いてみせる。花びらは、彼の手のひらで萎れもせずに、ひらひらと規則的に揺れていた。
「花さそふ、嵐の庭の雪ならで、ふりゆくものは我が身なりけり。――アルジはそのことをよく分かっているのさ。だから僕の呟きに応えて六本木へ行かせてくれる。この切迫した状況下においても四季を感じられるようにと、こんな幻を見せてくれる」
「四季など、こんなまやかしを見せて何になる」
「僕らにだって世の風雅を愛でる時間が必要だろう？へし切、君だって、そのまやかしの春の香りに惹かれて、庭へ出て来たんじゃないのかい」

「それは」
「おっと、近侍部屋に到着だよ。話の続きは隊長殿を無事に起こしてからにしよう」
「無事に起こせたらな。あいつの寝起きは最悪だ」
「はは……なあへし切、君は外に出る機会が少ないから難しいかもしれないが、それでも、ふとした何気ない瞬間に季節を感じることはできる。日々の移り変わりをしっかり意識しておくことだ」
「なんだ急に」
「いや？引きこもりのニートが卑屈なことを言い出すのでついイラッときたんだ。気にしないでくれ」
「外に出たいならはやくジャングルに帰れ文系ゴリラ」
「文系と付ければ許すと思ったか、折るぞ根暗マッチ棒」

……
……
……

「だれがまっちぼうだぁ…かせんころす…」
「長谷部君、おはよう」
「……しょく、だいきり」
「そうだよ。ぐっすり寝ていたね。何かいい夢でも見ていたのかな」
「夢…？ああ、いや、……覚えていない」
「そう？じゃあ寝坊した長谷部君はまず顔を洗って、髪を整えてこようね」
　その間に朝食を持ってくるよ、と言って、すっかり身支度の整った燭台切が、まだ寝間着のままの俺の背中をさあさあと手洗い場まで押して行こうとする。
「まて、押すなって。他の奴等はもう食べ終わったのか？まだなら俺も食堂で」
「何言ってんの、とっくに食べ終わりました！長谷部君は夜更かし及び寝坊の罰として今日は出陣なしだよ。僕と庭の草むしりと掃き掃除だからね」
「な…薬研の奴、横暴すぎるだろう。せめて内番は手合わせにしろ」
「僕に言われたって困るよ。薬研君もみんなもしばらく帰って来ないから、長谷部君は長谷部君の仕事をすること！主命だよ」
「うぐ…くそっ、なんたる無様な…」
「僕の台詞じゃないか、それ」
　気は進まないが、主命と言われてしまっては仕方ない。押し付けられた手ぬぐいを首に掛けて、手洗い場の暖簾をくぐろうとして――ふと、気になって燭台切に顔だけを向けて尋ねた。
「よくあいつを起こせたな。誰の功績だ？」
「ん？」
「薬研だよ。あいつを起こすのはコツがいるんだ。普通にやったんじゃ何人がかりでやっとだったろ」
「さあ、僕は朝食の支度で厨にいたからなあ。って、人の

ことはいいから長谷部君は早く支度して！みんなが帰ってくるまでに一通り終わらせないといけないからね！」
「分かったって……ったくうっせーな」
「何か言った！？」
「言ってない」
　まったく長谷部君は見た目を裏切ってがさつすぎるんだよだいたいきみは…と廊下で始まったお小言をかわして、手洗い場に退散した。
　燭台切、あいつはよく気のつく良い男なのだが、どうにもオカン属性が強すぎるというか、俺に構い過ぎる。最近顕現したばかりの刀で、運悪くそのとき重傷でかつぎ込まれた俺の看病を押しつけられたそうだから、怪我で弱っていた俺の印象が強いのだろう。
　俺にも非があるだけにあまり邪険にもできないが、朝に目が覚めてから夜に床に就くまで、用心棒のようにぴたりと張り付かれては正直気の休まる暇がない。それだけ稽古も出陣もしていないわけだから、あいつの練度を上げることの妨げにもなる。
　やはり、そろそろはっきり言わなければ。冷たい水で顔を洗って、手洗い場の鏡を見ると、眉をしかめた見慣れた顔と目が合った。俺は甲斐甲斐しく世話してもらわないといけないようなナマクラでも新人でもない。ここに来たのもあいつより随分前だし、練度だってずっと上だ。怪我人扱いはいいかげんやめてくれ、と。
「あっ、長谷部君。ちょうど朝食を持ってきたところだよ。僕も皆を送り出すので忙しくてまだだったんだ。さあ一緒に食べよう」
　部屋に戻ってきたら、畳の上に足付きの卓盆を二つ並べて、燭台切がお櫃から飯をよそっているところだった。飯茶碗の中にこんもり盛られた山の頂上に、鶏のとさかのような形の舞茸をちょんと乗せて、満足げに俺の盆に置く。
「炊き込みごはん……」
「そうだよ、好きって言ってただろう？」
　俺がこくんと頷くと目を細めて微笑み、味噌汁の具も君の好きな茄子にしたよ、さあ座って、と俺を促した。飯が冷めてはいけないので、ひとまず俺は素直に座る。
「茄子、もっと植えようかな。漬物にしても君があっという間に消費しちゃうし、厨番としてはいっぱい食べてくれるのは嬉しい限りだけどね」
「畑は一杯だろう。わざわざ植えなくても、足りない分だけ買えばいいんじゃないか」
「買うったってどこで」
「どこって…万屋だろ」
「あ。そうか」
「ひょっとして、まだ行ったことがなかったか？そろそろ来て二ヶ月経つだろ。厨番なんて言って料理ばかりしてないで、いいかげん他のことも覚えないといつまでも隊長になれないぞ」
「うーん、いいんだよ僕は。それより長谷部君、食べる前

にはどうするんだっけ？」
「何がいいんだよ……いただきます」
「よろしい」
　しゃべくりながら味噌汁をすすったら、すぐさま教育的指導をされてしまった。こういう口うるさいところ本当にオカン然としている。いっそ白の割烹着でも着たら笑えるほど似合うと思うのだが、畑を耕すためだけに髪のセットをするような奴が着てくれはしないだろうな。
「なに考えてるの、長谷部くん」
「おまえが白の割烹着を着てくれないかなって」
「は？いやだよ格好わるい」
「一周まわって格好いいかもしれんぞ」
「何周まわっても着ないよ。もっと味噌汁飲む？」
「うん」
　教えられた三角食べがちっとも身につかないことをまた言われるかと思ったが、今朝は見逃してくれるらしい。味噌汁のおかわりまで大きな水筒に用意してきていた燭台切が、元通りの量まで俺のお椀に注いでくれる。
「君は本当に茄子が好きだね」
「味も栄養もたいしてないところが好きだ」
「え、そんな失礼な理由があったんだ」
「肉と炒めたら肉の、魚と煮たら魚の、脂やダシを吸って旨くなるだろ。そういうところが、なんだろう…いっしょうけんめいだと思う」
「い、いっしょうけんめいって」
「笑うな」
「一生懸命な茄子…く、くふ…」
　なにかツボに入ったらしい燭台切が口を手で覆って笑いをかみ殺しながら、それじゃあもっと一杯食べられるように僕らも一生懸命畑仕事しなくちゃね、と言って外の方を指さした。そういや今日は一日野良仕事なのだった。口をへの字にして嫌そうな顔をした俺のことを、こおら、と叱りつけて、草むしりはともかく、掃き掃除の方はこの時期楽しいはずさ、と言ってにこりと笑った。

　一通り内番を終えて、縁側に座って一息ついていると、燭台切が水差しとグラスを二つ持って隣に座った。
「麦茶がよかった」
「わがまま言わないの。さっき煮出したばかりでまだ熱いから、後で冷ましてからあげる」
「掃除しても、意味がなかったんじゃないか？」
　目線だけで庭の方を見るように促すと、さっき掃いたばかりの庭に、桜の樹から降る花びらが再び積もりかけている。この桜から降る花びらは、専用の箒でしか掃けない。
「でも、楽しかっただろ？」
「草むしりと掃き掃除の何が楽しいんだ。第一、主の気分次第ではこの桜はずっと続くんだぞ。切りがない」
「僕は楽しいけどなぁ。この庭の景色が変わったら、それだけ時間が経ったんだって思えるだろ。日々の移り変わりをしっかり意識していたいからね」

「……他の奴にもそんなこと言われたな」
「へぇ。誰だい？」
「ゴリラだよ。文系ゴリラ」
「…君って奴は。聞かれたら怒られないのかい」
「勿論、歌仙兼定には内緒にしてくれ」
飲み干して空になったグラスを置き、その手で人差し指を立ててそう言うと、燭台切も愉快そうに目を細め、俺と同じ指をすっと立てた。
「僕は共犯か。いいよ、でも」
燭台切は手のひらを開いて俺の人差し指を握り、すっと自分の顔を俺にすり寄せた。
「口止め料は貰えるんだろう？」
「へっ」
間抜けな声を出した後、俺は何も言えなくなった。燭台切の顔が視界いっぱいに広がり、唇を塞がれたのだと気づいたときには、口のなかで舌が二つに増えていた。
舌と舌が離れる瞬間聴こえた音で、体温が急速に上がる。
「なっ…にする！」
驚いた俺は、空いていた左手で燭台切の胸をどんと突き飛ばした。思い切りやったつもりだったが、奴の体はほんのわずか後ろに傾いた程度で、びくともしなかった。くそ、どうなってんだ。太刀ってのは、来たばかりでもこんなに頑丈なものだったか？
「おい……」
「ん？」
「指、はなせ」
「ああ」
掴まれたままの人差し指が痛い。燭台切は自らの指の股に俺の指を挟んで名残惜しげに上下させた。
「ごめん。さっき君がいきなり突き飛ばしたりするから、思わず握り締めちゃった。折れちゃったかな…」
「この程度で折れるわけないだろ。いいから離せ」
「はいはい」
やっと接触している箇所がなくなったので、俺は素早く燭台切から距離を取り、手を伸ばしても届かない位置から問いつめた。
「なんで、こんなことするんだ」
「こんなことって？今のキスのこと？」
「キ…！そ、そうだ！」
やっぱり接吻のつもりでしたのか！男色なのか燭台切！ん？刀同士でも男色と言うのか？いやしかし今与えられている肉体は男性のものであるから……。
「しちゃいけなかった？」
「は」
「だって、みんなが帰ってくるまでまだ時間があるし、せっかく恋人と二人きりなんだから、キスくらい」
いいじゃないか、という声が鼓膜に吸い込まれて大きく膨らむ。コイビトナンダカラ？急に頭の中にもやがかかり、それは耳から入り込んだ燭台切の声に触れると桃色の煙に変化して嵐となり吹き荒れた。

何かがしきりに降っている。煙のように見えたそれは、よく目を凝らせば、桃色の花びらが嵐のように降り続いているのだった。
ああなんだ。これは、桜の花か――。
「これくらい、いつも、してるよね。それなのに、今日はいったいどうしたの？長谷部君」
「……いつも、してる？」
「うん」
「俺とおまえは、こいびと」
「そうだよ。忘れちゃった？」
「……忘れてない。そんなわけないだろ？俺は、」
俺は、こいつと付き合っているんだった。
だからいつもこうして俺に構ってきて、食事も内番も一緒で、隙あらばやらしいことを仕掛けてくるんだ燭台切はそうだそうだった。
「――俺は、こんな日も高いうちからべたべたと引っ付く趣味はないと、そう言ってるんだ」
「ああそっか、恥ずかしかったんだね」
「誰が恥ずかしいって？恥ずかしいのはおまえの春まっさかりな頭の方だろ、ばか、少しは自重しろ」
「ええー、冷たいなぁ、長谷部君は」
「うるさい。俺はもう部屋に戻る！」
「わ、こんな明るいうちから長谷部君の部屋に誘われちゃった！？どうしよう…潤滑油取ってきていい？」
「誘ってない！ついてくるな！」
「あ、待ってよ長谷部くん！」
ついてくるなと言ってるのに、飲みかけの水差しとグラスをわざわざ盆に片づけて、それを両手に持ったまま俺の後ろを歩いてくる。
「長谷部くーん！行き過ぎ行き過ぎ！長谷部君の部屋はこっちだよ！」
振り返らずにずんずん廊下を進んでいく俺の手首を掴んで引き留め、今更キスくらいで動揺しすぎだよ長谷部君、と意地の悪い顔で笑った。
「痛っ…」
「あ、ごめん、手痛かった？」
俺が呻いたのに焦って放された右手首をさすってみると、そこは無事だったのだが、ついさっき握られた人差し指は赤く腫れ上がっていた。道理で痛むわけだ。
「折れてる！」
「あ～…やっぱり…」
「やっぱりって何だ、おまえのせいだろうが！？」
「難しいんだよ、力の加減が……」
「どう加減を間違えたら恋人の指を折るんだ！立派なＤＶだぞこれ。出るとこ出るぞ」
「見逃してよ！ほら、誰にでも、触れるものみな傷つける時期ってあるだろ？ナイフみたいに尖ってるんだよ！」
「分かってやらないし、おまえが悪い。あと、ここは俺の部屋じゃない」
ナチュラルに連れ込まれた部屋は燭台切の匂いがそこか

しこに漂っている。俺を看病してくれていた部屋だ。あれバレちゃった？と男がいけしゃあしゃあと舌を出す。
「はっ、よこしまなことばかり考えていた罰だな。桜の花がここまで入ってきてるぞ」
「え、ウソ？ああー本当だ！襖開けたままだった！」
「ふ、はは。ざまぁ」
いつもきれいにしている燭台切の部屋の床に、庭の桜の花びらが散乱して、まだら模様の絨毯を敷いていた。寝ころんだら気持ちよさそうだ、と思い、すぐ実践に移す。
感触がないことは分かっていたが、俺が倒れたのに反応して花びらが舞い上がり、鼻先を甘い匂いがくすぐる。
「あ！だめだよ長谷部君、すぐ掃除するんだから」
「少しくらい良いだろ。ああ…それにしてもよく降ったな。主に教えてさしあげないと、この調子だと本丸が埋もれてしまうかもしれない」
「だからマメに掃くんだよ。……また泣いてるし」
言われて頬に手をやると、しっとりと涙で濡れていた。燭台切が慌てて大きな声をあげたのがおかしくて、つい笑ってしまった弾みでこぼれたらしい。
「勝手に出るんだ。おまえに泣かされたわけじゃないから、気にするな」
「どうせなら、僕に泣かされてほしいんだけど」
「調子に乗るな。おまえの練度じゃ、まだ――」
まだ…？と声がすぐ近くで聞こえて、ぎくりと体がすくんだ。燭台切は俺のそばに膝を崩して座ると、無防備に寝そべっている俺の頭からつま先までを、視線でなぞるようにしてゆっくりと観賞していた。優しいふりした瞳の奥で燭台の火にくべられた黄金が怪しく揺らめいている。
「あ…う、ええと、そういう、意味で？」
「当然」
「そ、そうだよな。恋人だからな。すすすまない、なぜだろう俺は今日すこし緊張しているみたいで」
「ああ、うん。大丈夫、今日はしないよ」
「えっ？」
「してほしかった？ごめんね、みんなが帰ってくるとまた冷やかされちゃうからさ」
「そう、か。そうだな。さすがにそろそろ帰還してくる頃だろうしな」
「うん。あーあ、なんかもう掃除するのも面倒くさいや」
燭台切はそう言って欠伸をし、俺の隣に俺と同じ格好で寝そべった。襖の向こうに見える庭では、なおも花吹雪が起こっていて、ときどきはぐれた花びらが俺たちのところまでひらひら落ちてくる。
「花さそふ、嵐の庭の雪ならで、ふりゆくものは…我が身なりけり…」
俺がぽつりと呟いた歌に、燭台切は失礼なほど目を丸くして、「うそ。君にそんな風雅な趣味があったなんて！？」と、紛れもなく失礼な台詞を吐いた。
「教えてもらったんだよ、歌仙に」
「彼の作？」

「いや違う。承久の乱の計画を知ってしまったために幽閉された藤原公経の歌だそうだ。春の嵐が桜の花びらを巻き込んで雪のように降っている、だが実は、老いさらばえて古（降る）くなりゆくのは私自身だ…という意味らしい」
「……暗い歌だ」
「そうか？俺は割と好きだ。だから覚えてしまったのかな。これほど華やかな景色の中で、自分はひとりぼっちで、ゆっくり衰えていくんだ。俺はそんな静かな時間を想像すると、とても落ち着く」
　根暗、とぼやいた燭台切の太股を横から蹴ってやった。油断していたのか大袈裟なほど痛がり、その足癖直さないと夕飯は抜きだよと言うので、仕方なく一発だけで許してやった。
「まだ時間があるから、このまま少し寝てていいよ」
「ああ、なんだか眠くなってきた…だが、俺も手伝わないと、おまえ一人では骨が折れる、だろ」
「はは、骨が折れてるのは長谷部君の方だし。その指も手当てしておいてあげる。さあ、もう休んで」
「わるい、な……」
「……おやすみ、はせべくん」
　眠るよう言葉をかけられればかけられるほど、睡魔が後から後から襲ってくる。まぶたが重くて開けていられなくなり、抗うのをやめて目を閉じたら、たちまち周囲の音はかき消えていった。

3　皐月が勝負時

遠くで俺を呼ぶ声がする。
《長谷部……長谷部……》
止女様、俺はここにいますよ。
《どこ…どこにいるの…長谷部……》
どうしました？そんなに心細い声を出して。またお体の具合が悪いのですか。それともお腹が空いただけ？
「長谷部ーーっ！！」
はいはい今あげますよ、そんな大声を立てないで。今日は俺、外でたらふく喰ってきましたからね、軽く三食分はデザート付きで満たしてさしあげられるかと思います。
まったく貴女は本当に喰い意地が張っている。そんな調子ではあっという間に食べるものがなくなってしまいますよ。ねぇ、聞いていますか？とどめさま……。
「長谷部ーーっ！！早く起きろ！おーいっ！！」
「……」
目を開け、のろのろと体を起こして辺りを見回すと、そこは変わり映えしない自分の部屋であり、部屋の外から聞こえるのは、近侍が俺の名を呼んでいる声だった。
「……薬研か」
くそ、なんかよく覚えてないけど儚げな美少女が出てくるゴシック・ロマンス系の良い夢を見ていた気がするのに、『態度も練度も魔王刀』こと薬研藤四郎に途中でブチ壊されてしまったようだ。腹立ちまぎれで乱暴に襖を開け放して外を睨みつけると、目の前の庭にデカい草の塊が落ちており、俺の名前を呼びながらガサガサ左右に揺れていた。
「！？」
一瞬言葉を失ったが、よく見たら細っこい人の足が生えているので、声の主が自身の体格以上の質量の草を両腕で抱えた結果こうなったのだと理解できた。
「こんな朝っぱらから何の用だ、薬研」
「お、いるんじゃねえか。呼んだらさっさと起きてこいや寝ぼすけはせべ（ガサガサ）」
「おまえが言うな。自分は起こされても起きないくせに、たまに早起きしたからといって他人の安眠を妨害するとは、許しがたい」
「パジャマで凄まれても反応に困るぜ（ガサガサ）」
「ガサガサうるさい！このパジャマはおまえがショッピングモールで拾ってきたんだろうが。そっちこそいきなり森の精みたいな格好で出てきて何を始める気だ？」
「厄除けだってよ。とりあえず、このままじゃ身動き取れねぇんだ。早く着替えてこっちに来て手伝ってくれ」
言っている意味が全く分からなかったので、しかたなくジャージに着替えて庭に降り、草の塊を上から半分引き受けた。抱きかかえると、葉や根っこから爽快な香りが漂い、起き抜けで鈍っていた鼻腔をすうっと通り抜ける。
「すごい香りだな」

「目が覚めたろ？それ全部、菖蒲だよ。朝に青江の旦那がどっさり置いて行きやがった。昨晩には自分でやると言ってたんだが…今朝に『六本木』が出たからな、歌仙と張り切って出かけて行ったよ」
　おかげで押しつけられちまった、と言って玄関の方へ難儀そうに方向転換し歩いて行く。俺はその隣に並び、厄除けとは何のことだと尋ねた。
「俺もよくは知らん。何でもこの強い香気に邪気を祓う力があるそうだ。玄関の軒に吊しておけば厄除けになると言ってた。まあ大昔に聞いた話のような気もするんだが…そういうのは家を守る女の仕事だったろうからな」
　そんな謂われがある植物なのか。戦場で育った薬研と違い、自分は家に長く飾られていたことがあるらしいから、そんな光景を一度は見たことがあるかもしれない。記憶の片鱗でも見つからないかと頭の中を探ってみたが、やはり何一つ思い出すことはできなかった。
「それにしてもこんなに大量の菖蒲、青江の奴はどこで集めてきたんだ？」
「ああ、それなら知ってるぜ。前々からせっせと畑の一部を使って育てていたからな。愛着も湧いているように見えたんだが、全部根っこからぶちぶち抜いちまって」
「花は取ってしまったのか？」
「花？」
「ほら、紫色の」
「ああ。長谷部、そりゃ花菖蒲だ。『アヤメ』って呼ばれてる方だよ。確かに葉はそっくりだが、青江が育ててたこいつは別の菖蒲だな。花も咲くには咲くが、ちっこくて殆ど目立たない黄緑色の玉みたいなやつさ、よく見りゃいくつか咲いてると思うぜ」
「…本当だ。葉はそっくりなのに、こっちの花は随分地味なんだな」
「おまえさん面食いなのはいいがな、見かけの可愛さに騙されないこった。こっちの菖蒲は、根と茎に含まれる精油に鎮痛作用があって、昔から薬草として重宝されているんだぜ。だが間違えて『アヤメ』の根と茎を飲んじまうと、そっちには毒がある。魔を祓う力があると言われているのもこの地味な菖蒲の方だけだ」
「俺は面食いなのか？」
「ん？ああそうだった、覚えていないよな。俺たちがまだ人の手で振るわれていた頃の話さ。長谷部は号を貰う前から神格とか一切関係なく一貫して不細工とは話さなかった。あれには正直若干引いた」
「全然覚えてないが、不細工な付喪神なんているのか？」
「あーそれそれ前もそう言ってたぜ。そもそも無意識に視界から追い出してたらしい。ドン引いたが面白えやつだと思った。だから、信長さんから号を貰って一緒に戦に出られるようになったときは、嬉しかったよ」
「……そうなのか」
　まるで思い出せない。過去の人間である織田信長の愛刀として振るわれていたらしい自分、未来の人間である審神

者なるものの操る呪術によって使役されていたらしい自分、どちらも自分のはずなのに姿形さえイメージできない。今の俺がすぐに思い浮かべることのできる自分は、この本丸で、レトロなスロットマシーンの形状をした『アルジ』が日課的に開く時間遡行ゲートを使い出陣する他の刀剣男士たちを見送るだけの、戦力外な弱者の姿だった。

「……まーた暗いこと考えてやがんな」

誰も気にしてねぇと言ってるだろ、と薬研が束の中から一本引き抜いた菖蒲の刃を剣に見立てて俺の腕をぺしぺしと薙ぎ払ってくる。

「俺が気にしてるんだから、誰もじゃない」

「はぁー、子供みてぇな返ししやがって。信長さんとこでも大概自己中な奴だったが、そんな風にウジウジ悩んでるとこなんて見たことなかったぜ？ここの前にいたとこでは狂暴で手がつけられなかったと聞いてるし、その前は審神者に忠実な優等生だったらしいし、キャラ変更多すぎだろ」

「読者の辛口レビューみたいに絡むな。第一、覚えてないのに答えようがない。……ん？待て、『その前』って何だ？ここの前が、俺が顕現した場所じゃなかったのか？」

「ありゃ？話してなかったか？」

「聞いてないぞ。まさか…まさかとは思うが、俺は二回も主から下げ渡されたって言うのか」

「信長さんを入れたら三回だな（笑）」

「なにが(笑)だ！我ながらいらない子にも程があるだろ！これはひどい…なんで一思いに刀解してくれなかったんだ」

「刀解するには惜しかったからだろうな」

「戦えもしないのに、何が惜しいって言うんだ！」

「そうわめくなって。下げ渡されて来たのはおまえさんに限らねえし、気持ちは多少なりとも分かるつもりだけどな、少なくとも此処では、おまえさんがいないと困る。惜しいどころの話じゃねえよ」

「や…薬研……」

「さぁ、まずはこいつからだ」

どうしよう俺たちの近侍がこんなにもイケメン、と不覚にもちょっと感動しているうちに庭を抜けていた。しばらく誰にも使われず放置されていた玄関は、足元の土が雑草に埋もれてしまっている。

まずは互いに抱えていた菖蒲の山を降ろし、門に掛かっている閂を力を合わせて引っ張りにかかった。長い間開けることがなかったので、鉄金のかすがいが錆び付いており、二人がかりでやってもなかなか動かない。

やっとの思いで閂を引き抜き、そのままどたっと地面に尻餅をついた俺を、薬研がけらけらと笑った。俺の息が上がっているのを見て「ほんと体力ねぇなあ」と尚も笑うので、分かっているのならこれ以上働かせるなと悪態をついたら、ここからが本番だと言って門の外へ出て、屋根の端から張り出した軒の部分を指さした。

「さて、青江の旦那いわく、あそこにこれを何本か吊るせってわけだが…このままじゃ届かねぇ。そこでだ、俺が何本か持って飛び移るから、長谷部はこう、手を交差させて、

この辺りで構えててくれ」
「まさか、俺をジャンプ台にする気か」
「おうよ」
「折れる！！」
「そのくらいで折れねぇって」
「そのくらいで折れるから言ってるんだ！屋根に登るなら蔵から梯子を持ってくれば済むだろうが」
「まぁその通りなんだが、うっかり失念しててな。それに」
「それに？」
「梯子取りに行くの、面倒じゃねえか……」
「……おまえ、俺の体を何だと思ってるんだ」
「頼むぜ長谷部。もし怪我しても、いつもの薬を飲ませてやるから。そろそろ欲しい頃合だろ？」
「……それは卑怯だぞ」
「じゃあやめとくか？」
「……くそ、分かったやればいいんだろ、やれば」
薬研の薬を飲めば、また廊下で山伏国広と接触事故を起こしたときのように一ヶ月以上も骨がくっつかないなんてことにはならないだろう。渋々言われた通りの位置に立ち、腰を落として両手を交差させ、力を込めた。
「よっし、じゃあ行くぜ！」
薬研が菖蒲の葉を束でわし掴み、離れた位置から助走を開始する。態度のでかさと豪胆な口調に反して小柄な体が、ほとんど足音もさせずにひゅんと距離を詰めてきた。
これだけ小さい体なら、案外支えられるかもしれないと緊張が少しゆるむ。薬研が地面を蹴った。俺の重ねた両手の上に飛び乗り、またそれを蹴って跳躍した。
びしびしびしっ！
「っ！～～～～！！！」
ハイ折れた～。小さいし大丈夫かもなんて思った数秒前の俺は死んでください～。交差させていた両手が離れ、だらんと勝手に垂れ下がる。ダメだこれ上腕骨が両方逝った感じだぞ。もう今日の俺は箸も持てない。
「長谷部ー！こんな感じでいいかー？」
薬研が屋根の上から呑気に声をかけてくる。このやろう俺がこんなに言葉通りの意味で骨を折っているというのに、少しは心配しろ。
「どのくらい吊るせばいいんだろうな？多い方がいいよな」
薬研は菖蒲を小さい束に分け、瓦と屋根板の隙間に間隔を空けて差し込み、手持ちの束がなくなったところで、身軽に上から飛び降りた。
「んー、言われた通りにしたが、まだ寝床にできるくらい残ってるな。仕方ねえ、長谷部、もう一度だ」
「無理」
「やっぱ折れちまったか」
「だから言っただろ。今日はもう何も手伝わんぞ」
「だがなぁ、このままじゃこいつらはただ萎れるだけだぜ。それも忍びないだろ」
「抜きすぎた青江が悪い。あいつの部屋に運んでおこう」
「んなことしたら旦那の部屋の匂いがすげえことにな……

あ、そうか、その手があったな。でかしたぜ長谷部」
　そうと決まれば戻るとするか、と言って、薬研は地面に残っていた菖蒲の葉をまた山のように抱え、手ぶらの俺を先に歩かせた。
　また庭を通って屋敷に戻り、根に土がついたままの菖蒲を縁側に載せると、薬研は靴下をぽいっとその場で脱いで腕捲りをし、さあ風呂の支度だ、と意気込んだ。
「風呂に入れるのか？」
「ああ。菖蒲湯だよ。さっき話したろ、菖蒲には良い精油が詰まってるから、風呂に入れればきっと気持ちいいぜ。葉の香りもいいしな。大浴場でもこんだけありゃ十分な量だろう？」
「それは良い案だと思うが…俺は風呂掃除を手伝えないぞ。誰かさんに折られた腕が動かないんでな」
「あ～～そうだったな。んじゃあ、先に投薬だな」
　こっちに、と促され、薬研が腰を下ろした隣に座った。彼が腰から自身の本体である短刀を抜き、その刃を自らの人差し指に当てるのを、餌皿の前の犬の気分で凝視する。
「そう見るなよ、やりづれえ」
　触れたかどうかも分からぬ繊細な振りで、すぱっと彼の指の腹が開いた。たちまち赤い血の珠が噴き出し、床にこぼれそうになったのを、慌てて顔を屈め自分の唇で塞いだ。
　喉に彼の血液が染み込んだ瞬間、体の内側がぽかぽかと温かく感じ、まるで冬の朝の火鉢に手をかざしたときのような、まろやかな熱で満たされた。
　見た目より随分深く切ったらしい。それとも俺が急いて吸い付いているせいか、なかなか血は止まらなかった。肩の感覚が戻ってくる。垂れ下がっていた俺の両手が薬研の冷たくなっていく手に添えられたのを、彼は満足気に見下ろした。せっかくくっついた骨が、この後の風呂掃除でまた折られないことを願うばかりだ。
「……ほい、終わりだ長谷部。離せ」
「はっ…もう少し……」
「駄目だ。言ったろ、薬は用法用量を守れって」
　頭の上から降る声音が厳しい雰囲気を纏ったので、渋々彼の傷ついた指から口を離し、思わず余り物を探すように自分の唇の周りを舐めた。
「おいおい、飯じゃないんだぜ」
「俺には飯より美味く感じる」
「困ったもんだ。明石の旦那も風邪用のシロップが美味いとか言って、最近じゃ仮病使ってまで欲しがるし、過ぎた薬は毒なんだぜ」
「……そうだな」
「どうした？まだどっか調子悪いか？」
「……いや。薬研、おまえの方こそ、手を怪我したままで水場の掃除は大変じゃないか？」
「やってるうちに塞がるさ。いつもそうだろ」
「おまえらは丈夫で羨ましいよ」
「おかげさまでな」
　とりあえず土の付いている根は切っていこう、と薬研が

言うので、庭の手入れに使っている園芸鋏を持ち出して、手分けしてざくざくと切り離す作業をした。
泥まみれになった縁側の床を拭いてから行くと彼が言い、それならばと俺は菖蒲の山を抱えて先に風呂場へ向かった。
菖蒲の爽やかな香りを肺いっぱいに吸い込む。いい香りだ。今日は朝から随分働かされた。温かい菖蒲湯に浸かったら、すごく気持ちが良さそうだ。出陣先から帰ってくる奴らも喜ぶだろう。
ここに来たばかりのころ、他の奴らが体調を悪くすると粉薬や丸薬を飲んでいるのに、俺だけが薬研の血液を飲まされるのは何故なのかとても不可解だった。
しかし、それを薬研本人に尋ねたとき、まるで一般常識レベルのことを聞かれたような微妙な顔で俺を見て、「それも覚えてないのか？別に欲しけりゃ他の薬も処方できるが、長谷部が怪我したら俺っちの血液を摂取しないと治らないだろ」と答えられた。
長谷部はなぜ薬研の血液を飲む必要があるのか、という問いに、長谷部は薬研の血液を飲む必要があるからだ、と答えられたわけだ。あまりにも自然にそれが当たり前のことであるかのように言われてしまったので、それ以来考えるのはやめた。そういうことなら、そういうことなのだろうと。
実際に薬研の血液を摂取することで怪我も病気も回復に向かうし、薬研が長期遠征で本丸にいないときは体調を崩すとなかなか治らない。言っていることが真実なら、その理由など考えても詮無いことと思った。

……
……
……

「……血が…のみたい……」
「ドラキュラ君、おはよう。ハロウィンは十月だよ？」
「……しょく、だいきり」
「それとも鉄欠乏症かな？どちらかというと長谷部君に足りないのはカルシウムだと思うけど、寝言でまでリクエストされちゃあしょうがない。晩御飯はほうれん草大量消費メニューにするよ」
肉が手に入るならレバーが良いんだけどね、と残念そうに言いながら、俺が寝ていた布団を端から丸めて無情にも俺を追い出し、てきぱきと木製の折り畳みテーブルを広げ、朝食を並べ始めた。
「こんなテーブルあったか」
「遠征先で拾ったんだ。便利でしょ」
「遠征？いつ行ったんだ、ずるいぞ俺も出陣したい」
「え、え～～う～ん…長谷部君はまだ体が」
「治ってる」
「とりあえず朝御飯食べよう。それから決めようね」
またそう言って、飯の後には食器を片付けるだの洗濯物を取り込むだの言って、なし崩しに家事に巻き込む気だな。

今日はそうはいかないぞ、と内心やきもきしながら、とりあえず表面上は聞き分けよくテーブルに着いた。
「いただきます」
「はい、いただきます」
　言われてみれば、朝食のメニューも野菜が中心で、肉のような焼き目の付いた主菜も、衣を剥がしてみれば豆腐で出来ていた。肉や魚が一品もない。
「さっきの話だが」
「うん、後でね」
「違う。肉が手に入るならって話だ」
「ああ、そっち。やっぱりお肉も食べたいよね。ごめんね、最近はなかなか遠征しても見つからなくってさ」
「この間も言ったが、万屋で買えばいいだろう。おまえは料理に自給自足縛りでも課してるのか」
　茄子が足りないからもっと畑に植えるだの、肉が遠征先で見つからないだのと言うので、冗談でそう言ってみたら、燭台切はぴたりと箸を止めて、真剣な顔で俺を見た。
「……よく分かったね。実はそうなんだ」
「え、まじで」
「長谷部君、まじでとか言うんだね。えーとね、ほら僕、趣味がアウトドアじゃない？」
「いや知らん。他人が自分のこと知ってる前提で話すなよ」
「他人じゃないよ！恋人の趣味くらい知ってて！」
「初めて聞いたし……」
「前にも言いましたー！」
「そうだっけ…？え、なんか、すまん？？」
「分かってくれればいいよ…今度から忘れないでね。ああ大きい声出したら喉渇いちゃった…長谷部君もお水飲む？」
　燭台切が俺のグラスと自分のグラスに水を注ぎ、ゴクゴクといい飲みっぷりで空にし、また注ぐ。話の続きを待ちながら俺が一杯飲む間に三杯も飲んだ。
「それで、アウトドアが趣味なわけだけど、最近はサバイバル・ライフへの興味が止まらなくってね、人はどこまで自分の知恵だけで食糧を調達できるのか？っていうテーマを追求しているんだよ」
「いやおまえ人じゃないだろ」
「素人は黙ってて。まあそういうわけだから、野菜は自分で育てた無農薬オーガニック、肉や野菜はハンティングで調達するルールでやってるから、今後ともよろしく」
「そんなこと言って、出陣する先で都合良く牛や豚に遭遇できる場所なんてな――あ、函館？」
「北海道を知らない人が陥りやすい誤解だけど、北海道の全土が牧場なわけじゃないよ、長谷部君」
「ジンギスカンとかいいな。よし、函館行こう」
「聞いて、長谷部君」
「…いいだろ、そろそろ出陣しないと体が鈍る。おまえを心配させたいわけじゃないが、函館なら怪我することもないだろうし」
「留守を任されてるんだよ。後で怒られるかも……」
「青江たちが帰ってくる前には戻って来れるさ」

燭台切はしばらく難しい顔をして黙っていたが、はあ、と嘆息して、分かったよと承服した。ただし僕もついて行くからね、という条件付きだが全く構わない。
「やった。楽しみだな、早く食べて行こう」
「無茶はしないでくれよ」
「函館だぞ？無茶しようがない。二人でがんばってマトンをゲットしような。ジンギスカン、ゲットだぜ！」
「だから牧場じゃないって……」

朝食を片付けた後で、うきうきしながら戦装束に身を通した。久しぶりの出陣だ。ここで完全勝利して見せれば、燭台切の心配性も少しは落ち着くだろう。函館じゃあっという間に終わってしまいそうだが、出陣できないよりマシだ。むしろさっさと終わらせて、夕飯までには牛・豚・羊を一頭ずつ捕まえて帰りたい。
なかなか迎えに来ないので支度に手間取っているのかと思い、彼の部屋まで急かしに行こうと廊下へ出た。すると、燭台切はしっかり戦装束に身を包んだ姿で先に来ており、大庭の前の廊下に置いてある箱状の機械に触れて、何やら操作していた。
なんだっけ、あの機械。
「――燭台切？」
「っ、ああ長谷部君…。もう支度はできた？」
「ああ。主のところへ行こう。時間遡行ゲートを開いていただかないと」
「それなら、今やっているところだよ？」
「え？」
「留守を任されてるって言っただろ？主は他の皆に出陣を命じた後、所用があって出かけたよ。だから行くなら自分たちで行先を指定しないと。ちょっと待っててね、大丈夫、僕、目押し得意なんだ」
「……わかった」
何だろう。朝食も食べたというのに、まだ頭が寝ぼけているのだろうか、燭台切の説明がなかなか理解できない。適当に返事をしてごまかしてしまった。
主はお出かけになっていたのか。気づかなかったな。だから行くなら自分たちで。自分たちって俺たちか？俺たちが行先を指定できるのか。
「函館、函館……っと」
ぶつぶつと呟きながら、燭台切が回転する数字パネルを見つめている。数字の下には小さな丸いボタンが並んでいた。彼はそのボタンにぎりぎり触れない位置で人差し指を立て、おそらくは目当ての数字が来るのを待っていた。
不意に彼の指先が動いた。ぽんぽんぽん、とリズミカルにボタンを押してゆき、『1』『8』『6』『9』で見事止める。機械の内側から、くぐもった硬質な声が響いた。
「函館包囲。部隊ヲ選択シテ下サイ」
その声を合図にして、足元でふわっと砂埃が舞い上がり、

庭の中央に巨大な黒煙が出現して半時計周りの渦を描きながらばちばちと火花を散らしていた。主が開いてくださる時間遡行ゲートに間違いなかった。
「……こんな便利なものがあったのか」
「知らなかったの？長谷部君、情弱～」
「しかしこれじゃ、主に無断で出かけることになる」
「何を今更。だから後で怒られるかもしれないよって僕言ったじゃないか」
「薬研に怒られるという意味だと思った」
「ああ、それでみんなが帰ってくる前に戻ってくれば出陣してもバレないと思ったんだね」
　甘い甘い、もう数字も変わっちゃったしバレバレだよ、と言って彼が指さしたパネルは１８６９――土方歳三が戦死した『函館包囲』で止まったままだった。なるほど確かに、先に出陣した部隊の中に目ざとい奴がいれば、自分たちが使ったゲートの数字から変わっていることに気づいてしまうかもしれない。
　やめておくかい？と、俺がそうするのを期待している目で燭台切が尋ねた。
「行く」
「だよねぇ…はぁ、本当に無茶はしないでね」
　こんなに緊張する函館は始めてだよ、とぼやいて彼は肩を落とした。一応俺の方が先輩なのに、後輩のこいつからこうも心配されるとさすがに腹が立ってくる。だが、ここまで来て下手に彼の機嫌を損ねて、またあのよく分からない機械を操作されゲートが消えてしまいでもしたら、折角の出陣のチャンスがなくなってしまう。
「ああ分かった。危なくなったらすぐ帰る」
　俺はとりあえず聞き分け良く返事して、燭台切に先頭を譲り、彼の背中に続いてゲートに飛び込んだ。

　結果、俺たちは予定外に一時間も経たないうちに本丸へ帰還することとなった。
　いや、早く帰還するのは予定通りだ。予定外だったのは、時間遡行軍の数が多すぎて、敵の本陣まで切り込むことが俺たち二振りだけでは到底出来そうになく、進攻の途中ですごすごと逃げ帰ってきたことだった。函館で敵前逃亡。信じられない。
「こんな…こんなことが！あいつらにバレたら絶対ばかにされる…！」
「……いや、長谷部君は思ったより強かったよ？」
「慰めのつもりか！函館だぞ！？いったいどうしてあんなに敵の数が増えたんだ、人気の観光地じゃあるまいし！」
「うーん、人気の観光地ではあるかな…」
「雑魚をさっさと片付けて、残りの時間はおまえと乳搾り体験してまだあったかいミルクを一杯飲ませてもらったり、特濃ソフトクリームを食べたりしようと思ってたのに！」
「牧場というより猛獣だらけのサファリパークだったね。ところで、おまえと乳搾り～からのくだりもう一回言って

くれる？録音するから」
「は？出来ない無念さが募るだけだからもう言わん」
「え～いいじゃん減るもんじゃなし～長谷部くんのケチ」
「話しかけないでもらえますか。いま心が忙しいんです」
「プライド高いと大変だなぁ……」
くそ、こんなはずじゃなかった。
燭台切は俺の恋人だが、この本丸に来た順番でいったら俺の後輩だ。初っ端が俺の世話係だったせいか、見ているといつも屋敷の中の仕事ばかり引き受けている様子だった。ここで強引にでも戦場に連れ出して刀を振るう喜びを遠慮なく感じてほしかった。先輩として練度の差を見せつけてドヤ顔したかったという本音もある。それなのに、こんな無様な姿を見せることになろうとは。
時間遡行軍は数が多く、それだけでなく強さも前に戦ったときと比べて桁外れだった。無傷で帰るはずだったのに、鎧装束はあちこち破れ、血を振り払う間もなく敵が湧いてきたから、自慢の刃紋には敵を斬ったときの返り血がべったりと付着していた。
血。そうだ怪我をしたから、はやく薬を。
「……薬を、飲まなければ」
「――え？」
刃先に顔を近づけたら、どこか懐かしい、むっと咽返る脂と血肉と呪力の匂いが口いっぱいに唾液を溢れさせる。歓喜。食欲。刀の血、舐めたらきっと甘いはずだ。
舌を出して近づけた、その時。
「何してるんだ！！」
突然、鬼のような形相になった燭台切が俺を罵り、俺の手から刀を奪うと、目にも止まらぬ動きで俺の体を吹っ飛ばした。思い切り腹を蹴られたのだ、と気づいたときには、頭から落下し、地面に叩きつけられていた。
俺が次に目を覚ましたとき、季節は梅雨に入っていた。

4　氷の水無月

「それはまた、ひどい目にあったものだね」
「まったくだ。大体にして、あいつは粗暴すぎる！おまえはいっぺんに両方の肩が折れたことがあるか？」
「ないねぇ…前と後ろ、両方いっぺんに攻められたことはあるけどね」
「え、まじかおまえ…いや待て、ちょっと考えるから」
「敵からの挟み撃ちのことだよ？」
「あ！待てと言ったのに！」
「別にこれクイズじゃないんだけどなぁ…」
　夜半、蒸し暑さになかなか寝付けず、水でも飲もうと厨に足を向けたとき、にっかり青江が俺と同じ理由で氷入りの煎茶を飲んでいたところに出くわした。
　そこから始まった井戸端会議で喋りっぱなしだった俺の話がようやく途切れたので、その隙に青江が二杯目のお茶を煎れる。今度は俺の分の湯呑も増やしてくれた。
「記憶のない君に言うのも酷なことだけれど、うちのへし切長谷部は本当に変な刀だね。よその君より付き合い易くて僕は良いけど」
「おまえに変とか言われたくない」
「僕なんて、君に比べたらうんざりするほど真っ直ぐな刀さ。右曲がりじゃないし長さも太さも普通だよ」
「それ……いや待て、何かここまで出かかってて」
「今のは男性器のことだよ」
「まんまかよ！俺のも別に曲がってない！！」
　君はノリが良くて嬉しいなぁ、と青江は長い前髪で隠れていない方の目をうっすら細めて微笑んだ。
「じゃあ楽しませてくれた御礼に、皆には内緒でいけないことをしちゃおうか…？」
「夜食でも食うのか」
「あれ、当てられちゃった」
　あーあ。残念そうに言って彼が冷蔵庫から取り出したのは、底を深くし頑丈に折られた笹の舟だった。二艘の笹船を上下逆に重ね合わせて、弁当箱の要領で蓋をしている。彼がその上蓋をそっと外すと、そこに乗船していたのは、煮小豆が載った三角形の生菓子だった。
「どうしたんだ。歌仙以外にもこんな菓子を作れる奴がいたのか。まさかおまえが？」
「いいや。君も知っての通り、この本丸で菓子を作れたのは歌仙兼定だけだし、彼が可愛がっていた小夜左文字が行ってしまってからはめっきり作らなくなった。そして彼自身も旅立った今や、これが自家製ケーキである可能性は百パーセントの零だよ」
「……回りくどいな。で、どこで見つけてきたんだ」
　青江は肩をすくめて、茶器類の仕舞ってあった戸棚から漆の菓子皿と竹楊枝を出し、その菓子を取り分けて、一つ俺に寄越した。

「二つしかないんだな」
「そうだよ。だから内緒だと言ったのさ」
「……俺で良かったのか？」
本当は誰か他の奴と食べようと思っていたのではないかと躊躇っていたら、何も言わずに自分の皿から一欠け切り分け、楊枝で俺の口に放り込んできた。
上の小豆は程良い甘さの甘納豆だった。白い三角の台座の部分は見た感じ餅かと思ったが、それにしては風味が爽やかで歯切れ良く、少し挟んだだけでさくりと切れた。
「うまいな。『ういろう』か」
前に、それこそ歌仙が作ってくれたものを食べたことがあった。あまり個性のない味だ、と俺はそれが気に入ったので褒めたつもりだったのだが、二度と食わせないとガチギレされた上に、その日の夕飯のおかずが俺の嫌いなものオンパレードだったことを思い出す。
読書好きで文化人を気取るくせに、沸点が低くてすぐに感情を露わにする男だった。
「そういえば今朝は京都に出陣していたんだったな。帰りがてら菓子匠で買ってきたのか」
「そうだよ。これは普通のういろうじゃなくて『水無月』という名前が付いているんだ。京都では六月にこのお菓子を食べる慣わしがあるそうだよ」
「菓子売りが普通に営業していたとはな。この白いところが特にうまい。葛を使っている」
「吉野の本葛だそうだよ。本当に僕も驚いた。当たり前のように町があって、人間が普通の顔して生活していたんだからね。売り子の娘がにこにこ笑って僕に言ったよ。葛を使っている水無月は貴重なんですよ、って。ッフフ」
「どこが笑うところだった？」
「いやぁ、面白いと思わないかい？生きている君たちの方がよほど貴重だよと、あやうく言ってしまいそうになった。まあ言ったところで、何のことか分かりはしないのだろうけどね」
俺は、青江が菓子屋の娘と談笑している様子を想像した。当たり前に平穏を享受し、今日と変わらない一日が明日もやって来ると信じて疑わない娘たちに、たとえ先の未来を伝えたとしても、それに直面するときまで信じることはできないだろう。
悲しいことばかりが起こるなら、知らないままでいる方が長く幸せでいられる。人は無意識にそのことを分かって行動しているのではないかと思えた。
「幸運な偶然だったのさ。数か月ぶりにショッピングのできる時代へ行けたものだから、さすがの隊長も、次は台車を持って行くと豪語してた。買い足りなかったようだ」
「自給自足にも限界があるからな。薬研の気持ちは分かる」
特に肉は、買うにしても狩るにしても、戦場で手に入る牛や豚なんて危なくて食えたものじゃない。まだ感染していない時代に当たるのはすごくラッキーなことだった。
「けれどね…適当に押したら行けただけなのだし、狙って止めるのは難しいんじゃないかな」

「適当に押した？どこを？」
「え？どこって、ボタンだよ、アルジの」
　青江が虚を突かれたように口を開けて、普通にそう答えた。咄嗟のことで、下ネタを仕込む余裕がなかったようだ。
「まさか君、今までここにいて、アルジの使い方も知らないのかい」
「悪いか。必要ないからだろ、教えられてない」
「Ｏｈ…」
「なんだ青江、おまえまで俺を使えぬ刀扱いするのか」
「家電を使えないって意味ではそう思っているところだよ。隊長殿は少し君を箱入り娘にしすぎのようだね」
「家電って、おまえ……」
　彼が悪びれもせず、アルジを機械扱いしたので、こっちの方がそわそわと周囲を気にしてしまった。もしあいつに聞かれていたら、また万死されてしまうと焦って――それから、その可能性だけはないことに思い至った。
　青江は、俺が落ち着かない動作をした理由に、すぐ思い当たった様子だった。
「僕は歌仙兼定のように、機械のやることにいちいち理由をこじつけるほどロマンチストではないし、あれを主と慕うほど博愛主義でもないんだ。顕現以前から、幽霊とはいえ近寄ってきた女を斬り捨てられる刀だったからね」
「……そのロマンチストだか博愛主義者だかの男は、あのアルジが俺たちの望みを理解して情をかけてくれていると、信じていたぞ」
「冗談だろう？酷い妄想だね。斬ったら斬っただけのご褒美が欲しいし、傷が付いたら手入して欲しい、そんな普通の望みすら叶えてはくれない、ただの鉄の箱じゃないか。あれに少しでも心があったなら、彼を一人で行かせたりはしなかったはずだよ……」
　言葉の端が湿っぽくなるのを誤魔化すようにして、青江は皿の上の水無月に楊枝を突き刺し、大口開けてぺろりと平らげた。
　ほらせっかくの生菓子が乾いてしまうよ、と言われたらぐずぐずしているわけにもいかなくなって、俺も自分の皿を片付けにかかる。
　あいつはどこへ行ったんだろうな。独り言を装って青江の顔を見ずに口に出したら、視界のすみで首を横に振ってうなだれるのが見えた。
「さあ。今さら小夜左文字を追って行ったのか、それとも一人で歌詠みのできる場所でも見つけていたのかもしれない。今朝も普通にしていたから、すっかり騙された。聡い近侍が留守にするのを見計らっていたんだろう」
「薬研がいたらいけなかったのか」
「この本丸では、『錆』が始まってからでないと、旅に出ることは許されない。近侍が決めたルールだよ。それを無視して発症する前に行きたかったんだろうね。おかげで、魔除けの水無月が、単なる夜食になってしまった」
　魔除け？と聞き返した俺に、青江はふふと笑って両手で三角を作って見せた。

「この水無月はね、無病息災を願う縁起菓子なんだよ。元々は人が体を壊しやすい梅雨の時期に宮中で氷を食べて熱を逃がしていたのを、氷を手に入れられなかった下々の民が、氷に見立てた菓子を食べることで真似したんだ。病気は魔物の仕業と信じられていた時代だからね、上の小豆も三角の形にも、魔除けの効果があるんだよ」
「……と、菓子屋の娘が言っていたわけか」
「あれぇ？どうして受け売りだと分かっちゃったかな」
「説明が長い。おまえはそんなに菓子が好きな奴じゃないだろう。京都にも大した所縁はなかったはずだ」
「うん……？そうだけど、よく僕の出自を知っていたね」
「は？ああ…そうだな？なんでだろう」
「へし切、食べ終わったなら、少し散歩に出ようか」
　青江はふと思いついたように、出した食器もそのままで、俺の手を引いて外へ出た。
　出陣するのか、と、期待半分恐怖半分で尋ねると、今日はもう行かないよ、ちょっとそこまでさ、と廊下を歩きながら鼻歌のように軽やかに答え、玄関の門を足音を立てぬようにそっとくぐった。
　この正面の門は、先月に薬研と苦労して門を外してから、そのまま開け放していた。
「歩いて外へ出るのは久しぶりだね。君は万屋に出かけたことはあるかい？」
「万屋って、昔あったっていう俺たち専用の店のことか？次郎太刀が夢の国のように俺に話す」
「酒を売ってくれるだけで夢の国なら、酒蔵は天竺だね。そんなに大した場所ではなかったけど、点在している其々の本丸を結んだ中心にあって、他の審神者の所にいる刀とそこで会うことができたんだ」
　演練だと完全なランダムだけど、万屋で会う約束をしておけば待ち合わせることができた、と、屋根の軒を見上げ懐かしそうに話す青江の目は、垂れ下がる菖蒲の葉を見てはいなかった。
「逆に言えば、万屋という結び目を経由すれば、他の本丸へ夜這いに行くこともできたわけだ。この場合、夜襲という方が正しいかな」
「……感染した刀が、他の本丸を襲ったのか？」
「そうとは限らない。勿論そういうケースもあったけど、人手が足りないとか、食べ物が足りないとか、理性あっての動物的な理由だよ。いずれも、追い込まれた人間が命じたことだ。彼らは従うほかなかった」
　本丸の外は、一歩出ると暗い森が広がっている。樹木が隙間なく生え、一本の道だけが、舗装された歩道のように雑草もなく奥へと伸びているのだった。
　青江はのんびりとその歩道の上を歩き出した。俺は少し不安になりながら、彼の後ろをついていく。
「人が、自然な成り行きに任すことが不得手なのは、体を動かせるからなのだろうね。物であれば、住処や持ち主が変わっても、ただ受け入れるしかないのにさ」
「……今は、違うだろう」

「違うかなあ」
柔らかい口調で、しかしはっきりと、「自分たちは物だ」と主張する言葉だった。アルジから道具のように扱われることを不服とした俺に「道具みたいだとでも言う気か」と反論した歌仙と、同じ表情をしていた。
「青江、笑わないでくれ。自分でも、馬鹿なことを言おうとしている自覚はある」
「何だい、前置きまでして」
「俺自身はこんな体で、二度もいらない刀と下げ渡された身だ。だがそれでも、体を与えられたのには意味があるんじゃないのか？物のままではできないことを、この体でなら果たせるんじゃないのか？俺は、ずっとそんな気がしているんだ」
だから気に入らない。薬研も歌仙もこいつも、表面上ではにこにこ笑ってルーティンな日々を回していながら、その目はすっかり全部諦めたようなほの暗い色をしている。俺と違って、戦える体を持っているくせに。
「……」
青江は沈黙して歩き続ける。
「人のいる時代に行けたんだろう？それって、おまえたちの戦いのおかげで、その時代が助かったってことだろう？不利な戦況なのは知ってる。だが、戦い続ければ可能性はまだあるんじゃないのか？」
笑いはしないさ。青江は足を止めぬまま、その言葉で沈黙を破った。
「けど、易々説得されてもあげられないねぇ。だって君、二度も記憶を丸々失っているんだろう？下げ渡されたことは問題じゃない。問題なのは、その記憶と感情を君が抱えていられずに捨ててきたことだ。そんな君が、この戦況の、状況の、何をどう理解しているって言うんだい？」
歩き続けても変わらない景色の森の中で、不意に青江は立ち止まった。地面に無造作に落ちていた木片を拾い上げ、くるりと回して見せる。矢印の形をしたそれには、剥げかけたペンキで「→万屋もうすぐ！」と誰かの字で書かれていた。
「昔はね、ここをあと一歩進めば、万屋の場所に転送されたんだ。接続を切られた今は、どうなると思う？」
本当にただの一歩、ただの一歩進んだだけで、青江の姿は忽然と消えた。焦って後を追いかけたら、さっきまではどこまでも森と一本の道しかなかったはずの景色に、見慣れた屋敷の玄関が突然出現した。軒に厄除けの菖蒲が吊るされている。
「長谷部、僕は君を笑わないよ」
青江と俺の立っている場所が、本丸の屋根からじわじわと差し込んでくる早朝の光に照らされる。
「歌仙が六本木で噛まれて、もう駄目だと分かっていたのに魔除けの菓子だなんて、自己満足もいいところだった。結局渡せもしなかったしね…。ただ君は誤解しているよ。今朝行ったあの平和な時代は、助かったんじゃない。たまたま、まだ生き残っていたというだけだ」

すまなかったね、と彼は目を伏せて俺に詫びた。
「何を謝るんだ」
「八つ当たりだよ、さっきのは。可能性なんて言葉を口にする君が、その輪に封じられて何も知らない君のことが羨ましくなってしまった。厄除けの草なんて育てていた僕も、言えたものじゃないのにね」
青江は、今度は両手で丸の形を作って見せた。
「この本丸は、もうどこにも繋がっていない、閉ざされた輪の中だ。逃げ場は戦場にしかない。隊長殿も優しすぎて嫌になるよねぇ…死者も生者も、外からここへ来ることはできないって分かってて、律儀に僕の願掛けに付き合ってくれちゃってさ。しかも菖蒲湯のオプション付き」
御礼に今朝の食事は僕が支度してあげるとしようか、と言って青江は屋敷へと戻る。菖蒲の件なら俺も手伝ったぞと口を挟むと、はいはい何が食べたいのかな、といつもの調子で喋った。
「そういえば、歌仙から本を借りていたよね。あれはもう読んだのかい？」
「ん？ああ…あの本か。借りてすぐ読んだが、内容が難解なのか、何度読んでも内容が全く頭に入ってこないんだ。今度はメモを取りながら読んでみようと思ってる」
「それはそれは…メモを取っても無駄なんじゃないかなあ」
「おまえは俺のことを馬鹿にしすぎだ」
「いいや？本当は、世界で一番強いと思っているよ。君は最も強く、そして最も恐ろしい刀なのだからね」

……
……
……
「……お世辞にしても…嫌味すぎるぞ……」
「あれ？いつから起きてたの、長谷部君」
「……今だよ」
こいつ毎朝俺の部屋に来てないか？
一応俺の方が先輩なので、こう頻繁にゆるんだ寝顔やら寝相やらを見られるのはきまりが悪いのだが、燭台切は朝起きるのがめちゃめちゃ早く、どれだけ前日早く床に就いても、翌朝に俺が布団を出るころには髪型を完璧にセットした状態で朝食を持ってくるのだ。
「今日はパンを一から作ったよ。一からってどこからだと思う？麦からだよ！麦刈り、脱穀、種出し、製粉、そしてパン作り…ちょっと褒めてほしいくらい頑張ったと思う。褒めて、長谷部君」
「朝からそのテンションきっつ…ＳＮＳにでも書いてろ」
「それが朝起こしに来た恋人に言う台詞かな！？今朝なんかねぇ、君が目を覚ますまで、目覚まし代わりにず～っと長谷部君を讃える言葉を耳元で囁き続けてあげたんだからね？君も起き抜け、まんざらでもない感じだったじゃないか。気分良く起きられただろ？」
「いや、なんか長い夢を見てた気がしてすごく疲れてる。

ああでも…確かに夢の中でも何か褒められたような…讃えるってどんな風に？長谷部君は世界一強い！とか？」
「えっ？違うよ。全然違うよ。長谷部君の寝顔超可愛い～！世界一可愛い～！天使かな～？どれどれ羽はどこにくっついているのかにゃ～ん、って痛い！なんで殴るんだよ！」
「気持ち悪い…ッ！朝からサブイボ出さすな馬鹿！くそ…大声出したらますます疲れた……」
　どちらかというと俺も朝は強い方だったはずなのだが、最近は夜になるとすぐ眠くなり、朝もぼんやりしてなかなか起きられない。梅雨特有のじめじめした気候が駄目なのかもしれない。頭が覚醒するまでにはまだ時間がかかりそうだし、食欲もすぐには湧いてこなかった。
「今朝は…軽く済ましたい。パンは昼に貰うから」
「体調でも悪い？」
「少しだるい。さっぱりしたものが食べたい」
「たとえば？」
「アイス」
「却下」
「じゃあ聞くなよ！今のですっかりアイスの舌になったぞ俺は。絶対に今日はアイスを食べる絶対にだ」
「ええ～…アイスかぁ…それはちょっと難しいよ、冷凍庫の調子が悪くって、冷やせないと思うし、牛乳ないし」
　万屋に買いに行けばいいだろ…と言いかけて、ああそうだ、こいつの自給自足ルールに巻き込まれているんだったと思い出して溜息をついた。今度一人でこっそり出かけて買い食いしてこよう。
「そういえば、昔は氷が貴重品だったんだよな。昔の人間はアイスなしでどうやって夏を乗り越えていたんだろう」
「そんなにアイス好きなの？僕達はもともとアイスなんて食べてなかっただろ」
「刀の頃は別だ。人間の体は熱がこもってしかたない」
　ふぅん？と意味深に笑って、燭台切は俺の部屋へのデリバリーに愛用しているポットからトマトスープを皿に注ぎ、これだけでもお腹に入れて、と差し出した。
　燭台切が特に丹精込めて育てているあのトマトか。綺麗な赤い色を見ていたら食指が動いて、スプーンを手に取った。程良い酸味のスープは胃に優しく染み込んでくる。
「うまい」
「良かった。確かに長谷部君、最近体だるそうだものね。梅雨が明けるまでは、こういうあっさりめの食事にした方がいいかな」
「梅雨は気もめいる。出陣したい」
「何言ってんの駄目だよ、こないだの怪我が治ったばかりじゃないか」
「……なんで俺はあんな重症になったんだろう。記憶もぶっ飛んで覚えてないんだ」
「敵が強かったから」
「うーん…納得いかん…函館には検非違使も出ないはずなのに、遡行軍の部隊編成が変わったとかか…？」
「さあ、僕には分からないなあ」

「まあそうだよな、おまえは来たばかりだし。…なんか、今の俺の推理イイ線いってると思わないか？すっごくそんな気がしてきた。そうだよ！敵は、俺たちがレベリングで行ってる時代に強い部隊を派遣して迎え撃とうって腹だ。そうなると、向こうの戦力だって底なしってわけじゃないだろうから、最高難度のステージに今行けば、逆に雑魚ばかりで楽に資材稼ぎまくれるんじゃないか？」
「最高難度のステージって、六本木の『氷の美術館』のことを言ってる？無理だって、二人じゃ地下に潜る間もなく殺られるよ」
「六本木…？」
「ん？違ったかな、確か一番難しいステージはそこだって主が言っていたと思うんだけど」
「主が……そうだな。そうだったな」
「僕らはまだ行けないよ。長谷部君がってわけじゃなくて、攻略が難しすぎて、まだ誰も最下層まで潜ったことがないんだって。中は寒すぎて壁も床も氷が張ってて、歩くだけでも体力が奪われるって」
「ああ、それで『氷の美術館』か」
　美術館という響きはなんだか懐かしい。そう言うと燭台切は、「何か思い出した？」とスープの口直しに水を注いだグラスを差し出して、俺に尋ねた。
「さあ、はっきりとは。まあでも、刀として飾られていたころの記憶だろうな」
「長谷部君、刀の頃の記憶があるんだ？」
「あるよ。燭台切はないのか？」
「うーん、僕は燃えちゃったからかな、あんまり…。君はどんなことを覚えてる？」
「そうだな、長政さまの所では…退屈ではあったが、俺をとても大切にしてくれた。織田家もまあ、色々言いたいことはあるが、俺にこの号を授けてくれたわけだし、薬研とウマが合うのもあの頃会っていたから……」
「……どうしたの？」
「いや……俺、おまえにもどこかで会ったか？」
「僕に？僕は奥州の伊達家の刀だよ？」
「……そうだよな。すまん、昔のことを思い出そうとしたら、なんだか前にもこうやって、別の屋敷でおまえと飯を食っていたことがあったような気がして…勘違いだな」
「そうだろうね。ねぇ、長谷部君」
　そういうの、デジャブって言うんだよ。
　無駄にいい声で囁きながら、燭台切が俺ににじり寄ってきた。畳に手をついて後ずさると、敷きっぱなしの布団のへりまで追いつめられてしまう。
「…ち、近い近い近い！！」
「そうだね、近づいてるんだから当然じゃない？」
「おまえのそのいきなり性格変わるところ、なんとかならないのか！心臓に悪い！」
「ドキドキしてるってこと？嬉しいな。ねぇ、人間の体は熱がこもるって言ったよね。そういうとき、人間はどんな方法で発散してると思う？」

ひたり、と両の頬を革の手袋で挟まれたら、それだけで拘束されたように体が動かなくなった。あ、あう、と情けない声しか返事のできない俺を、優しい目で見つめ返す。
「そんなに可愛い態度を取られたら、僕も歯止めがきかなくなっちゃうよ。今日はまだ怪我が治ったばかりだから、来週…そうだな、七夕の日にしようか」
「し、す、する、するのか、やっぱり」
「する」
「絶対？？」
「絶対する」
「うう……」
正直恐い。最近歳のせいか忘れっぽくなり、燭台切との、こ、恋人の営み的なものがどんなだったか、実はいまいち思い出せないのだ。流石にそれを当の恋人本人に言うのは傷つけてしまう気がして言えていなかった。
なんとなく、アレをアレしてアレするってことは分かる。心構えだけでもしておこうと、風呂で彼の逸物を盗み見たこともある。はっきり言ってその予習は逆効果だった。
「長谷部君、僕のこと嫌いになった？」
「え？なんでそう思うんだ？」
「だって、こういうことしようとすると嫌がるし…ずっとお預けなのに、ちょっと触るだけでそんなに怯えられたら僕だって傷つくよ」
「いや、それは！」
「それは……？」
「だから……」
嫌いになったわけじゃないと、ただちょっと、これこれこういうわけなんですご承知置きくださいと、言い返そうとはしたのだ。
だけど出てこない。言い訳に必要な単語が、自分の中のどこを探しても、同じ場所に戻ってきて堂々巡りになる。
俺は燭台切のことが嫌いじゃない。それは本当だ。
嫌いじゃないということは、好きなのだ。
俺は燭台切のことが好き。
「長谷部君、長谷部君？」
……燭台切のことが好き？いつからだっけ？
何がきっかけだっけ？どっちから告白したんだっけ？
「長谷部君、やっぱり体調が悪いんだね。お水を飲んで、もう少し寝ようか」
燭台切が心配そうに俺の顔を覗き込む。
「大丈夫だ。……おまえは優しいな」
優しいところを好きになったのかな。
たぶんそうだった。そういうことにしておこう。

5　文月の黒い河

調子の悪い日が続いていた。煩わしい梅雨が明けたというのに、体の中に不快感が燻っているのだ。

にっかり青江はまた性懲りもなく六本木へ出陣し、とうとう帰って来なかった。この本丸では、『錆』が発症した刀は最期の時を自分の好きな場所で迎えることを許される。だが、青江はまだ症状の出ていない状態でありながら、帰還することを拒み、戦場に留まった。

そのとき二人で一緒に出陣していた大倶利伽羅は、本丸に残っていた近侍の薬研から、青江を置いてきたことを激しく叱責された。彼は弁明もしなかったが、反省の言葉も口にしなかった。その態度が業腹であったようで、薬研はその日のうちにアルジのレバーを鉄線でぐるぐる巻きに結束し、誰も操作できないようにしてしまった。しばらく出陣せずに謹慎しろということだろう。

アルジは外部から操作しなくても勝手に起動し、定期的に時間遡行ゲートを開く仕組みだが、その場合もレバーが降りなければどうにもならないものらしく、一日に何度かバックライトを点灯させて動き出すものの、がちゃがちゃと鉄線の中でレバーを暴れさせ、しばらくすると止まる、という動作を繰り返した。無理やり鎖で繋がれた犬のようで不憫だ、と不機嫌な声で大倶利伽羅が言った。

「…だからと言って、猫ならいいわけはないだろう」

「俺が一人で世話する」

「そういうことじゃなくってな…」

いいから黙っていろ、と潜めた声で言い返す大倶利伽羅が座っているのは、縁側のすぐ下の庭石だ。廊下を歩いているときには全く目に入らなかったが、ここ数日俺を悩ませている偏頭痛が今日も不意に襲い、ふらふらとその場に座り込んで頭を抱えた――ときに、目が合ったのだ。猫を草の葉で遊ばせている大倶利伽羅と。

「びっくりして頭痛がどこか行った」

「良かったな」

「良くない。どうしたんだ、その猫」

「拾った」

「どこで」

「言いたくない」

「難しい年頃か！おい…まさかと思うが、出陣した先で拾ってきたんじゃないだろうな」

猫は、大倶利伽羅の足元でぺったりと寝転びながら、揺れる葉の先を惰性でちょいちょいとつついている。細身の体に纏う青灰色の毛並はビロードのように滑らかで、ここ数日の間にしっかり手入れされた跡があった。

「だとしたら、どうだって言うんだ？」

「……！おまえ本気か！？保菌しているかもしれない動物を本丸に持ち帰るなんて！」

「こいつはアレに感染してない」

「どうして、そんなことが分かる！？」
「……声を小さくしろ。猫が逃げるし、薬研にバレる」
ああ、まただ。おまえらまたそうやって、俺の知らないことを、普通のことのようにさらりと断言するのか。
「うう……」
頭痛がぶり返してきた。どうした、大丈夫か、薬が必要なら、と、ぶっきらぼうだが気遣わしげな声が掛けられる。猫の鳴き声も混じった。
「大丈夫だ……これくらいで、いちいち薬は貰えない…」
薬研も、ここにいる誰も彼も、体の弱すぎる俺のことを役立たずだとか、ごくつぶしだとか言ったことはない。
仲間が命を賭して戦っているときにぬくぬくと留守番していても当たり前で、記憶がないから知らないことが多くても、ああそうか長谷部は知らないんだったな、と普通に受け入れられてきた。
だからって、そのことに甘んじて納得できたことなんて一度もない。なぜ俺は戦えない？誰かが感染して、一人また一人といなくなって、残された者が今にも泣きそうな顔して笑う、そんなときに俺はどんな顔をすればいい？所詮後から来たよそ者で、これから戦友になれる見込みもない俺が、適当に知ったかぶりして話を合わせる以外に、せめて暇潰しの話相手になる以外に、どうしてここにいていいって思う方法があるんだ？
「……落ち着いて、息を吸え。首に掛けてるそれを握って、痛みがなくなるように念じろ」
「は……？そんなことして、何の……」
「黙ってやれ」
ふざけんな、おまえが首に掛けてるそれはお守りなのかもしらんが、俺のはここに来たときから身に着けていたと薬研が言うから、記憶の手がかりとして無くさないように持っているだけだ。十字架の意味が分からないほど無知ではないが、祈りたい神なんていない――ずきんずきん痛む頭の中で悪態を組み立て、さあぶつけてやろうと口を開いたら、痺れを切らした大倶利伽羅の手が、猫のおもちゃにしていた葉っぱを放り捨てて俺の手を掴み、強引にロザリオを握らせた。
「くっそ…こんなことしたって……」
口ではそう毒づいたものの、激しくなるばかりの激痛に、縋る思いでロザリオを握り、この痛みがなくなれなくなれ、と思い浮かべた。すると、たちまち頭を締め付けていた鈍痛が消え失せ、胸を締め付けていた感情の昂ぶりまでもが、波のようにすうっと退いていった。
「な、なんで……」
「青江はあんたにヒントを与えたと言っていた。まだ気づいていないのか？」
「ヒントだって？なんだそれ…知らないぞ…この首飾りは何だ、頭の中で考えていることが、拭き取られたみたいに消えていく……」
「……俺に、聞きたいことがあるんだろ？忘れたのか？」
「……そうだ、おまえが教えてくれないから、早く教えて

くれないと忘れてしまう、どうして、こ……これ？これって何だ？おい、俺は何を分からないんだ？」
「……」
大倶利伽羅は元から下がり気味の眉をぐっとしかめて、俺を縁側から強引に庭へ連れ出した。
「お、おい？大倶利伽羅？」
手を引かれ庭の奥へと歩かされながら、猫はいいのかと慌てて足元を見たら、その青灰色の猫は野良であったにもかかわらず、逃げ出す素振りも見せず彼の黒いスニーカーのそばを付かず離れず追って来た。
連れて来られたのは、庭の奥にある土蔵だった。誰かが使っているのを見たことがないそれは、鬼瓦が欠けて地面に転がっており、土壁は剥がれ、観音開きの鉄扉には錠前が掛かっていなかった。梯子などの備品が仕舞われている場所と聞いたことがあるのに、この屋敷に生活する者たちから完全に捨て置かれているように見えた。
大倶利伽羅が鉄の扉を押すと、ぎ、ぎぃ、と重厚な音を立てて蔵への入口が開かれた。中から、湿気と埃を含んだ冷たい空気が流れてくる。
「こんな黴くさい場所に連れてきて何だ。そこの猫が例のウイルスに感染していない根拠を説明するのに、こそこそする必要があるのか？」
「説明してほしいのは、それだけか？」
「それだけ、だと？他にも門外不出の面白話があるというなら聞いてやるよ」
「いや。生憎、面白い話は無いな」
「嫌味だ…分かれよ」
「壁に寄りかかると埃まみれになるぞ」
掛け合いにならない会話に居たたまれず、腕を組んで壁に背を預けたところでそう言われる。慌てて上着を脱ぐと、紫の布地が埃で白くくすんでしまっていた。はやく言えよ、この生地は洗濯が大変なんだぞ。
大倶利伽羅自身も、この場所に来るのは久しぶりのようだった。服に付いた埃を叩きながら文句を言う俺のことを無視して、棚にきちんと整頓された数十冊の本や書類の束、蓋の閉じた衣装箱を順番に眺め、何かを思い起こすように目を細めた。
「あんたがここに来たのは、主があのアルジに変わって、随分経った後だったよな」
「アルジって、あの機械のことか？」
「ああ。そうなる前、この本丸に審神者がいたときのことを何か聞いてるか」
「審神者…呪術で俺たちを使役していた人間で、俺たちの傷の治療や能力の強化ができたと」
「それは、審神者を名乗る奴は必ずできたことだ。呪力の強い人間は、本人が望もうと望むまいと、審神者としての力の使い方を教えられ、戦いに巻き込まれる」
「巻き込まれる？嫌々やってた奴もいたと言うのか。刀である俺たちを人間のような姿に変えて、時間遡行軍との戦いに利用したのはその審神者なんだろう？」

「時間遡行軍…そんなものはもういない」
やっぱり、あんたは随分昔の刀のようだな。大倶利伽羅はそう言った後に一度深く呼吸をし、今になって蔵の扉を中から閉めた。おい暗すぎるぞ、と突然の暗闇にあせった心を誤魔化して文句を言う。すると、すぐ近くの棚から何かを動かす音が聞こえ、と同時に大倶利伽羅の手元だけが暖色の灯で明るく色づいた。
「このランタンも、ここに置いてあるものの殆どが以前にここに居た審神者の持ち物だ。非常用だと言って、人数分の防災用品を買い揃えてた」
「防災って……この場所に地震なんて起こらんだろう」
「ああ。全員からそうツッコまれてた。馬鹿な奴だったんだ。審神者のほかに学生という仕事もしていたが、ここに本を持ち込んで勉強していた割には、まるで頭の良くなる気配のなかった、間抜けな女だった」
そういう審神者もいるのか。頭の中で勝手に殿様か巫女のような支配的な存在をイメージしていたが、本業を別に持って片手間に審神者をする者の方が多いくらいだったと彼の話で知り、確かに言われてみれば、自分が忘れている過去に仕えていた審神者というのも、手のかかる子供のような人だった気がする。
「俺たちは、毎日机に向かって泣き言を言う審神者の勉強によく付き合わされていた。試験前にはあいつが居眠りをしないように交代で見張る内番まで組まれて、ここに来たばかりの頃は随分とうんざりさせられた」
「馴れ合いまくりじゃないか」
「ああ。試験が近くなると、戦争どころじゃないとか言い出して出陣も中止になって、ストレスで胃に穴が開いた。だから俺たちは、どうにかしてこの審神者の成績を上げて学生業に掛ける時間を削減したいと考えるようになった」
通信教育の宣伝漫画みたいな展開になってきた。これ、たぶん最終的に主人公の成績が上がって恋も部活もうまくいくパターンだ。
「まず俺たちは担当する科目を分担して学び、審神者に教えることにした。俺たちが一から勉強しても遅いかと思ったが、ひと月もすれば審神者の理解度を追い越した。出陣が無いと暇で勉強ばかりしていたからだ」
大倶利伽羅は棚から本を取り出し、表紙の埃を払ってからページを開いた。俺から見える背表紙には、『近代史』と印字されている。
「薬研が化学、青江が生物、歌仙が国語、他の奴らもそれぞれ別の分野を学んでいた。俺が学んだのは人の歴史だ。もう生物と国語は教えられる奴がいない。だから、長谷部おまえには、俺が知っていることを話しておく」
そんな遺言のような講座は嫌だ。そう言ったが目の前の歴史教師には聞き入れられず、静かな蔵の中での特別授業が始まってしまった。
順番に話すが、一度に理解するのは難しいかもしれない。
長谷部、おまえが言っていた『時間遡行軍』との戦争が始まったのは、いつのことか知っているか。

「薬研から、五十年前のことだと聞いた」
そうだ。西暦２２０５年、本丸や万屋のシステムが整備され、事前に政府の教育機関で研修を受けていた審神者がそれぞれの本丸に配属された。それより前に出現し歴史の改変を目論んでいた時間遡行軍への対抗勢力として。
審神者が受けていた教育とは、付喪神顕現法。歴史改変を最初に目論んだある宗教団体の開祖が創出し、審神者が所属する正規政府と、時間遡行軍を束ねる革命政府に流出した、俺たち付喪神に人の肉体を与える呪術のことだ。
「宗教団体？そいつらとも戦っているのか？」
いや。ＤＭＭ…大日本密教妙法会は目的を果たすことなく正規政府によって殲滅された。俺たちが戦っていたのはその術式を使用して時間遡行軍を作った革命政府の方だ。
それから十年の間に、幾つかの重要な出来事があった。だがここから先は、ここの審神者がいなくなってから俺が独自に調べて知ったことだから、教科書には書いていない。試験には出す。
「試験！？するのか？」
当たり前だ。授業の後は確認テストをする。
「聞いてないぞ！言われたらノートくらい取ったのに！」
口頭で二、三質問するだけだ。続けるぞ。
重要な出来事の一つは、異常に短い期間でカンストし、負傷が自然治癒する特殊な刀剣男士が出現したこと。彼らは『ＲＣＳ（rare counter stop）成長体』と名付けられた。
ＲＣＳ成長体を使役する審神者は、普通の人間では務まらなかった。そこで政府は審神者を人工的に製造する研究を始めた。
「それが、あのアルジか？」
この段階では違う。ＲＣＳ成長体を使役するには膨大な呪力が必要だったから、強い呪力を持つ審神者が集められ研究に協力させられた。研究は成功し、二体の人造審神者が完成した。箱型ではなく人型を取っていた。
「それほど強い審神者と刀がいたのなら、戦いはとっくに終結しているんじゃないのか？」
二体のうちの一体は、全てのＲＣＳ成長体を連れて逃亡したと記録に残っている。政府はもう一体の人造審神者と、併行して製造していたＲＣＳ成長体の模倣品である『ＲＣＳ合成体』を追跡に向かわせたらしい。
「審神者と刀同士で争わせたのか」
そういうことになるな。しかし、追跡した方は迎え撃たれて敗走したらしい。政府の施設に帰還したその二体は、そのころ盛んだった別の研究に転用されることになった。
……どうした？
「いや……なんだか少し気分が悪くなっただけだ。大丈夫、続けてくれ」
人造審神者は、逃げた一体が７７４、もう一体が９９９という番号を振られていた。７７４は体内で無尽蔵の呪力を生み出せたが、９９９は際限なく貯蔵できるというだけで生み出すことはできず、外からの補給が必要だった。
そしてＲＣＳ合成体は、７７４と９９９の両方の性質を

持ち、外から補給することで呪力を際限なく貯蔵できる上、その呪力を体に触れることによって他の刀剣に分け与えることが可能だった。
　刀剣男士は人の肉体を与えられている。その刀剣男士を改造することで、補給が必要という制限はあるもののほぼ不死身に近い生命体を作れたのがＲＣＳ合成体だ。これを作れた人間たちはこう考えた――この結果をうまく使えば、人間の不老不死が実現するのではないかと。
「馬鹿な。俺たちと人間の体は違う」
　それが分からないほど目が眩んでいたんだろう。ＲＣＳ合成体の体組織を元に薬を作り、それを人間に投与した。それが、俺たちが現在戦っている理由であり対象でもある、『ＲＡ（rush alive）ウイルス』の正体だ。
「人間たちが自分で作った失敗作だったというのか？」
　そうだ。外からの補給を受ければ半永久的に体内の細胞を回復させ続けるから、姿形が老いず、むしろ強靭になる。だが脳は細胞分裂の状態を見て、時間が経過した、老いていると認識して委縮してゆき、やがて機能停止してしまう。これで人間は死ぬ。生き急ぎウイルスと呼ばれる所以だ。
　外からの補給、つまり呪力の経口摂取を行うときに、人から人へ、人から刀剣男士へ、刀剣男士から刀剣男士へと感染は拡大した。人は呪力だけでは肉体を保てず死亡するが、刀剣男士は脳が壊れても呪力さえあれば肉体が滅びず動き続けられる。
　感染すると、呪力が回復源ゆえに本能的に呪力を秘めた生命体――審神者や刀剣男士を襲い、その血液を飲もうとするようになる。歌仙がゾンビとか言っているのは、刀剣男士が感染し、本能だけで動くようになった姿だ。ちなみにこの猫が感染していないと言ったのは、人間より寿命の短い動物が感染した場合、感染とほぼ同時に発症してすぐに死んでしまうからだ。見れば分かる。
「時間遡行軍との戦いと、ウイルスに感染して狂暴化した刀に襲撃されることは、別の出来事だと思っていた。なら出陣先で、おまえたちが戦っているのは」
　もう今では、刀剣男士も時間遡行軍も関係ない。どちらも『錆びた刀』――ＲＡウイルスの感染者だ。人間や刀剣の血を吸い、呪力が尽きるまで動き続ける。一体でも多く殲滅し、無事な時代の人間へのパンデミックを防ぐことが、今の俺たちに残された任務だ。
「それじゃあ、他の時代に置いてきた青江や歌仙は、発症したら殺されてしまうのか！？」
「感染した仲間を本丸に生かしておいて、発症したそいつに襲われたときはどうするんだ？そのときは俺たちが殺すことになるだろう。同じことだ」
「っ、それは……」
「授業は終わりだ。長谷部、今から三つ質問をする」
「テストか？待て、全然頭が追いついていない」
「第一問。あのアルジは審神者の代わりに製造され各本丸に設置された時間遡行機だ。手動でも動かせるが、基本的には感染者のいる時代を検知して自動的にゲートを開く。

では、審神者はどこへ行った？」
「審神者は……人間だから、感染して死んだ……？」
「正解。第二問。あのアルジはただの時間遡行機であって鍛刀や手入の機能はない。このことと、手動で動かしても演練がなかなか出ないことの関連は？」
「手入できなければ……いずれ折れる。本丸が、減っている？だから演練で当たる確率が下がってるのか？」
「正解。第三問。手入できない条件は同じなのに、この本丸では怪我をしても回復できるのはなぜか？」
「……薬研が薬をくれるからだ」
「薬って何だ？」
「血液……あれ、ちょっと待て、よく分からなくなって…今どこまで行った？何が分からないのか分からない」
「……ここにいた馬鹿もよくそう言ってた」
　このあたりで抑制が入るのか、と誰にともなく言って、大倶利伽羅は手の中で遊ばせていた近代史の本を棚に戻し、蔵の扉を開けた。明るい光が差し込み、明暗差にたまらず瞼を閉じる。
「そろそろ行く。猫のことは薬研には黙っててくれ」
「隠したいなら、あんな所で遊ばせておくなよ」
「……あいつは、廊下を歩くとき足元を見ていない。自分以外の短刀がいなくなってから見上げてばかりいるうちに癖になったんだろう」
　いつの間にか床で寝息を立てていた猫を抱き上げ、蔵を出て行こうとする彼の背中に声をかけた。
「おい、俺の質問にも答えろ。なんで俺にさっきの…色々教えてくれたんだ？おまえは口数の多い方じゃなかったはずだし、俺ともそんなに交流がなかっただろう」
「……話してもいいが、どうせ覚えていられないぞ」
　その輪に封じられているあんたのことが可哀想になった。
　大倶利伽羅はそう言った。六月に、青江からも似たようなことを言われはしなかったか。
「何度も怪我を治してもらった恩もある。この本丸の刀が何体も残っているのは、あんたがここに寄越されたおかげだからな。あとはたぶん、俺も前の持ち主の所から移ってきた言わば余所者だから、同類の憐憫だ」
「おまえも下げ渡されてここに来たのか？」
「あんたが来るずっと前だがな。演練の場でここの審神者が俺を欲しがり、あっさり譲り渡しやがった。前の審神者の名はアヤメ。後に『トドメ』という化け物を産み落として死んだ女だ」

……
……
……
……
「……なんだ、いないのか」
　目を覚ましたら燭台切が部屋にいるのがパターンだと思っていた。慣れって怖い、と思いながら起き上がり、襖を開けてみると、外はまだ暗く、夜空に星が瞬いていた。

変な時刻に起きてしまったようだ。
　また長い夢を見ていたようで、頭が重い。部屋の文机の上に燭台切が水差しとグラスを用意してくれているのを見付け、ありがたく頂戴した。喉が渇いていたので嬉しいが、やっぱりサービス良すぎるだろう、旅館の仲居かあいつは。
「……ん、これは、短冊？」
　グラスを置いたとき、机の上に紙の短冊が置かれているのに気が付いた。色紙を長方形に切り、穴を開けて紐を通してある。時期的に七夕用の短冊だろう。
「こういうことを言いだすのは、歌仙か、短刀たちか…？それで燭台切が準備に駆り出されてるってところか」
　新人は大変だなと思いつつ、日頃世話になっている礼に少し手伝ってやろうかと思い立った。
　日中にはまだ笹は飾られていなかったので、おそらくこれから手頃なやつを探しに行くつもりなのだろう。たしかどこかに出陣したとき、薬研が漢方薬の材料にすると言って、そこで見つけた熊笹を持ち帰っていたことがあった気がする。それを貰って、あいつらに渡してやろう。
　薬研は遅寝遅起きだからまだ起きているかもしれないなと思い、俺は手燭に火を灯すと、廊下へ出て薬研の部屋を目指した。本丸の長い廊下の一番奥の突き当たりに近侍の部屋は位置している。すぐ駆けつけられるよう主の居室の近くに配置されているのだ。
　部屋の戸の前まで来て、他の奴らを起こさぬよう、声を潜めて呼びかけた。何度か繰り返したが返事がないので、寝ているかもしれないと思ったが、念のため襖を少しだけ開けて中を窺った。
「なんだ…いないのか」
　部屋に薬研はいなかった。どこへ行ったのだろう、今日は夜戦でもあっただろうか？さすがに勝手に物色するわけにもいかないので、明日また改めようと踵を返そうとして、ふと違和感を感じて立ち止まった。
　あいつの部屋って、こんなに前衛的な感じだったか？
　室内を手燭の明かりで照らし出すと、壁一面、天井、床に至るまで、墨汁を撒き散らしたように何かがびっしりと書き込まれていた。植物の名前、数字、アルファベット？ところどころに仲間の名前も書き殴られている。
「……これは、何だ」
「『絵』だよ、長谷部君」
「――燭台切」
　いつから居たのだろうか。燭台切が廊下から俺に声をかけてそのまま部屋に入ってくると、夜更かしは体に悪いよと言って俺を背中から抱き締めた。
「絵？これが絵なのか」
「ねえ長谷部君、お水置いておいたけど、飲んだ？」
「水？飲んだが、それが何」
「絵だよ。これは薬研君の描いた天の川の絵だよ」
「薬研が描いた、絵……」
「絵だよ。絵だろ？綺麗だね」
「……ああ、きれいだな。いい絵だ……」

燭台切が俺の体を前に向かせ、正面からまた抱き締めた。頬に触れてくる手が熱く、なんだか嫌な予感がすると思ったら案の定キスをしてこようとしたので、手の平で迫ってくる唇をガードしたら、「なんで」と不満そうに低い声で唸った。
「なんで？当たり前だろ薬研の部屋だぞ！」
「じゃあ、僕の部屋ならいいの？」
「え、あ、ああ…？」
「分かった。行こう」
言うが早いか俺の手を掴み、燭台切は俺を廊下へ連れ出すと、真っ直ぐに彼の部屋がある方向へ歩いていく。
「ま、まま待て、おまえの部屋に行ったら、俺は何をされるんだ」
「分かってるくせに…言わせたい？長谷部君の怪我も治ったし、僕は随分辛抱強く待ったつもりだよ。今日は絶対に君を抱く。もう待たない」
「う、でも、もうすぐ朝だぞ。ああああと、七夕の日にするって言ってただろ？？」
「…よく覚えてたね。でも残念、日付が変わって今はもう七月七日、七夕だよ」
燭台切の部屋に連れ込まれるなり、やたらとでかい寝台の上に押し倒された。俺が大怪我をしてこの部屋で看病を受け、四月に目を覚ましたときに、部屋の奥の方にあったやつだ。俺が三月まるまる昏睡していたときは、こっちに彼が寝ていたのだろう。俺の様子を気にかけながら。
「……燭台切」
「なに？ごめんね…待てって言うなら」
「いや、分かった。分かったから……おまえの、好きにしていいから。だからその…俺があまり上手くできなくても、がっかりしないでくれ」
怖い顔になっていた燭台切の目が丸くなって俺を見た。なんだよ見るなくそ、なんかよく分からないんだ、と、我ながらどんだけカマトトぶってんだと恥ずかしくなる台詞を、しかしそうとしか言いようがなくて彼に投げつけた。
「君ってほんと…いや、うん、分かった。今日は長谷部君のこと、はじめてのときみたいに抱いてあげる」
「〜〜！はじめてとか！初めてじゃない！」
「初めてじゃないの？」
「た、たぶん…。いつもしてるはずだし、ただちょっと、緊張して思い出せないというか、でも忘れたわけじゃ、ちゃんとすぐに思い出すから」
「長谷部君、落ち着いて。大丈夫、怒らないよ。長谷部君はいつも夢中になってわけ分かんなくなっちゃうもんね」
そうだっけ。俺ってそんなに好き者だったっけ？しかし、確かに覚えてないので最中は意識を飛ばしてしまっているのだろう。軽く自己嫌悪に陥った。
燭台切の指が俺のシャツのボタンを外し、鎖骨の窪みを指でなぞり上げた。だめだ、やっぱり全然思い出せない。
「ふ…本当だ、緊張してる。大丈夫だよ、君がどんな風に喘いで、何をされたら気持ちがいいのか、ちゃんと教えて

あげるから」
　そうしたら、君は本当にそうなるんだ。
　首筋に吸い付かれたら、ぞわぞわと体が震えた。頭の中に直接文字を書き込まれているような、この感覚には覚えがある気がした。
　そうだ、ちょうどこの首筋に、こんなふうに俺を変えてしまう何かが巻き付いていたような、そんな気が。

6　いつわりの弥生

へし切長谷部がドロップしました。
正確には、演練で出会ったへし切長谷部を殴打し、気絶したところを自分の本丸に持ち帰って飼うことにしました。
もしまだ君が生きていて、僕がこんな遊びをしていると知ったら、きっと呆れた顔でこう言うだろう。
燭台切の旦那、あんたやっぱり気が狂ってるぜ、と。

例の病気はどうやらＲＡというウイルスが原因らしい。僕の本丸は、数か月前から新たに発見したその話題で持ちきりだった。飽きもせず毎日毎日同じ話。うんざりする。
まあ大目に見てやれよ、と近侍の薬研藤四郎は僕の顎に軽く頭突きして言った。
「こないだ演練で当たった連中に触発されたんだろ。面白い奴らだったじゃねえか。『氷の美術館』の研究調査をして、この流行り病の原因を突き止めたなんて」
「突き止めたから何だったいうんだ。いまさら原因が分かったところで、感染を止められるわけじゃない。あれから皆して六本木に行きたがって、毎日あの寒い場所に行くようせがまれる。いい迷惑だ」
「旦那の目押しテクを当てにしてんだよ。いいじゃねえか」
「よくない。あんな場所、行っても何も手に入らないし」
僕がアルジの目押しを練習したのは、食糧や生活必需品の調達が出来る時代を探しておいて、そういう時代を見付けたら、次からも行きたいときに狙って行けるようにするためだ。命知らずの林間学校のためじゃない。
「初めて潜ったときは旦那も珍しそうに探索してたのに、可愛げがなくなったなぁ。あのときは凄いものを拾ったって興奮して帰ってきて、しばらくどこ行くにも持ち歩くほど大事にしてただろ？」
「ああ…あの本…。あれは、その演練で会った他所の部隊にいた本好きの刀にあげたよ。六本木で拾ったって話をしたらどうしても読みたいから貸してくれってしつこかったから。貸したって次にいつ返してもらえるか保証がないだろ？だからあげてしまったよ」
アルジが２２５０年へのゲートを開き、初めて出陣した六本木は、白い壁の建物全体が氷に覆われており、地下にどこまでも深く続いている広大なマップだった。とにかく敵の数が多く、連戦に次ぐ連戦のうちに疲弊した僕たちは、途中で見つけた無人の部屋に身を潜めて少しの間休憩を取った後、隙をついて脱出した。拾った本というのはそこで偶然見つけたものだ。
演練で会った紫色の髪の刀は、本を数頁捲るなり、「なんてことだ、実在したのか。皆にも教えなければ」と興奮に目を輝かせていた。彼らが調べていることにとって重要な情報がその本の中にあるらしかった。

だが僕にとっては、そんな小難しいことが書かれてある本ではなかった。僕が驚いたのは、その本の作者がどこか別の本丸にいる燭台切光忠であり、その本の内容が、彼があの『へし切長谷部』と恋仲になって平和に暮らすハッピーエンドの恋愛小説だったことだ。

へし切長谷部とは、僕自身はろくに話したことがない。この本丸に来て長い僕だが、鍛刀で来ない、ドロップでも来ない、演練で会っても不愛想ときたもんで、刀だった頃の記憶まで遡ってみても、織田家に置かれていた一時期、話しかけて完璧に無視された苦い思い出しかない。後から聞いた話では、号を持たない見目の悪い刀とは喋らないというド面食いだったらしい。確かに当時の僕はろくに使ってもらえなかったから服装を気にすることもなかったし、髪もぼさぼさだった。だからって酷い性格だと思う。

そんなへし切長谷部と、僕――燭台切光忠が、互いに惹かれ合い、結ばれる世界があるというのだから、意外性が振り切っていて、なおかつ自分が書いた自分が主人公の話を自分が読む、というややイタイ状況も面白くて、何度も暇さえあれば読み返していた。

「あんなに大事にしてたのに、よくくれてやる気になったもんだ。利他の精神だって数珠丸あたりが褒めてくれるな」

「数珠丸さんが進んで僕と話すわけないだろ。彼から見たら僕は地獄の悪鬼だ」

「……そんなことはねぇよ。俺も俗物なもんで知ったかはできんが、仏道ってのはそう単純なものじゃないと思うぜ」

そうだ。この小説を、ここではない平和な世界へ行く方法がどうだのと、他所の刀から前のめりになって熱弁されたときに、急に現実に戻されてしまったのだ。

僕が長谷部君と悠長にいちゃいちゃしていられるような平和な本丸なんて存在しない。そんな本丸を維持できるような強い審神者も存在しない。人間の世界で恐ろしい病が流行り、本丸へ逃げ込んだ審神者は毎日怯え暮らしていた。資材が尽きても出陣させることを恐れ、万屋を中継して他の本丸へ侵入し、資材や食糧を略奪してくるという最低な任務を僕らに与えた。そしてその審神者も、僕らの中から出た感染者に噛まれてあっけなく死に、僕らはゆっくりと呪力を消耗しながら、静かに衰えていく。これが、僕らの現実だった。

「少し夢を見たかったのかな。でも本を手放したら、自分がここにいるしかないと分かって、かえって清々したよ」

「そうか。あんたにだけは、夢も見せてやれずに悪いな」

俺の薬が効かない旦那が悪いんだぜ、と言って彼はまた僕の顎に柔らかい髪を擦り付け、猫のするように甘えた。胡坐で座る僕の足の間にもぐり込み、王様の椅子のように扱ってくる。

彼を抱きかかえた格好で、その小さなつむじの上で頬杖をついたら「重い」と文句が出た。

六本木で怪我をしてしまったので薬を貰いに彼の部屋へ立ち寄ったのだが、いつ来てもしんどくなる部屋だ。まだこの薬を作り始めたばかりの頃に、薬研君が苦しみながら

壁、天井、床にいたるまでその苦悩をぶち撒けた跡をそのまま消しもせずに残している。それどころか、この真っ黒な悲鳴の壁紙が貼られた部屋で、平然と今まで通りに寝起きしているのだ。

「君はさぁ、狂っちゃったんだね」

薬研君が両手でちびちびと飲んでいるグラスをひょいと奪い、その中の液体を飲み干す。

一口飲むごとに、刀傷が塞がっていくのが分かる。これは薬研君が僕らを生かすために必死で作った薬だった。壁に書き殴られているのはその材料。数多の漢方と、富士の霊水、そして、僕が殺し冷凍庫に保存した審神者の体組織などなどをどう配合すれば呪力を補給できるのか、化学式で書き留めたものだった。

「狂ってる？俺っちが狂ってるんなら、『ごく普通に』狂っているんだろうな。試し飲みしている間に、あの副作用の恩恵は俺には得られなくなった。それを残念に思っているのか、それとも、他の奴らが自分に都合のいい夢を見ながら死んでいくのを科学者として成功だと喜んでいるのか、もう判別がつかない。日常なんだよ、この部屋も、おまえさんとのこの関係も」

彼は僕の腹の上に身を乗り出し、噛み付くようなキスをした。舌の上に残った水滴を舐め取り、すぐに唇を手の甲で拭って、狂っているのは旦那の方だよ、と呟いた。

「僕が？自分に都合良く現実を捻じ曲げて、妄想の世界に逃避させるこの『夢見水』を飲んでも、現実を正しく認識していられるのは君と僕だけじゃないか。その僕が狂っているなら、錆びた刀の後始末なんてするもんか」

関係を始めたのはどちらからだったろう。薬研君と恋仲にあったあの刀が戦場で彼を庇って噛まれて感染し、発症して暴れ出したのを僕が斬り殺した、あの夜からか。

薬研君は、僕が自分の代わりに彼を楽にしてくれたのだと思っているのかもしれない。贖罪または礼のつもりか。だとすれば勘違いだ。彼らは他の弟たちに気を遣い、完璧にその恋愛を忍んでいた。僕だって、彼が僕の下で泣きながらうわ言のようにその刀の名を口にしなかったら、今も気付かずにいただろう。

彼にとって僕は、恋人の身代わりにもなれないだろうし、僕もまた、とても冷めた気持ちで、彼の体が与えてくれる快感に縋りついている。

「そんなに苦しそうな顔するなよ、もっと搾り取ってやろうか？それとも、そろそろ旦那も俺の水に屈してくれる気になったか」

「にこにこ笑いながら射精してほしいかい？生憎と、こんな時にしか苦しいって思えないんだ。他の皆はどうやって『自分に都合のいい世界』を思い描いてるの？僕の想像力が足りないのかなあ」

どんな現実でも、それは現在進行形で自分に起こっていることで、嫌だなんて思ったところで、受け入れてしまうしかないだろう？感染した刀の始末を僕がしていることを、薬研君は申し訳ないと思っているようだけれど、他の刀が

夢見水の効果で過剰なストレスを受け入れられなくなっている今は、確実に感染者の息の根を止めて二次感染を防ぐことができるのは僕しかいない。僕しかいないのだから僕が殺るしかない、その現実を、ただ現実として認識しているだけなのだ。
「……過度の理性は狂気と同じだな。出来ることなら、俺以外の奴は全員夢の国送りにしてやりたかったんだが」
「ディズニーランドなら、この間行ってきたよ？」
「うっそだろ、俺っちも連れてけよ」
「わわ、いきなり起き上がらないで薬研君、折れちゃう」
「えぇ？ははは、いいな、その死因」
「良くないよ……はあ、喋ってたら別の意味で中折れした。ちょっとお風呂に入ってくるから、また後で付き合ってくれる？廃墟ランドは今度連れていくからさ」
みんなの六本木ブームが過ぎたらね、と溜息を混ぜて言うと、裸の足を伸ばしながら、そりゃしばらく無理だなあと笑った。

そういえば、あれからセックスしてないな。
夜半、厨で解凍した審神者の親指を磨り潰す作業に没頭していたらふと生理的に半勃ちした。あーあと思いながら、とりあえずは水を作り置きしておくことが優先なので、下半身が膨らんだまま作業を続ける。
薬研君は、僕を狂っていると言った。行き過ぎた理性は狂気と同じだと。僕にはそれがぴんとこなかったのだが、あれから数日後に感染した彼をこの手で殺して、とうとう一人ぼっちになってしまったとき、部屋の布団を外に干しながら、少し分かったような気がした。
僕が狂っていたとして、しかし狂っていたからこそ他の本丸のように感染した刀を野放しにせず、苦しませることもなく死なせてやることができたのだ。意味があったことだと思える。
だが、もはや意味はない。ここで理性を保っていたとて誰の役にも立たず、人間たちの役に立つべく出陣したとて単騎では犬死にだ。糞の役にも立たない。精々が感染者の数日分の餌だろう。コスパ悪すぎる。
そこまで考えて、僕は単騎で出来ることを思いついた。演練だ。滅多に出ないが、前に出たときは確か西瓜の絵を揃えれば良かったはずだから、目押しすればいけるだろう。演練なら感染していないまともな刀と戦える。真剣勝負を頼んで、そろそろ僕も死なせてもらおうと。
「まさか、へし切長谷部があんなに弱いなんてなぁ」
思わずついて出た独り言は、誰もいない厨にやけに大きく反響した。アア独りぼっち感が際立つ。でも今晩からは二人ぼっちか。にま、と口が〈の字を描いていた。
昔の函館ステージにいた敵短刀だってこんなに弱くなかったぞってくらい彼は弱かった。掴んだら折れるって、石でも投げてたら即死だったんじゃないか。まあ僕は投石兵装備できないけどさ。

一体どうやって彼がこれまでの戦局を生き延びてきたのか気になった。他の犠牲のもとにおめおめと生き延びてしまった…とか言っていたな。戦力にならないから戦には出さずに匿っていたのだろうか？どこの本丸も資源不足のはずなのに随分と情の深い本丸があったものだ。

まあそんなこと言って、僕も彼のことをペットよろしくこの本丸に囲おうとしている、さらに言えば彼の死にたいという意思を奪って、自分好みに洗脳してやろうと、こうして夢見水を調合しているわけなので、あのへし切長谷部は戦えずに飾られる運命にあるのかもしれない。

「……僕に斬られて眠れたら幸せだって、君が言ったんだ。だから僕にどうされても、構わないよね」

僕を見て、おまえのような美しい刀、と言ってくれた。

昔は歯牙にもかけてくれなかったくせに、とろけるような熱っぽい瞳で僕を見て、教えてもいないのに、まるで昔から呼び慣れた名のように僕の号を呼んだ。そのときに、ひょっとしたら、小説の中の燭台切光忠とへし切長谷部を現実にできるような気がしてしまった。そして気づいたら、拉致っていたというわけだ。

連れ帰ってすぐに僕の部屋に寝かせて水を飲ませたから、僕に殴られた頭の傷はすぐに良くなるだろう。なんとか国広という、たぶん彼の仲間の刀と廊下でぶつかったときは一ヶ月半も意識が戻らなかったと言っていたから、怪我が治っても、目を覚ますまでには時間がかかるかもしれない。

その間に、計画を立てよう。

彼は僕に殺してもらう目的で一人で演練の場に現れた。アルジは演練を引くとけたたましい音を出すから、仲間に気づかれずにこっそり来たとは考えにくい。おそらく彼の本丸には、彼一人しか残っていなかったのだ。僕の本丸と同じように。

すると、彼にとって都合の悪い状況とは、誰も生き残っていないこと、都合の良い状況とは、全員生き残っていることだろう。もう少し細かい設定が入るかもしれないが、その基本は守らなければならない。

夢見水を服用した刀は、軽症を癒せる程度の呪力を補給できるのと引き換えに、副作用で幻覚症状を起こす。自分にとって都合の悪い事象を認識できなくなっていき、自分にとって都合の良い事象を捏造して、それが現実として成り立っている妄想の世界で暮らし始めるのだ。

彼には、燭台切光忠が書いたあの小説のように、僕を好きになり、僕と恋仲になってもらいたい。だが、彼の中で、そうなることで何かしらのメリットがなければ、捏造する要素に加えてもらえないだろう。さてどうすれば、彼の中で『燭台切光忠と恋人でなければ都合が悪い』状況になるのだろうか。

「思いつかないな…。案外、初めから恋人でしたって顔で接したら、そういうことにしてくれるかもしれない」

そもそも、目が覚めて僕の顔を見たときに、僕のことを燭台切光忠だと認識できるのだろうか？あのとき名前を呼んでくれたけど、最初は僕のことを覚えていないと言って

いた。よく見知った男を恋人にするのと、見たことも聞いたこともない初対面の男をそうするのとでは、ハードルの高さが大分違う気がする。とりあえず、どういう設定で来られても対応できるように、彼の出方を窺うことにしよう。

磨り潰した肉を圧力釜に放り込み、蓋をする。女の肉は指にまで脂が多くて乾燥させるのに手間がかかる。いっぺんに加工してしまえれば楽なのだが、血肉に残った呪力は体から切り離されると急速に減少してしまうらしく、こうして少しずつ冷凍庫から出して肉骨粉に加工しなければならなかった。

審神者が死んだとき、感染した刀に噛まれてその刀もろとも僕に始末されたとき、一時の感染拡大は免れたものの、本丸内にはもうこれで終わりだというムードが漂っていた。これからは負傷しても手入してもらえるあてがない、積んだなという空気だ。

薬研君が近侍としての責任感から悩み苦しみ考えあぐね、その結果たどり着いてしまったのは、まさしく悪魔の発明だったと思う。感染した刀が審神者の血を求めたのは、刀にとって必要なもの、すなわち呪力がそこに含まれているから。ならばその血から感染病原さえ除去できれば、薬として利用できるのではないかと。

加圧蒸煮して油分を除き、乾燥、粉砕してから菖蒲の葉や霊水で清め、濾過を繰り返す。そうして作ったこの水は、飲んでも例の病に感染しないが回復薬としての効果も僅か、幻覚症状という副作用付き、という代物だった。

うまくいかねえもんだなあ、と薬研君は自嘲気味に笑っていた。感染病原――後に演練で会った部隊からＲＡというウイルスだと聞かされたそれを除去できると分かったときは感染病自体をこの水で治療できるのではないかと期待したのだが、感染した仲間を拘束して飲ませ続けても結局発症した（その時も僕が始末した）。僕は六本木の研究調査には乗り気じゃなかったので、これは根拠のない仮説だが、そのＲＡウイルスとやらは、ウイルスそのものが呪力を餌に増殖するのではないかと思う。餌が微量すぎると生命を維持できず死滅するということなのではないだろうか？

とりあえず仕込み作業は終わった。大きな上開きタイプの冷凍庫を開けて中の在庫を確認する。節約して使ってきたつもりだったが、もう随分減ってしまっている。彼に毎日飲ませるとして、もって半年強というところか。

冷凍庫を閉めて留め金具を掛け、更に南京錠を掛ける。開かないことを確認してから、水差しとグラスを盆に載せ、厨を出た。

へし切長谷部は本当にひと月も目を覚まさなかった。頭の傷はとっくに治っているはずなのに、ひょっとして打ちどころが悪くてこのまま目覚めないのではと焦ったが、口を開けさせて夢見水を数滴ずつ与えるとしっかり嚥下するので、いずれ起きてくれるだろうと楽しみにしながら、僕の部屋に敷いた布団の上で静かに寝息を立てる彼の姿形を飽きずにずっと眺めて過ごした。

四月になり、アルジが自動的に景趣を変更して桜吹雪を吐き散らす季節になったので、今年は一人で掃除するのか億劫だなあと考えながら、彼に今日の分の水を投与しようと自室の襖を開けたとき、唐突に彼は目覚めていた。
「……やぁ、目を覚ましたんだね」
不意を突かれたので、咄嗟に言葉が出てこなかった。
（薬は効いているのか？だとしたら、彼にとって不自然な情報を与えては駄目だ。僕のことは覚えているのか？）
「おまえは…誰だ。新しく来た刀か？ここはおまえの部屋か？俺はどのくらい寝ていたんだ」
「……まぁ、そういっぺんに質問しないでくれよ。順番に話すから」
（僕を覚えていない。僕を新しく顕現した刀だと思っている。ということは彼の中の本丸ではいまだ鍛刀かドロップによって新しい刀が増える。アルジではなく審神者がいる設定なのか？いやまだそれは分からない。焦るな。ここを自分の部屋ではないと感じている――彼には個性がある。設定を合わせなければ！）
僕は彼の隣に座って、じっと彼の表情を観察した。不可解そうに眉をしかめたが、視線を逸らさない。敵意はないようだ。自分の本丸に来た新しい仲間という認識に疑問を抱いてないのだろう。ならばそれに合わせた方がいい。
「へし切長谷部君」
「長谷部でいい」
「じゃあ長谷部君、いつ出陣したか、覚えてる？」
「出陣？……俺が？…いや」
（僕の部屋で寝かされていた理由付けが必要だ。僕は新人の刀。彼は出陣して怪我を負い、練度が低くて出陣の命が下らない僕が看病を仰せつかった）
「覚えてないんだね。無理もない、命からがら撤退する最中で、ひどく頭を打ったらしいから。なんとか帰って来られたけれど、今日までひと月以上もずっと目を覚まさなかったんだよ。良かった、気がついて」
本当に良かった。こうしてまた彼と会話ができるなんて。この本丸で自分以外の誰かと言葉を交わすこと自体、演練に出る前の期間も含めると、本当に久しぶりのことだった。
「久しぶりに起きて喉が渇いてるだろう。ほら、とりあえず水でも飲んで」
僕はそう言って立ち上がり、小さなサイドテーブルの上から硝子の水差しとグラスを取り、水を注いだグラスを彼の手に握らせた。そしてまた彼の隣に座り、彼が僕の説明に対してどう反応するのか様子を窺った。
「ひと月も…寝ていたのか。その間、おまえが俺を看てくれていたのか」
彼は警戒することなくグラスを受け取り、水を飲んだ。実際喉が渇いていたらしい。あっという間にからになったグラスに、また水を注いであげた。
「そうだよ。ああでも気にしないでくれ。僕は君が寝ている間に来たばかりの新人で他にやることもなかったし、そうするようにという指示もあってのことだよ」

「指示…薬研か。まったく、近侍だからって余計なことしやがって」
（近侍は薬研藤四郎。面白いな、奇遇だね）
「顕現したばかりなのにひと月も怪我人の看病に時間を使わせて、悪いことをしてしまったな。後で俺から代わりに文句を言っておく」
「そんな、いいんだよ。こうして長谷部君も良くなったことだし、戦ならこれからいくらでも出られるじゃないか」
「それもそうだな。看病の礼に俺が鍛えてやろう。後で手合わせしようじゃないか」
（ええ！？）
「え、えー…大丈夫かな」
「なんだ覇気がないな。そうだ、薬研が帰ってきたら俺と同じ第一部隊に入れてもらおう。一日で特を付けてやるからな、覚悟しろよ」
（まさかの俺強い設定！？嘘でしょ！？）
　これは予想していなかった。どうしよう、ちょっと掴んだだけで肩の骨が折れるような刀と手合わせなんかしたら殺してしまう。
　とりあえず一度この会話を打ち切って、どう辻褄を合わせていくか考えた方が良さそうだ。僕は再び立ち上がり、食事の支度を口実に、部屋を出ていくことにした。
「分かった分かったよ、でもね君はまだ本調子じゃないんだから無理は禁物だよ。薬研君にはあとで僕が話しておくから、君はもう少し寝て万全の状態にしてくれ。夕食ができたら起こしに来るよ」
「……そうか、悪いな」
　わざとらしく、消化にいいものを作らないととか何とか独り言を言いながら、そろそろと廊下に出る。
「あ、おい」
　その背中に彼が声をかけた。思わず緊張して振り返る顔がこわばってしまったが、その後に続けられた言葉に安堵して自然と笑みがこぼれた。
「おまえの名前を聞いていないが」
「……ああ、そうだったね」
　水を飲んだおかげで血の巡りが良くなったのだろうか。彼の頬がわずかに紅潮している。
　彼の世界は紛れもなく作り変えられている。彼は自分の本丸に新しくやって来た太刀と知り合った。もう後戻りも謝罪もできない。僕は自らが夢を見れない代わりに、彼の見る夢の中の登場人物として生きていくのだ。
（薬が尽きるまで、君の物語の中で生かしてくれ）

「僕は燭台切光忠。これからよろしくね、長谷部君」

7　葉月ならばqの命題

それはちょっとあんまりじゃないか、と俺が言ったら、明石国行はデザートスプーンを口に咥えたまま、何がですのんと器用に聞き返した。
「その格好だ。暑いからって、見苦しいぞ」
明石は縁側に腰かけて、ジャージの裾をまくった両足を水桶に浸し、首には手拭いを掛け、硝子の器にこんもり盛ったシロップなしのかき氷を口に運んでいた。どうせなら自分の部屋でこっそりやればいいものを、わざわざアルジの目の前の廊下、いつも時間遡行ゲートを開いている庭先でぐうたら生活を満喫しているのだ。
「長谷部さんも、どうです？」
「俺にもその桶に入れってか」
「温くなりますやろ、こっちを使こうてください」
ずるずる、と縁の下に手を入れたかと思うと第二の桶を出してきた。ご丁寧にも既に水が入っている。
「俺が来るのが分かっていたのか？」
「長谷部さんが、とまでは。ただ、出陣できんと暇したはる残りん人数を考えたら、自分がここにおる間に一人は通りかかると思ったんや。社長さんラッキーでしたなぁ」
「何がラッキーだ、これ洗濯用の桶じゃないか」
「物は使われとるうちが花やで。そこいくと、アルジはんも災難やったなあ。可哀想に、もう動かせえて暴れるんも諦めてしもたようやね」
いっそスト起こしてずっと春にしといてくれはったら、暑うなくてええんですけど。そう言って、ちらりとアルジを見る。七月に大倶利伽羅ほか数名の謹慎のために鉄線でぐるぐる巻きに固定されたまま、アルジはレバーを動かそうとガチャガチャ暴れることもしなくなり、景趣の変更や電気供給という付属機能だけを作動させていた。
「おまえも、大倶利伽羅と一緒に出陣していたのか？」
小言を言っておいて何だが、涼しげな水桶の誘惑に抗えず結局誘われるまま隣に座ってしまった。隣に倣って裾をまくり、足を水に入れると、体に溜まった熱が一瞬で吸い取られていき、ついうっとりと目を閉じた。
彼は俺の問いかけに対し、はぁー、と長い溜息をついて、ほんま自分やる気ないのが売りなんですけどな、と気だるそうに肯定した。
「けどなぁ、こうなっては仕方ないやんか。調べ物は大事なもんほど地下深くにあるみたいやし、そこまで行かはるには雁首揃えたかてぎりぎりの人数なんえさかい。自分が学校サボって、それでだれぞ錆びて戻って来いでもしたら、かえって手間が増えますからなぁ」
「学校？ああ、おまえたちが前の審神者に勉強を教えていたとかいう話か」
「お、話したとは聞いてましたけど、覚えとるなんて偉いやん。ほんなら、長谷部さんが実は＊C＊合＊＊やったっ

てオチもすとんと腹に落ちましたんか」
「――俺が？なんて？で、明石は何を教えてたんだ？」
「……あちゃあ、見事な全自動話逸らし。消されとるやん。大倶利伽羅はんの話は直接的すぎたんかな、それとも工夫の問題やろか」
「なんだよ。おまえらの話は、いつも途中で難しくなる。俺は留守番だから知らないことが多いんだと思うが、もう少し俺にも分かるように話してくれ」
「仰るとおり。えろうすんまへん。そんなら今日は、自分が分かりやすう教えたります。難しいことは言わしまへん。覚えていられたら、かき氷をもう一杯プレゼントや」
　おまえのかき氷は甘くないから嫌だ、と断ったら、これはこれで味わいがあるんですけどな、と言って食い残しの皿を差し出してきたので、おまえそれはもうただの水じゃないかと、長ったらしい前髪をはたいてやった。
「おまえらが、俺に何かを伝えたがっているのは分かる。薬研はそうでもないが…歌仙や青江、普段無口な大倶利伽羅まで俺に試すような、探るようなことを言う。たぶん、それは俺が忘れている俺の記憶に関係があるんだよな」
「忘れさせられてるっちゅうかな…そうや、フィールドワークで学ぶというのはどないですか？いつまでもアルジはん縛ってもおかれへんし、隊長はんのご機嫌が直ったら自分らに同伴しはったら」
　ちょいと美術館まで、と明石が口にした瞬間、すぐ傍で沈黙していたアルジがぱぱっと点灯した。彼の言葉を借りればとうに諦めていたはずであったのが、がちゃがちゃと躍起にレバーを動かそうとし始める。
「おーおー、歌仙はんの言うた通りか。アルジはんも自分らとギロッポンに繰り出しとうてたまらんのやて」
「俺はザギンでデルモとシースーの方がいい」
「あんさん、どこでそないな知識つけてきてん！？大事なことはちぃとも覚えとらんくせに」
「おまえたちが六本木探索が好きなのは知ってる。だが、俺なんか連れて行ったら即死だぞ」
「なんでそう思いますの？」
「歌仙が前にそんなようなことを言っていたし、実際に俺は弱い。おまえたちだって無敵ってわけじゃないだろう？俺を連れていったら足手まといになって全滅するかも」
「はぁなるほど、なるほど」
　ほなひとつ、数学のお勉強しましょかぁ。
　明石はそう言いながら足のつま先で桶を傾け、中の水を庭にこぼして捨てた。首に掛けていた手拭いを取り、空になった桶の中で濡れた足の指を拭き始める。
　拭いてあげましょか？という親切はお断りした。思った以上に足を冷やしているのが気持ち良くて、しばらくこのまま座っていたかったのだ。はまっとるやんか、と得意げに笑われる。
「『ｐならばｑ』って命題があります。ｐでありかつｑではないものが存在しとったらそれは偽、ｐでありかつｑではないものが存在しとらんかったらそれは真です」

「もう分からない」
「早いわ。やばいな、ほんまのおバカさんちゃうか？」
「難しいことは言わないと言ったそばから数学問題はないだろう。もうちょっと身近にしてくれ」
「しゃあないな。ほんなら『へし切と長谷部ならば弱い』、これでいこか」
「すごく不愉快だがぐっと分かりやすくなった」
「ある刀ＡＢＣＤを調べたときに、その刀がへし切長谷部であれば弱いっちゅう命題があります。刀Ａがへし切長谷部であり、かつ弱い場合、命題は成り立ちます」
「俺のことだな」
「刀Ｂがへし切長谷部であり、でも弱くない場合、命題は成り立ちません」
「弱くないへし切長谷部もいるんじゃないか？」
「刀Ｃがへし切長谷部ではなく、かつ弱い場合、命題『へし切長谷部なら弱い』は成り立ちます」
「俺以外にも弱い刀はいるだろ…たぶん」
「刀Ｄはへし切長谷部ではなく、かつ強い場合、やっぱりさっきの命題『へし切長谷部なら弱い』は成り立ちます」
「ん、んんんん？？」
　頭がこんがらがってきた。明石は地面に落ちていた木の枝を拾い、土の上にＡＢＣＤの４パターンを書き出した。
「刀Ｃ明石国行は弱かった、だからへし切長谷部は弱い。刀Ｄ薬研藤四郎は強かった。だからへし切長谷部は弱い。長谷部さんの『自分は弱いから戦えない』っちゅう説は、このｐならばｑの命題の真偽みたいなもんで、そもそもの仮定が間違っとるから、ゴリ押しで貫けているわけです。仮定が間違っていれば、どないなことやて証明できてしまうんやからね」
「それは流石に言い過ぎじゃないか」
「いーや、これはほんまです」
「じゃあ、例えば俺が明石国行であると証明できるか？」
　そんなもん余裕ですわ、と言って明石は地面に『２＝１』と書いた。
「もし２＝１ならば、異なる２本の刀、へし切長谷部と明石国行は同一の刀に等しい。よってへし切長谷部は明石国行であることになる。ほい、証明終了」
「んんんんん？？」
　何だ今のは。へし切長谷部と、明石国行で、２で、２本は同じだから１で、俺が…俺が明石国行だ！？
「分かりましたやろ、どない考えてもおかしいことでも、最初にこれが正しいと仮定したもん勝ちですねん。長谷部さんみたいな御人は簡単に騙されやすそで、なんや心配になりますなぁ」
「いや…、俺はどちらかというと騙されないタイプだぞ。警戒心が強いし、壺も羽毛布団も二つは買わなかった」
「一つは買わされてますやん」
「還付金が入ると言われたときも、相手が次郎太刀であることを確認してから手数料を渡しに行ったしな！」
「あかんあかん！たいがい、何の還付金やねん！」

レターパックで現金送れはすべて詐欺やで！と明石に肩を掴まれ、なんかよく分からない説教を受ける。
「やめろ掴むな、折れる」
「これっぽっちで折れへんやろ」
「折れるから言ってるんだ。薬研が言うには、最近の俺の耐久性はシャーペンの芯以上プッチンプリンのアレ以下だ」
「後者は折るためにあるもんやないか。そないにポキポキ折れとったら、なんぼなんでも不便でっしゃろ。お薬が足りてへんのと違いますか？」
明石はジャージの袖をまくり、「ん」と俺に右腕を突き出してきた。何を意図してのことか分からず、思わずぽかんと見つめてしまったら、相手も困惑顔を返した。
「もしかして、今日ん分はもうお済みやった？」
「は？いや…薬って、ひょっとして、薬研がくれるあれのことを言ってるのか？」
「そうですけど。なんや、薬研はんの血でないと飲めんとでも言う気かいな？最近は出陣なしで体力満タンやから、自分の血いでもそこそこいけると思うで」
「いや、薬研の血でないと駄目なんだ」
「ひえっ…本気で操立てとは…まずいこと聞いてもうた」
くわばらくわばら、と出した腕を引っ込めて、明石はわざとらしく鳥肌を擦る素振りをしてみせた。
「おまえな、さっきから何を言っているんだ？俺が薬研の血液を飲む必要があるのは、俺が薬研の血液を飲む必要があるからで……。で……」
「……ご自分で言うてておかしいて分かってます？」
「……いや、おかしくない。そんなはずない。だって、俺がここに来たとき最初にあいつが」
「それが正しいと教えた。――そういうことやね」
お勉強がさっそく役に立って良かったですなぁ。と、明石の声がだんだん遠くかすかになっていく。ああそろそろ目覚めのときが近いようだ。おまえらはまた俺にややこしいことを教えて、肝心なことは何も教えてくれずに去ってゆくのか。
「長谷部さん、約束したやろ。覚えていられたらかき氷を作ったるて。覚えといてください。仮定は常に正しい姿をしとるわけやないて。――なぁ、まだこれが自分の見とる夢やと思うてはりますか？」

……
……
……

「長谷部君、おはよう。そろそろお腹すかないかい？」
「……俺は、寝ていたか？」
「さっきまでの君の状態を起きてるというなら、ちゃんと寝かせてあげる必要はないってことかな。それとも、まだ全然寝足りない？」
「……どちらか選べと言うなら、後者」
「意外と寝汚いんだなぁ」

「あのなぁ、おまえが――」
おまえが悪いんだろうが、と反論した声の尻尾は昨晩の情事に灼かれ掠れてしまっていた。喉を押さえて唸る俺を燭台切が意地悪くにやにや見つめている。
「いっぱい声出したもんねぇ」
「うるさい、スケベ。朝も夜もお構いなしに盛りやがって、ここ二か月ですっかり怠慢な体にされた。責任とれ」
「いくらでも、喜んで」
一つのベッドで頬杖をついて寝そべっていた彼が、顔をかがめて俺のおでこや瞼や頬骨、唇に点々とキスを落とす。
七夕の夜に抱かれたときのことは、正直あんまり覚えていない。やたらめったら緊張したが、あの日以前にも俺は燭台切に抱かれていたはずなので、まあいつも通りの営みであったのだろう。
随分辛抱強く待ったと言っていたが、それは本当にそうだったようで、怪我をした俺の看病をしていた間は母親のように献身的に尽くしていたのが、久しぶりに閨を共にしてからの燭台切はまるで廃人のようになって、昼夜問わず俺の体を開いた。朝の太陽も、夜の月も、この男の部屋の窓から見る暮らしだった。
日中は妙に気が焦り、こんなことしてる場合じゃない、出陣しようと燭台切にせがむのだが、行けるものなら行っておいでよとつれなく突き放され、その態度に腹を立てて部屋を飛び出すも、どういうわけだか次の瞬間にはまた燭台切の腕の中にいるのだ。
そのとき俺と燭台切はベッドの上にいたり、くっついて畳に転がっていたり、縁側で膝枕をされていたり、風呂場で髪を洗われていたりする。いずれもべたべたと密着しているので、俺は一人で出陣しようと啖呵を切っては、あの手この手で宥めすかされて記憶が飛ぶほどぐずぐずに溶かされて結局また戻ってきてしまっているのだろうと思った。なんて情けない。自分は恋をするとこんなに意思の弱くなる刀だったのか、それとも快楽に弱いのか。どちらにせよ、俺はこの男のそばを片時も離れられずにいた。
「……空腹かと聞いたな、食事を作りに行くのか？」
「うん。何か食べたいものがあるなら善処するよ」
「いや、たまには俺にも手伝わせてくれないか？」
そういえば、いつの間にか風呂が沸いていたり、部屋に食事が運び込まれたりしているのは、自分がだらしなくも微睡んでいる間に燭台切が全てやってくれていたのかと、唐突に申し訳なくなった。
「……長谷部君、料理なんてできるの？」
「たぶん？？？？」
「ハテナがいっぱい付いてるじゃないか。いいよいいよ、僕も好きでやっていることだし、それに台所は奥様のテリトリーってね。男士厨房に入るべからずだよ」
指を立てて可愛くウインクしてそう言う。おまえだって男士だろうと反論したら、食器洗いとか他人がやったやつ気になって駄目なんだ、と家事ハラ発言が飛び出してきたので、厨には行かないでおこうと思った。

「だがどちらかというと、奥様は俺の方じゃないのか？」
「それは夜の話だろ？長谷部君は食事を出すより出される方が好きだと思うんだけど」
「まぁ、そうだ。……あ、それなら夜の方も俺が旦那役をやった方が自然じゃないのか？」
「君が僕を？うーん…それはちょっと遠慮したいかな」
　僕はどっちも出されるより出したい派だからと、ひどく低能なコメントが帰ってきたので、つま先でそいつの脛を蹴って、シーツの国から追い出した。
「何を作ろうか。今日は特に暑いし、茗荷を収穫したから冷たい素麺なんてどう？」
「任せるよ…俺は大人しくここで餌を待ってる」
「ふふふ、うちの猫ちゃんはいい子だね」
「誰が猫ちゃんだ、ひっかいてやる」
　雑に羽織っていたワイシャツのボタンを留めようと背を向けた男に襲いかかり、そのシャツを首元から下へ剥いでやったら、そこは既に引っ掻き傷だらけだった。
「これ……俺が？」
「やっぱり覚えてないのかぁ。そんなに夢中になってくれて嬉しいよ」
「いや、痛そうだな…なんか、すまん…」
　小刀で彫った版画のように、細長い斜線がいくつも走っている。傷の深さの違いでそれぞれが濃淡の異なる赤色を滲ませていて、その奥に流れているものを連想させた。
「――っ、ちょ、ちょっと痛いよ長谷部君」
「うん……すまん。でも我慢してくれ」
　腹が減ってるんだ、と言ってその傷を舌の先でほじくり返し、ぷくりと滲んできたものを舐めとる。えー、と不満そうな声を無視してちゅうちゅうと吸い付いていると、傷口はますます広がる。
「いたた…痛いだろって聞いといて痛いことするって」
「ほんとだな。自覚ないがサディストなのかも」
「君はマゾだと思ってたけど？」
「俺は自分が痛いのは嫌だ。だからそれはない」
「ひどい話だ」
　前に燭台切が鉄欠乏症かと俺に聞いたことがあったが、そうなのかもしれない。ぼんやりしていた頭が急に冴え冴えとして、眼球は水で潤ったようになり、視界がはっきりとクリアになっていく。
「ちょっと…そろそろ、変な気分になっちゃうから」
「なればいいさ」
　もう！と女子みたいな拗ね方しといて強い腕っぷしでひっくり返され、両手を羽根枕の上で結わえられてしまった。まだ食べてる、とぶうたれたら「太るよ」と却下され、どうやらもう貰えないようだ。ここから先は、別の体液を食わされるんだろうなと、大概自分も低能な思考になる。
「まぁ…それはそれで、いいか」
「何が？長谷部君、集中しないと怪我させちゃうよ」
　せっかく履きかけたのにベルトも締めないままでまた俺の上に跨って、きらりと不穏に光る眼で俺を見下ろした。

こいつはなんで俺が考え事してると怖い顔するんだろうな、と考え事してたら、がぶりと首筋を噛まれた。
「んっ…痛いのはやだっていったろ…」
　びりびりと感覚が伝染した先が鎖骨であったのを的確に見抜かれてねっとり舐め上げられたら、プログラムされたように喉から幸せそうな声が出てしまう。
「嘘つくなよ。長谷部君はここを噛まれても締められても気持ちいいんだ。…ねぇ、そうだったろう？」
「そう……だ、な」
　そうだ。首が弱いと初めてしたときに教えられたっけ。あれは初めてのときじゃなかったっけ？どっちでもいいか。そこを触られるとまるで何か別のものに支配されるような心地がして、だから俺は露骨に反応してしまう、だから、だから、……？　気持ちいいと、いうより、
「いや……違う、きもちよくない……こわい」
「長谷部君」
「あれ？なぁ、俺たちは一日非番なのか？すまないが、時間の感覚が…いつ起きた？みんなは？薬研はどこだ？主は何をされている？命令はまだか？行かないと、俺は燭台切を、あれ？燭台切はここにいる、俺はどうして」
　ちっ、と破裂音がした。外でアルジが作動したのかと思ったら、俺を見下ろす男の表情が暗い湖の底のように青ざめていて、次いでその湖から聞こえてくる不機嫌な溜息に、ああこいつが舌打ちしたのか、舌打ちなんてするんだなあと意外に思った。
「節約したけど、やっぱり半年もたなかったな」
　審神者が大男だったらもっと作れたのに、と俺には意味の分からないことを言いながら、グラスを蓋代わりにして置いてあった水差しをベッドサイドから持ち上げて、豪快にもその注ぎ口から直接水を口に含んだ。俺にもくれ、と言う間もなく唇を合わせられ、冷たくも熱くもない液体がとろりと喉に流し込まれる。
「んっ、んん……やめろ、自分で飲――」
「あのね、たぶん今の僕は、僕の思い通りに動いてくれる君のことを妄想してしまう気がするんだ」
「は――」
「だから君が全部飲んで」
　唇が離れたと思ったら、大きな手で口を押さえられた。ごく、と喉が動いたのを見てようやく彼の表情は柔らかくなり、昨夜着せてくれたばかりの着流しの帯をいそいそと脱がし始める。
「さすがに、ちょっと元気がなくなってきたね」
　長谷部君のココ、と娼婦のような手つきでぐにゅぐにゅと揉んでくる。さんざん舐められたり扱かれたりしたそこは、燭台切の手の中で小さくなって降参していた。
「当たり前だ、俺はもう何にも出ないぞ」
「僕はまだ出してあげられそうだよ？」
　ほら、と手を掴まれて触らせられた男のそれは、夜通し吐き出していたというのにまた膨らんでいて、玉袋を撫でてやっただけで硬さを取り戻した竿を、こっちも触って欲

しいと言うように俺の手に擦り付けてきた。
「中にはもう駄目だぞ。腹が一杯なんだ」
「えー、じゃあ、ン、どこに出させて、もらおうかな」
俺の手に性器を擦り付けて腰を揺らす燭台切の息遣いが、息を吹き込まれるほどの距離で聞こえて、次第に自分の萎えた性器も硬くなってくる。呼吸を荒げながらも俺への愛撫を止めない彼の指と指の間から、にちゃにちゃと粘ついた音が聞こえ始めた。
もう少しこのまま触ってくれてれば、というところで意地悪にも手淫を中断されて、後ろの穴に指先が入り込んできた。
「あっ……ん」
「はは…本当だ、僕の出したものでトロトロだね…」
そう言いながらもひと思いに押し入れてはくれず、入口の窄まりでちゅぷちゅぷと指先を遊ばせて、たまらずに腰が揺れる。意識が全部そこに持っていかれて、燭台切の指の関節の小さな段差、切り揃えられた爪の僅かなとげまで分かってしまう。不意に中で指をぐりんと回されて、ひゃあん！と馬鹿みたいに高い声が出てしまった。
「くっ…こら、そんなに強く握ったらだめだよ」
「し…かたないだろ、文句があるならさっさと挿れろ」
「もうちょっと可愛くおねだりできないかなぁー」
早くイカせてほしいのに、じわじわと燃える香木のようにゆっくりと赤く熱くされる。ぽつ、ぽつ、と汗の玉が出てきて、なあ、もう、と彼のシャツの袖を引っ張って抗議したのに、口角を上げて俺を見下ろしただけで、指の腹でねちねちと腸壁を押され続ける。なんだもう、爽やかイケメンぶってとんだエロオヤジじゃないか、ちゃんとおねだりしただろと男の脈打つ性器に奉仕を続けながら言ったら、あれで？と一笑に伏された。
「袖掴んだだけでおねだりなんて言わないよ。長谷部君はもっといやらしく、露骨に僕を誘えるだろう？ほら、君がいつもしてくれるみたいに懇願してくれ」
教えただろ、と頬にキスして見つめる瞳が真剣でどこか、必死に見えた。そんなに言わせたいのか、こいつは本当に馬鹿だ、俺に関して。
わかったよ、と少しだけ腰を浮かせて、燭台切のでヌルヌルに濡れた自分の指を、いじられてぐずぐずにほどけている後孔に侵入させた。アナルの中で俺の指と燭台切の指が絡まり、俺は動きを止めたその指に自分の指をしきりに擦り付けながら、すぐにでも大きいのが入れちゃうくらいに穴を広げてみせた。
「はやく…ここ、痒いから、もう我慢できない、燭台切の太くてかたいチンポ欲しい、奥まで埋めてずこずこ突いて、前立腺もいっぱい擦って？」
ね？と空いている方の手のひらで彼の頬を撫で、油断していた唇をぺろりと舐めてやったら、ずるんと燭台切の指だけが俺の中から抜けていった。
「はぁぁぁ～～、いったいどこでそんなこと覚えてきたの長谷部君は…最高なんだけど…」

「おまえだろ教えたのは。デフォで淫乱みたいに言うな」
いいから早く、と痺れを切らしたら、足を開くよう命じられ、俺が自分で後ろの穴を広げて男を待ち構えている姿を、燭台切は膝立ちになって性器を扱きながら満足そうに見下ろした。
「それ以上バキバキにして、入らなくなったらどうする」
「えー？やだな、入らなくっても挿れるよ」
もういいよ、とようやくお許しが出て指を抜いたら、つるんとした亀頭がずぷ、ずぷ、と少しずつ埋まって、そのあとは一息に根元まで埋め込まれた。
「あああッ！あー！あ、あ、あうう！」
突然息が止まって、吸ってるそばから嬌声になって出ていって、切迫して取り込んだ酸素が悲鳴になって出ていく。容赦なく中をえぐる燭台切の肉棒は、俺の好きなところをごりごり擦りながら、腰の骨が砕けるくらいに容赦なく奥を突き上げる。
「抑揚…っとか！ぶっ壊れてんのかこの野郎…！いきなりそんな、されたら、あ、んーーっ！」
手と足の指でシーツを掴んで、強すぎる刺激をやり過ごそうとしたのもむなしく見抜かれて、腰を高く持ち上げられて突き刺すようにもっと深く挿入されたら、わなわなと震えて緩んだ口元から唾液がつうと流れ落ちた。
はっ、はっ、と犬の呼吸になって、燭台切が欲望のままに腰を振る。揺らされながら時折視界に入る奴の顔は、やっぱりどこまでも美しいな、と思った。理性の及ばない金色の瞳、黒い髪、――好きだ。この男が。
いつからだったろう？きっとこの瞳に見つめられたときから奪われてた。（あのとき殺してくれたらよかったのに）あのとき？？わからない、思い出せないけれど、燭台切になら俺を全部くれてやってもよかったんだ。
「……長谷部君、水をあげたろう？考え事はよしてくれ」
燭台切は俺が集中していないと見るややっぱり怒って、俺の溢れそうな鈴口をぐりぐりと虐めながら、わざと卑猥な水音が出るように腰を打ち付けてきた。水一杯で恩着せか貴様どこの悪徳店だ――とか悪態をついてやりたかったのだが、もう全然そんな余裕ない。ああ、射精する元気もない俺のペニスからだらだらカウパー垂れ流されてるのが見える。それなのに腹がじんじん熱い。イッちゃう、と、たぶん声に出ていた。
「いいよ、僕も、出ちゃいそう……」
「あ、あ、まっ、て、」
「無理だよ、腰、とまんない。すっごい締まる…いちばん奥まで誘い込んでるよ、わかる…？」
「ちがう、なか、中はむり、やだって！や……ぁっ」
燭台切が低く唸り、それから腹の中がじわあと熱く湿っていくのがわかった。生々しく脈打つのが、燭台切の性器からなのか自分の鼓動なのか区別できない。精液は生きているというから、ひょっとしたらこの男の精液の一滴一滴が、俺の中で生命を持っているのかもしれない。そう思うと、なんだかぞくぞくした。

「……なに泣いてるの」
「ちがう。笑ってるんだよ」
　こんな馬鹿みたいに毎日毎日セックスばかりして、そのたび燭台切のを注ぎ込まれていたら、俺の体の中で燭台切が成長してしまうかもしれない。現に数か月前までは、恋仲と言われながらもこんなに心臓は早く打たなかったし、気障な台詞を吐かれても、どう返していいのか分からなくて慌てるくらいだった。
「たぶん……」
「ん？」
「たぶん、俺のなかで、おまえが育ってるんだ」
　だからどんどん好きになる。どうしようかとお手上げで、笑っていたのさ。気持ちのままにそう言って、言った後で我ながらあざとい台詞だったかと恥ずかしくなった。しかし燭台切はからかってくる素振りも見せず、ぐっと何かを耐えるような変な顔をして、俺を掛布でぐるぐる巻きにし、それごとまとめて抱き締めてきた。
「……おい、何とか言ったらどうなんだ」
　恥ずかしいだろうが、と正面から抱き締められて顔も見えない恋人に文句を言うと、うん、と返事だけを先に返し、それから、ありがとう、と内緒話のようなか細い声で俺に言った。
「でも…君の中で育ててくれた僕が、ある日突然、みんないなくなっちゃったらって、そう考えたら怖いんだ」
「なんだそれ…ただの例え話だったんだぞ。おまえも案外根暗なところがあるんだな」
　人のこと言えないじゃないか、と俺が言ったのがいつのことを指しているのかすぐに気づいたようで、燭台切はようやく俺を掛布の檻から解放して目を合わせた。
「そうだね。でも君の言ったことはやっぱりよく分からないな。これほど華やかな景色の中で、自分はひとりぼっちで、ゆっくり衰えていく、静かな時間――だっけ？僕はね長谷部君、そんな現実を想像すると、気が狂いそうだ」
「おまえがそんなタマかよ」
　こいつはみっともなくトチ狂って騒ぎ立てるタイプには見えないけどな、というのは、惚れた者の贔屓目だろうか。けれどそう思うのは、俺を抱いているときの燭台切の目が、すでによっぽど狂っているように見えるからだ。
　おい、喉がかわいた、水、と燭台切に頼んだら、「後で」となぜかオーダーを却下された。
「ひどい、喉かわいた、水も出さないサービスの悪さ」
「長谷部君」
「このお店セックスはよかったんだけど店員さんの態度が冷たいから星ひとつ下げておきますね」
「分かった、分かったよもう！」
　堪えきれないという風に口を手で押さえて、水を取るために立ち上がった燭台切から、ぽたっと水滴が落ちた。
　ああこいつ、俺の癖が移ってしまったんだな。

8　長月は焔のなか

「長谷部、大変！大変だよ！」
　次郎太刀が血相変えて俺の部屋に飛び込んできたとき、俺は小さな座椅子に背中を預けて、歌仙から借りた、今では形見となってしまった本を開いていた。
「なんだ次郎太刀、還付金の件ならもう騙されんぞ」
「え、ばれたの？アワワじゃなくて、バカ！違うよ！兄貴が…アタシの兄貴が、デキちまったんだよぉ！」
「な…デキちまった……ってまさか……」
「そのまさかなんだよ！なんかーいつも兄貴はデカいけど、最近はますますデカくなったなー、なーんて思ってたら、腹ん中に、ややこが…！」
「おい嘘だろ御神刀に何してくれてんだ。俺は許さんぞ！今すぐ相手の刀をここに連れて来い！」
「あっはっはっはっは！アタシ、長谷部ちゃんのそのノリのいいトコ大好きよ～！でもね、兄貴も誰が父親なのか分からないって言うわけさ…なにせ人数が多すぎてね…」
　あまりのことに、ばさっ、と手に持っていた本がすべり落ちる。畳の上に落ちたささいな音が、いやに大きく響いた気がした。次郎太刀の声のトーンも落ちる。
「こないだの出陣でね、アタシは行くなって言ったんだ。なのに兄貴のやつ、これより先は不浄の領域だとか言って、一人でどんどん暗い路地に入って行っちゃってさ…見失った数分の間に、黒人のボディビルダーたちに囲まれて…」
「いきなりハードだな！？」
「可哀想だろ！？やっとこさ助けて連れて帰って来たけど、もう見てられないんだよぉ！あのお腹の子をどうするかは兄貴にしか決める権利はないけれど、せめて、お金のことくらいは心配させないでやりたくてさ…だから…」
「……ああ、分かってる。みなまで言うな」
　俺は衣装箪笥の一番下の段の抽斗を外し、仕切りを装った板を取り除いて、奥に隠してあった小判箱（大）を引っ張り出した。そんな所にあったのかい、と次郎太刀が感心した声を上げる。これは、俺が薬研から管理を任された、現世でも使える金だった。彼らがまだ人型の審神者の元で働いていた時代に稼いだらしい。最近は鳴りを潜めたが、一時期は万屋を経由しての本丸間での略奪行為やそれに近いトラブルが相次いだらしく、それを心配して財産に当たるものを簡単に見付けられないように隠したと薬研は話していた。今は俺が、そのときの遺産をそのままの状態で引き継いでいる格好だ。
「ここに七百両ある。もっと必要なら厨の冷凍庫の中にもビニルで覆って隠してあるから、早く持っていってやれ」
「恩にきるよ……長谷部！」
　薬研はまだ寝てる時間なので確認せずに渡してしまうことになるが、あいつも近侍なんだ、「仲間のピンチに出し惜しむ金なんざねえよ（※イメージ）」とか言って、分かって

くれるに違いない。薬研は俺の知る限り、常にこの本丸の仲間たちのことを第一に考える男なのだ。
　ようし、それじゃあ早速兄貴の所に――と次郎太刀が小判箱を軽々持ち上げて俺の部屋を出て行こうとしたところに、タイミング良く太郎太刀が通りかかった。
「おや、千代鶴。ここにいましたか」
「げっ……」
「太郎太刀！おまえ、体は大丈夫なのか！？」
「ちょちょちょ、長谷部ちゃん黙ってて」
「体…？次郎ではなく私ですか？それにその小判…ふーむ、とりあえず状況を教えてください。それから対処を考えましょうか」
「いや、すまん…俺が聞いていい話ではなかったと思う。だが次郎太刀を責めないでやってくれ！こいつはただ一心におまえのことを思って！迷い込んだ先は黒人しかいないブラック本丸でした～2時間半で何本咥えられるかな？馬並みディックと連続ドチャックス！～…な目に遭った不幸な兄のために恥を忍んで頭を下げに来たんだ！この小判箱の金は綺麗な金だ！！」
「いやいやいや長谷部ちゃんが恥を忍んで！？何だいそのAVタイトルどっから持ってきた！？」
「……私に豊穣の力はないのですけれど（爆）」
「兄貴ーーー！！？兄貴が（爆）とか言っちゃったよ！ちょいと長谷部アンタ！兄貴の神威がダダ下がりでもしたら、どう責任とってくれるんだい！？」
「ああ？俺は悪くないだろ！」
「その通りです、千代鶴。大体の事情は察しました。長谷部殿から金品を騙し取るのはやめるのです」
「うっ……ば、ばれちゃった……？」
　なんてことだ。俺はまたしても詐欺のカモにされかかっていたのか。俺はどちらかというと騙されないタイプだし、警戒心も強いのに、昨今の犯罪はどんどん手口が巧妙化している。いつか天国で明石に会ったら怒られてしまう。
　長谷部殿には世話をかけましたね、と言って、太郎太刀は次郎太刀の手からひょいと小判箱を取り、俺の前に静かに置いた。
「弟の嘘がばれた後では申し難いことですが、この財は、やはり私と弟に使わせていただきたい。近侍の許しは先程得ています。私はそのことを伝えにこちらへ来たのです」
　次郎太刀が驚きに目を見開き、兄の横顔を見つめる。俺は俺で別の意味で驚いた。
「先程？こんな朝方にあいつの部屋に頼み事をしに行ったのか？子持ちのイノシシの巣穴に飛び込むようなものだぞ。めちゃくちゃ機嫌悪かっただろ」
「いえ、元気はありませんでしたが、あっさりと承諾してくれましたよ。薬研殿はもともと寝つきが遅いので、それだけ朝に起きてくる時刻も遅かったですが、最近は一睡もできない日もあるようで…私が伺ったときも、一晩中何か考えを巡らせて眠れていない様子でした」
「……そうか」

「アタシらも随分減っちゃったからね。出陣禁止とか言い出したこともあったけどさ、基本的にみんながやりたいことをやりたいようにやらせてきたこと、今頃になって後悔なんてらしくないことしてんのかもよ」
「私たちは、文句の付けどころのない隊長であったと思っていますけどね。本人がどう考えるかは自由でしょう」
「……ああ」
適当にお茶を濁すような返事しかできなかった。薬研は本当に良い男だと思うが、共に出陣し、隊員の一人として率いてもらった経験がない俺には、隊長としてのあいつを評することができなかったのだ。
「何に使うのか知らんが、あいつの許可を貰っているなら、俺がつべこべ言える道理はない。持っていくといい」
「ありがとうございます。使い道は別に隠すようなことではなくて、本当に俗っぽいことですよ。最後くらい、弟には好物の酒を好きなだけ飲ませてやりたい。私たち兄弟以外誰も来ないような場所で、静かに。これは、そのための軍資金です」
「兄貴、アタシは一人で」
「一人で七百両もはたいた酒を飲み干せますか」
「……馬鹿いうんじゃないよ」
アタシが本気出しゃ七百両なんて紙みたいなもんさ、と次郎太刀が剥き出しの肩を震わせながら笑った。
ああ、そうなのか。俺はそれを見てやっと、『大変』な状況に陥ったのが次郎太刀の方であったのだと理解した。
「おまえ……あれに感染したのか」
次郎太刀はいつもみたいな馬鹿でかい笑い声は上げず、まるでこっちを憐れむみたいな顔で苦笑いをした。
「先の出陣で、これ以上は深追いだと言ったのですが、強力な呪力を察知して更に地下へと潜ってしまったのです。その途中で一瞬はぐれた間の出来事でした」
「だって、みんなでずっと探してきたトドメちゃんがついに見つかるかと思ったんだ。後悔なんてしてやしないけど、みんなの調べてきたことが報われたら嬉しいじゃないさ。最強の審神者を見つけたら、アタシら刀剣男士を、楽にしてくれるかもしれない。そう思ったら――」
興奮して話し出した次郎太刀の頭にぽんと手を置いて、太郎太刀が優しく髪を撫でてやった。次郎太刀は大人しくなり、気を取り直すように浅く深呼吸を繰り返した。
「トドメ……大倶利伽羅が、化け物だと言っていた」
「……そんな酷いことを言うもんじゃないよ。長谷部、もうそろそろ話してもいいかもしれない。アンタが本気で暴れ出したらいけないからって長いこと薬研に口止めされてきたけれど」
「千代鶴」
「大丈夫だよ、兄貴。いま暴れ出したら恐いのはお互い様さ。それに、しばらく一緒にここで暮らして、アンタはそんなことしないってみんな思い始めたんだ」
だからみんな、アンタに何とかして伝えようとしてきただろう？たとえそのロザリオで忘れさせられるとしても。

次郎太刀は帯の結び目に挿していた扇を引き抜いてぱちんと閉じ、俺のシャツで隠れた首元を指し示した。
「今まで、可哀想なことしちゃったね。お姫様と引き離された刀の気持ちは、よく分かってたはずなのに」
声が遠のいていく。よく聞こえない。
「トドメちゃんは、アンタの大事な主人さ。今も六本木の地下にいて、全てのアルジを動かしてる。アンタが迎えに行ってやんな」
まただ。何かを知ろうとすると、何かに邪魔をされる。このロザリオ？これがそうしているのか？シャツの隙間からそれを掴み取って引きちぎろうとした。すると、その行動を阻むように猛烈な不安感情が脳内を埋め尽くし、俺は胸の十字架を掴んだまま、畳の上に倒れて這いつくばる。
なんだこれは。思い出しては駄目だ。こわい。
「……その装置は、アンタを身請けするときに政府の役人が装着したものだよ。自分のことも、審神者のことも思い出さずに、ここでアタシたちの『手入部屋』として生きてもらうための」
「できることなら、薬研殿を恨まないでください。私たちの本丸にこの話が舞い込んできたとき、一番悩んでいたのは彼でした。けれど私たちを長く生きながらえさせるために、あなたを管理することを決めたのです」
もしあなたが全てを思い出したら、私たちは一瞬にして喰い殺されてしまうでしょう。それを恐れて、ほどほどに餌を与え、その鎖でこの屋敷に繋いでいました。

太郎太刀の穏やかな声が心のなかに降ってくる。
ああ、おまえたちの気配を、いつもこうやって感じていたよ。いつだったか明石が腕を差し出したのに俺に拒まれ意外そうな顔をした、あの理由が今なら分かる。
おまえたちは、少しずつ、俺の食事の中にいただろう。
「長谷部、こんなこと頼める筋合いじゃないのは分かってるけど、薬研藤四郎のこと、もう楽にしてやってほしい。たぶんあいつはアタシたちが去った後、たった一人であの焔の中に還るつもりなんだ。でも、きっと最後まで行けずに途中で噛まれちまう。アンタなら行ってやれるだろ」
「……俺が、どこに行くって？俺には出陣は無理だぞ、こんな弱い体じゃどこにも……」
「やーだなぁ！力を分け与える対象がいなくなっちゃえば、長谷部ちゃんは無敵だよ？だって長谷部ちゃんは、最後の人造審神者９９９、通称『止女』の能力を移植された、最強にして最悪の刀……他の刀の呪力を喰う『ＲＣＳ合成体』なんだから、さ」

……
……
……

「燭台切、燭台切、起きてくれ」
「……んん、どうしたの、君の方が早起きなんて珍しいね」
「小説を知らないか？」

「小説？何の話……もうちょっと寝ない？僕まだ眠い…」
「仲間の形見なんだ。さっきまで読んでた。だが内容を思い出せないんだ。大切なことが書いてあったはずなのに」
「……形見なんて。縁起でもないな。いったい誰が死んだっていうんだい」
怖い夢でも見たんだね、と言って燭台切は俺を抱きしめ、布団の中に引きずり込んだ。おい聞け、と声を荒げる俺の背中を数回そっと叩き、それから赤子をあやすようにして撫でてくる。
「小説が読みたいなら、僕が一番好きなお話を聞かせてあげる。それを寝物語にして、君はもう少し休むといいよ」
実際にいる人物が出てくるから、都合により適当に他の動物に置き換えて話すね。そう前置きして、燭台切は俺の背中を撫でながら、朗読を始めた。

どこにでもいる、ありふれたぼくら

むかしむかし、あるところに、天然のウナギと養殖のウナギがいました。
「おまえ、お腹すいてるのか？」
天然のウナギは天然ですから、何もしなくても脂が乗り、市場価値が上がっていきます。それを妬んだ養殖のウナギはある夜、天然のウナギの餌に毒を盛り、体が痺れて動けなくなった天然のウナギをアナルファックしました。
「ちょ、ちょま」
「もー、話の途中だよ長谷部君。大人しく聞いてね」
憎しみは新たな憎しみしか生みません。天然のウナギは虎視眈々と復讐の機会をうかがい、養殖のウナギが油断を見せた瞬間を狙って同じことをやり返し、養殖のウナギの骨が全部小骨になるまでボコボコに殴り続けました。
「蒲焼きの下処理…！」
「長谷部君、ツッコミ嬉しいけど寝物語だから」
「これ眠らせる気ないだろ！？」
天然のウナギはその後、自分と同じ天然のウナギだけが集められた天然ウナギの城に移されました。そこには養殖のウナギとそっくり同じ顔をした、けれども中身は天然のウナギがいました。紛らわしいので、二匹の性癖を特徴に分けて最初の養殖ウナギを養殖ドSウナギ、お城で会った養殖ウナギに似ている天然ウナギを天然ドMウナギと呼ぶことにします。
「……あれっ？長谷部君、ツッコミは？」
「もう突っ込む気も起きなくなった」
初めのうちは養殖ドSウナギを思い出して天然ドMウナギに冷たく当たる天然ウナギでしたが、お城で一緒に暮らしているうち次第にほだされ、いつしか天然ウナギと天然ドMウナギは愛し合う関係になりました。
「結局、天然は天然同士というわけか」

「惹かれ合うのには理由があるんだよ！でも割愛するね」
二匹はお城で他の天然ウナギたちと仲良く暮らしていましたが、ある日、人間たちによる天然ウナギの乱獲が始まりました。天然ウナギたちは、始めから人間に利用されるためにお城に集められていたのです！！！
「そりゃそうだろ……天然ものは美味いから……」
天然ウナギたちは力を合わせて戦いました。そしてここではないどこか、誰も知らない世界への扉を開き、全員でそこへ逃げることに成功しました。新しい世界で、二匹はいつまでも仲良くいちゃいちゃして暮らしましたとさ。

おしまい

「どう？眠くなった？」
「頭の中がウナギだらけになった」
「これはね、僕……僕によく似た人が書いたお話なんだ。初めて読んだとき、すごく羨ましくなった。僕もこんな風に恋ができたら、今よりも楽しく暮らせるのかなって」
「どこに憧れるポイントがあったのかさっぱり分からないんだが……というか、養殖ウナギはどうなったんだ？」
「え？養殖ウナギってドＳのウナギ？」
「そうだよ。殴られてそのまま死んじゃったのか？」
「いや、うーん、どうだったかな？確か養殖ウナギも人間たちに回収されたはずだから、死んではなかったと思うよ。養殖ウナギの城で幸せに暮らしたんじゃない？」
「養殖ウナギの城って養殖場だろ…なんか、哀れだな」
「えーっ？長谷部君、まさかウナギに同情してる？」
「ウナギに感情移入してる奴に言われたくない。だって、そんなに執着していた天然ウナギが勝手に知らない世界で幸せになって、自分だけ養殖場で飼われ続けるなんて不公平じゃないか。俺が養殖ウナギだったら、養殖場で剣の腕を磨いて、絶対にもう一度天然モノに復讐を遂げに行く」
ウナギが剣の腕って何、と馬鹿にしたように笑われる。このやろう今さらそんなこと言い出すならウナギがアナルファックって何なんだよいいかげんにしろ。
一向に眠くなる気配のない俺を差し置いて、燭台切は話すだけ話して満足したのか、目をつむり、かすかな寝息を立て始めた。
退屈だ。いいかげん、この馬鹿でかいベッドの上で転がっているのにも飽きた。少し気分転換に歩こうと思い、燭台切を起こさないよう気配を殺してそっとベッドから降りた。
自分の服は、綺麗にアイロンを施された状態でクロゼットの扉に掛けられていた。脱がすときは強引に脱がすくせ、後始末はとことん律儀な男でかえって恥ずかしくなる。そんなに細部まで気を遣っていたらそりゃ眠くもなるだろう。そういえば、俺もここに来たばかりの頃は眠ってばかりいたなあと思い起こし、はて、いつ顕現したのだったかふと分からなくなった。
頭がぼけているようだ。厨に行って冷たい水でも飲もう

と、忍び足でそうっと廊下へと出た。
燭台切の部屋を出て右に曲がりしばらく歩いたら、薬研の部屋に着いてしまった。道を間違えてしまったらしい。いよいよもって寝ぼけているな。それにしても相変わらずいつ見ても前衛的な部屋だ、前に見たときよりもなんだか不気味な印象を受けて、すぐに閉めた。
「あいつ、こんな夜中にどこ行ったんだ……？」
逆方向に歩き出し、燭台切の部屋の前を通り過ぎてさらに進むと、大庭が見えてきた。そうだそうだ、この大庭の前を過ぎた所が厨だったはず。
（昔はアルジは人の姿をしていたんだ）
（信長さんとこでも大概自己中な奴だったが）
「っ……？何だ、頭のなかで、声が…」
（薬研藤四郎のこと、もう楽にしてやってほしい）
（あいつはたった一人であの焔の中に）
「やげん…？う、うう、水…燭台切、水を……」
苦しい。頭の中にいくつもの顔が浮かぶ。知らない刀、知ってる刀、俺もたくさんいる、小さな俺、弱い俺、傷を負っている俺、燭台切に殴られて、あいつを殺すのは俺、俺は――弱い？？そんなはずないだろう。だってこの体は改造されて、ただあいつに復讐するためだけに、
「薬研……薬、どこにいるんだ、薬をくれ…頼む…」
足元の床がぐにゃぐにゃと歪む。とても立っていられず壁にしたたか体を打ち付けてしまった。そのとき、目の前でぱぱっと赤いランプが点灯したのを見た。
「あ……アル、ジ……？」
そういえばここにあったのか。アルジがひとりでに起動していた。音を立ててリールが回る。回転はぎゅんぎゅん速くなっていく。『1』『5』『8』『2』左端から順に一桁の数字を示して止まり、リールの上のスピーカーから、無機質な声が行き先を宣言した。
（ごらん、アルジは僕らの望みをようく理解して――）
「本能寺ノ変。部隊ヲ選択シテ下サイ」

9　神無月でつかまえて

いくつもの襖を開けた。炎をくぐり。
いくつもの肉を裂いた。赤い色をしていた。
その色を目にすればするほどに、俺の視界は鮮やかに、手足は羽のように軽くなる。刃は指先のように、舌先のように滑らかに動いて、一振りするだけで沢山のしかばねが俺の前に道を譲ってくれた。
「ギ…ギチチ…ギチチチ……」
俺たちは、五十年以上の間、時間遡行軍とかいう敵勢力と戦ってきたらしくって、そいつらは魚の食べ残しが服を着たような奇妙な姿をしていて、いつも目玉だけがぎらぎらと光っており、こっちが言葉をかけても、ぎちちち、と羽虫のような声で鳴くのみで、意思の疎通は叶わない。
「――そんな奴らだったが、随分数が減ったようだ。刀剣男士の感染者の方が、よほど多くうろついていた」
「ギチチ、ギチチ！ギチチチチ……」
「だからって、今度は保護動物にでも指定したのか？えぇ？　薬研藤四郎」
「――あぁ、そうだよ。可愛いだろ？」
薬研の小さくて細い首の周りを、襟巻のようにくるくる回るのは、今となっては絶滅危惧種に近い、時間遡行軍の短刀であった。
「俺っち、獰猛な奴を飼い慣らすのは慣れてんだ」
「そうだろうな。俺はいい練習台だったろう」
「冗談じゃねえな。ドーベルマンを飼う練習で人喰い虎を飼う酔狂がどこにいんだ。アンタを本丸に置いている間、俺は気の休まる日がなかった」
本能寺は寺院であったが武家の宿所としても充分な構えであり、殿舎まで建てられていた。しかしこの時代のこの日には、周囲の堀は燃える火の川となり、庭園には油が撒かれ、背や腹から矢羽を生やした人間の肉の焼ける臭いが立ち込める、地獄絵の屋敷と成り果てていた。
「よく一人でこの部屋まで来られたな。おまえの最期にはここをおいて相応しい場所もないだろうが。俺でも、奴らに二、三度は噛まれたぞ」
「こっちは二、三度なんてもんじゃねえよ。よく見たら穴だらけ、虫食いの林檎さ。こうして柄巻きもおつむも回ったまま旦那に再会できたのは、まあ、こいつらの献身のおかげなんだろうな」
そう言って、薬研は自分の周囲を泳ぐ魚の骨を手でわしづかみにすると、そのまま口へ運び豪快にばくりと食べてしまった。彼の腹の中でギチチチと暴れる音が一瞬したが、すぐに静かになる。
「食っても食っても湧いてくるんだ。おかげで、明らかに感染済みなのに食欲が満たされっぱなしで、今の俺っちは世界一おとなしいゾンビだと思うぜ。頼みの綱の炎も一向にここまで届かねぇし、生き急ぎとはおよそ真逆だ」

「俺も、とっくに焼け死んでると思っていたよ」
「それなのに、わざわざ確かめに来たのか？俺っちがいなくなった後、さぞ暇を持て余してるだろうと思ってたが、とんだ悪趣味に目覚めたもんだ」
薬研はすたすたと部屋の奥まで歩き、すぐ近くで揺れている炎が燃え移ることもない、白いままの障子窓をゆっくりと開いてみせた。
「見ろよ長谷部、百万ドルの夜景」
隣に立って窓から外を見ると、はるか下界に炎の海が広がっている。京都三条の町並みは数千数万の赤い灯篭のようであり、鴨川には油が流れ墨壺と成り果てている。
「……どうして寺がこんなに高い場所にあるんだ」
「すごいだろ。階段なんて一段も上がっちゃいないのに、この部屋はまるで天守の間だ。炎はずっと同じ場所を燃やしていて、俺のところまで届かない。ここはな、長谷部、バグって切り取られた時代なんだよ」
ほらあそこ、と窓に身を乗り出して町の一角を指さす。どれも炎の玉になっていて俺には違いなど分からない。
「あのあたりに菓子匠があって、にっかりの旦那が喜んでた。平和に買い物ができる時代に来られたもんだから俺も浮かれて、牛肉とか豚肉とか鶏肉を買いまくったよ。どうして気づかなかったんだろうな。そんな時代があるのはおかしいってことに」
「肉以外も食え」
「言われたくねぇよ、悪食」

懐かしいな、と俺がこぼすと、それが織田家にいた頃のやり取りのことだとすぐに理解し、そうだなと返した。
「やっと長谷部国重らしくなったな。本丸に連れて来られたときのアンタは、首輪を付けられ痩せ細った犬みてぇで、こっちが虐待してるような気になって不快だった」
「酷い言い草だな。おまえらが健康優良児してられたのは、俺という保健室の先生がいてやったおかげだろう」
「いてやっただぁ？毎日餌はやっただろ。俺の血を飲ませ、俺がいないときには他の奴の血をアンタの食事に混ぜて食わせた。そのせいで明石の旦那は苺シロップが食えなくなったんだぞ」
「知るか。だいたいあれっぽっちで足りるかよ。分かって最低限以下の量を与えて、俺をおまえに依存させようとしたんだろう。姑息な手だ」
「空腹にさせるのは精神操作の常套手段だぜ。頼まないと食えないって認識を持っていてもらわねぇと、いつ俺っちの仲間に牙を向くか分からなかったからな」
「防衛手段でもあったというわけか。そうだよな、おまえは俺の知る限り、常にあの本丸の仲間たちのことを第一に考える男だった」
ただ俺は、その仲間の内に含まれなかったというだけだ。俺がそう言うと、俺の胸を一度どんとどついて、ゆっくりと間合いを取り、部屋の中央で足を止めた。
「……俺たちが選ばれたのは、本当にただの幸運だった。スロットの出目と同じだよ。止女という審神者を奪われて

暴れたアンタは、六本木の地下にあった政府の研究施設を占拠した。一斉に派遣された刀剣男士たちによってすぐに拘束されたがな。その後、別の研究に利用されるようになり…このへんはもう大倶利伽羅から聞いてるか。間抜けな話だよな、せっかく恐ろしい吸血鬼を捕まえたってのに、その吸血鬼の血を使って別の吸血鬼を大量生産しちまったんだから。研究所は再び混乱に陥り、管理できなくなったアンタを、それでも処分してしまうには惜しく、保管しておく場所が必要になった。そこで見事当選したわけさ。俺たちの本丸が」

「おめでとう」

「ふざけんな。見た目は顔見知りでも中身は同族喰いの鬼だぞ、こんなプレゼントいらねえって思った。だが重症で寝たきりの奴がそのとき何人もいた。手入ができなきゃ治らねぇし、俺にできることは何もなかった。結局、人間様の思惑通りに受け取りの判を押したってわけだ」

もうこの景色にも飽きたな。俺は眼下に広がる赤い町を目に焼き付け、元通りに障子窓を閉めた。

かつてこの場所で信長と共に焼け落ちた刀、薬研藤四郎。しかし今この場に信長の姿はない。彼はただ一振りで俺に向かい合い、柄から白銀の刃を引き抜いた。

干渉しすぎたのだ。何度も同じ歴史をいじくり返して、そのうえその時代に生きていたはずの人間を喰い殺すようにまでなってしまっては。過去と未来を同時に改変すればどうなるか、その結果がこの、歴史の分離現象だ。

「俺は、今まで沢山の薬研藤四郎に会ってきた」

「そうか。俺っちは、そう珍しい刀でもないからな」

「初めてこの身を得たのは、２２０５年。俺も近侍だった。とにかく主に気に入られようと必死だったが、天然もの、……はは、天才というのか？圧倒的な強さを持つ刀が現れて、それを回収するために俺の本丸は解体された。そこの薬研は、そのときにおそらく刀解されてしまったろう」

「知ってる。ＲＣＳ成長体が出現した本丸の刀は、機密の漏洩を防ぐために刀解されていた」

「次にいた場所は六本木の研究所。来る日も来る日も体を切られ、折られ、何かを注入され、気が狂いそうだった。ときどき同じ境遇で運ばれてきた刀の中におまえがいたが、言葉を交わしたことはなかった」

「ＲＣＳ合成体として製造に成功したのは、おまえさんだけだったと記録にあるからな。壊れたんだろ」

「そして、止女という哀れな審神者に守り刀として宛がわれた俺は、政府に反逆したＲＣＳ成長体の集団を追った。俺はそこにいた燭台切光忠を殺すためだけに生き抜いていたんだが、他の天才刀どもに邪魔されて仕損じた。邪魔をしてきた刀の中には俺もいたし、おまえもいたよ」

「……そいつらの経歴も、資料を読んだことがある。全く羨ましいとは思わんね」

「俺は羨ましいよ。妬ましいという方が近いな。こことは似て非なる場所、時間と時間の狭間へ逃げて、平和に暮らしているそいつらのことが」

でも、おまえがまた俺を本丸で生かしてくれた。
他の奴らを生かすための餌として置いてくれていたのは分かっている。だが、それでも俺にとっては、二度と手に入らないと思っていたはずの刀としての暮らしだったんだ。
「おまえは、今まで会った薬研藤四郎の中で一番の恩人だ。おまえにあそこで飼い慣らされている間に、俺の中にこびりついていた復讐心も、そぎ落とされてしまったよ」
「そうかよ。じゃあ、長谷部は俺に何をしてくれる？」
「薬研藤四郎が、一番求めているものをやるよ。ついでにおまえも、今まで出し惜しみしていた分、全部喰わせろ」
「それじゃ俺っちが払いすぎだろ？」
薬研は呆れたように笑ってそう言うと、俺が刃を抜くのと同時に地を蹴った。飢えた眼は喜びにぎらついていて、最後まで平らげてしまうのが、ひどく惜しく思えた。

どこにいってたの、と問いかけた男の声は怯えていた。
そう尋ねる彼の顔にも刀傷が付いていたので、何度か俺を探して出陣したのだろう。軽傷で帰還しているところを見ると、感染は免れたようだ。
「ちょっと、本能寺まで」
「危ないだろ！？どうして一人で行ったりしたんだ！」
俺が返り血まみれの姿でいながら、まともな受け答えをしたので、ようやく安心したのと勝手な行動への憤りとがいっぺんに噴き出したらしい。一緒に函館に出陣したとき以来に聞く、彼のヒステリックな声だった。
「……何をそんなに怒ってるんだ？燭台切」
「なにって、僕がどれほど君のことを」
「心配した？あのなぁ、前々から言いたかったんだが、俺はおまえに心配されるほど練度の低い刀じゃないんだぞ」
こんな感じで良かっただろうか？こいつと話すとき自分がどんな口調だったか曖昧だ。だが、『どんな設定だったか』は覚えている。
「それ、は、そうだけど……！」
「燭台切、すまないが疲れてる。風呂に入って、それからおまえと一緒に少し眠りたい。話はその後でいいだろうか」
「……わかった」
燭台切は、溶岩を無理やり飲み込みましたという感じの顔をして、普段の優美さが欠片も見られない足音を立てながら風呂の支度をしに歩いて行った。
俺はその背中が廊下の角を曲がるまで見送ってから、厨の方角へ足を向けた。単純に喉が渇いていたのと、そこへ行けば俺の見たいものが見られると思ったからだ。

「……やっぱりな」
なにが台所は奥様のテリトリーだ、大うそつきめ。
あいつが俺を徹底して近寄らせない場所はここだけだった。燭台切が俺に隠していた秘密は、俺がいつか小判箱を

隠していた、厨の冷凍庫の中に袋詰めされて眠っていた。どこのお宅も考えることは同じだな、と思いながら、力任せに引きちぎった南京錠を床に捨てた。だいたい冷凍庫に鍵を掛けるなんて、ここが怪しいと言ってるようなものだ。

「皮…軟骨…なんだこれは爪か？こんなもん冷凍したって呪力の欠片も摂れないだろうに」

透明な袋に空気が入らないよう密閉して詰められているのは、人間の体の一部分だった。おそらく、ここに昔いた審神者のものだろう。

この本丸の薬研藤四郎が自室の壁一面に書き殴っていたものは、審神者の体組織から呪力を抽出して経口摂取できる液体に加工する方法と、その液体の化学式だ。俺の薬研が化学専攻で助かったなぁ、と満腹の腹を撫でる。だれがおれのやげんだと言い返された気がした。

ひとしきり冷凍庫の中の宝物を漁っていると、これも袋に入れられた一冊のノートを見つけた。紙なので凍ってはいないが、袋から出してみると、ページがひんやり冷たい。燭台切の文字だとすぐに分かった。

・長谷部君は燭台切光忠を知らない。（じゃあなんで名前を呼んだのって話だけど知らないらしい）
・近侍は薬研君。朝なかなか起きてこない（うちと真逆）
・ゴリラと呼んでいるのはカセンカネサダ。打刀。
・僕は鍛刀かドロップで最近来た刀。どちらなのかは長谷部君から言ってくるまで話に出さないこと。
・〈重要〉長谷部君は強い。
・→新人を手合わせで鍛えてあげられるくらい
・→函館で敗走するとすっごくショック受けるくらい
・炊き込みごはん。茄子。肉。アイス。
・六本木を知らなかった！主の名前を出したら乗り切れたけど危なかった。調子に乗って喋らないようにしよう。
・万屋とか超なつい。
・刀の頃の記憶がある（なのに僕のこと覚えてないって！不細工だったから？不細工だったからだよね！？怒）
・水がなくなってきた。どうしよう。
・僕のこと、好きになって。
・僕はもう、水を飲まない方が良さそうだ。

「……字、かわいすぎかよ」

よくもまあ、ヤク中の妄想世界の設定をまめにメモして話を合わせてきたものだ。といっても、俺をヤク漬けにした張本人がしたことなのだから礼を言う筋合いもない。

よりにもよって、かつて俺を砕いたあの憎き刀と同じ『燭台切光忠』につかまってしまったとは。

「長谷部くーん、お風呂わいたよ、どこにいるの？」
廊下の向こうから男の声がする。俺はノートを元通りに袋に詰めて戻し、冷凍庫の上蓋を音を立てぬよう慎重に閉めた。自分が厠にいたと装おうと、忍び足で厠まで行き、そこから大げさに足音を立てて歩いた。
そこにいたの、と、ほっとした奴の顔はとても弱々しくて、誇りを傷つけられたのはむしろおまえの方だと思った。
あのとき、俺をひとおもいに斬り殺し、自らの腹を捌いて死んでいれば、その方がまだ良かったはずだ。こんな、一度はお互い受け入れたはずの孤独に怯えて、間に合わせの物語の中でみっともなくもがくくらいなら。
「なぁ、燭台切」
「……なに？長谷部君」
「一緒に風呂に入りたい。そのあと、セックスしたい」
「えっ……あ……僕と？」
「おい……他に誰がいるんだよ」
やっぱりやめた、と思いっきり肩をぶつけてやり、早足で風呂場へ歩き出すと、後ろから「わー！ごめんごめんごめんごめん！」と、ごめんが百回くらい追いかけてきた。
この場所は、なんて居心地の良いぬるま湯だったのだろうか。

10　霜月の真っ赤な晩餐

どうしてほしい？と尋ねたら、燭台切はものすごく困った顔で俺を見た。言いかけてはやめるという池の鯉のような口パクを披露した後で、君のしたいようにしていいよ、などと本当にこのやろうよくも言えたものだなと思う。

「どうしたの、急に……君の部屋でするのも初めてだし、ひょっとしてちょっとマンネリ気味だった？」

「いや？おまえとするのはいつも気持ちいい。部屋はあの意識高い系の間接照明がムカつくからこっちの方がいい」

「ええっ！？初めて言われたけど！！」

「初めて言ったからなぁ」

しばらく使われていなかった俺の部屋は、火鉢を焚いても、しんしんと冷える。重ねて敷いた布団の中に潜って、燭台切の黒い着流しの合わせ目を指で開いた。

「せ、積極的…だね？」

「ふ。おまえは余裕がないな。どうしたんだ？早くいつもみたいにぐちゃぐちゃに濡らして何も考えられなくさせてくれよ」

俺が挑発して言った言葉に、彼は唇をひくりと震わせた。いつもみたいに。そうだよいつもおまえが使っていた呪文だよ。それが当たり前みたいな顔して俺を操って、日頃のご奉公の見返りとばかりに何をさせたんだ？

「それとも黙っているのは、新手のやり口で俺を焦らしてるのか？本当にわるい男だな、おまえは」

それなら俺はいい子になってやらなきゃなあ。思いつきで俺はそう言って布団をすっぽり被り、燭台切の胸、腹、骨盤に口付けを落としながら、腰帯をほどいて筋肉の張り出た太腿をべっとりと舌で濡らしてやった。

「あ……え、はせべく、っン」

まだ縮こまっている燭台切の雄犬を手のひらでこねこね撫でてやりながら、唇をすぼませて、ちゅうと吸ってやる。そうしたら目の前の腹筋がびくりと痙攣した。

柔らかい傘の上に唾液を垂らして、親指の付け根でごしごし扱いているうちに、手で作った丸の中から膨らんで頭を出してくる。

ふっ、ふーっ、と息を荒げながら牙でも見えそうなほど唇を噛みしめて快感に耐えている男の顔と目が合った。俺の部屋の行灯のひかりは、そいつの金色の瞳を燃えるように輝かせている。俺はこの夜の獣のような瞳が昔から大嫌いで、おそろしく、どうしようもなく憧れていたのだ。

「もう一度聞くが……どうしてほしい？言葉でなくても、頭を押さえつけて俺をおまえの好きなようにしてくれて、いいんだ」

おまえが最低なやつであればあるほど、俺は満たされて興奮するから。むっと蒸れたにおいがし出した亀頭を少しずつ口の中に迎え入れる。舌でねぶるとつるつると滑り、ときどきしょっぱい液が出た。

歯に当ててしまいそうで、竿を手で扱きながら先っぽだけを口でしゃぶっていたのだが、先走りのえぐい味に頭がくらんで、もう構わずに喉の奥まで咥え込んだ。
「んっ…！っく、あ、あぁ……」
「ふ、んぶ、っむ…しょくだ、きり……いいか…？」
こくこくと頷き、眉間にしわを寄せすぎてもはや睨んでいるのと変わらない苛立ち面で、彼は俺の名を呼び返した。
「はぁ…っ、ああ…すごくいい、はせべくん……」
髪をくしゃりと撫でられる。あ、あ、だめだ、ぞくぞくする。これ、このまま齧って咀嚼したい。美味い。舌先が勝手に舐め回してじゅるじゅる吸い上げるの止まんない。息吸う優先順位どっかいったから鼻水出てきたし、ああ裏筋の血管のぼこぼこしてるとこの食感とかもう、もう、
「んっ！？んんーーッ！ぐ、ぇうっ！」
酸欠でトランス状態になっていた意識を強引に呼び戻された。さっきまで優しく髪を撫でていた燭台切の大きな手が俺の頭をわしづかみにして、硬いペニスを咥えさせたまま前後に揺さぶり始めたのだ。
「あ、あ、長谷部くんの、のどの奥、ぱくぱくしてる…、はは、苦しいんでしょ、きゅうきゅうしてるね…？」
答えられるか、ばか、さいこうだな。そりゃ俺がしろって言ったけどさ、実際されたら吐きそうだ、自分の唾液で顔がべたべたで気持ちわりぃ。はやくはやく、おまえの血、精液？どっちでもいいから、飲みたい。
「エロい顔……ッん、出すよ、いい？」

うるせえいいから早くくれ。肯定のつもりで喉の奥までがっぷり咥えて思いっきり吸い付いてやったら、舌打ちを一つしたのと同時に青臭い精液がどぷどぷと口いっぱいに溢れた。出しすぎだ、鼻がつんと痛い。
「はぁ…はぁ…、どうしたんだい今日は、すごい」
賢者モード入ってる暇など与える気はさらさらない俺は、髪をかき上げ今更かっこつけ始めた燭台切の出した精子をごくごくぺろりして、俺の唾液も手伝ってべとべとに濡れた男の性器を指で摘まむと、ここ数日戦ってばかりでごぶさただった尻の穴にぐっと捩じ込んだ。
「え、え！無理だよ全然慣らしてないし、早く抜いて」
「…は、はは、さっきからあんまり可愛い反応するなよ。泣けてくるだろ」
「もう泣いてるじゃないか。痛いんでしょ？」
「可笑しくて泣いてんだって。こんな小さくなっちゃったおちんちんで、器用に怪我なんてできるかよ」
弾力があってなかなか奥まで入らないそれを、遊び道具のようにして入口だけでくちゅくちゅ上下させる。もどかしいが、これはこれで楽しいなあなどと悠長に感じ入っていると、燭台切を下敷きにしていたはずの視界がぐるんと反転された。
「……そんな煽り方、教えたかなあ」
「なんだよ、息子の不出来を指摘されて怒ったのか？」
「いきなりいなくなって、帰ってきて、やたらサービスがいいと思ったら、僕のザーメンでべったべたの口から僕を

怒らせるようなことを言って。いったいどこで君は、そんな悪いことを覚えてきたんだい？」
　燭台切の声が静かになるほど、それに反してアナルの壁が押し広げられる。怒りで興奮してるのか。気の合う奴！忠告された通り、大きくなったペニスを受け入れる準備はできていなくて、忠告しておいて、燭台切は突っ込むことしか考えていないクソ野郎の顔で俺の足を持ち上げ自分の肩に抱え上げると、俺の体が逃げないように腰を押さえつけて、奥までずぶりと捩じ込んできた。
「……ひっ！？あ、痛、ぁ、い、ヤだ…！」
「えぇ？……どうしたのさ、急にかわいこぶったりして」
　それとも演技も覚えたのかな、と意地の悪い台詞を俺の耳に吹き込みながら、じたばた暴れる俺の足を自分の足で縫い止めて、体重をかけて腰を進めてくる。
　下の口でも食えるとは知らなかった。律動に揺らされる視界の中で、ぼんやりと俺は感動する。燭台切が俺の中で肉棒を太くしてずんずんと突き上げてくるたびに、粘膜が鋭い痛みに痺れながらもこの男を味わっているのが分かる。肉壁が轟き、こいつを離すまいと吸い付いているさまが。
「あ、ア、んんっ、やぁ、や、きもちいいっ！もっと…！もっと突いてぇっ！」
「痛いんじゃなかったの…？わかんなくなっちゃった？」
「う、ん！いたい！熱いぃぃ…動いて…くれ、じゃないとこんなのおさまらない、あ、あ、ずんずんされるのきもちいい、い……きそう……」
「んー、まだ、イッちゃだめ」
　喉がひくひくして、ああそろそろ出そう、と体じゅうの筋肉がゆるゆるになった感覚に没入していたところで、急にぴたりとピストンを中断された。
「は、ああ…な、なんで」
　声こそ可愛いめにしといたが内心殺すという心情で不満を訴えると、誰かさんのせいで久しぶりなんだからもっとゆっくり味わわせてよ、と、自分だって髪を汗で濡らして余裕なんか大してないくせに、どこまでも俺を支配したくてたまらないという欲をのぞかせる。
「じゃあ……こっち」
　俺だって、欲しいものは同じだ。既にはだけきっている浴衣の合わせ目をぐっと肩から下ろして、ぷくっと腫れた乳首を指の間に挟んで見せつけた。
「ああ……こっちもすごく痛そうだ」
　こんなに尖らせて、取れちゃいそうだね。そう言われて口に含まれたら、びりびりと足の小指まで電流が走って、唇からは、ひゅ、ひゅぅ、と変な音がもれた。
　敏感にされた乳首を歯でぎりぎりと容赦なく噛みしめられながら、ひくひくと続きを欲しがっていた後ろの性器も再びゆっくりとかき混ぜられている。
「あんっ、あ、はぁ…むり、も、きもちい……」
「うん……長谷部くん、すっごい濡れてるよ、きもちいいんだね、かわいい。かわいい……好きだ……」
「……あぁ、おれもだよ。好きだ、燭台切……」

ほんとうは、好きだなんて一つの言葉で表せるような、単純な感情じゃなかったけれど。それでも今こんなことをしているときに適切な答えを導き出せるはずもなくて、俺は鸚鵡返しのように返事をしてしまった。
燭台切は、そんな一つの言葉だけで、さっきまで快楽に酔いしれていた雄くさい顔をくしゃりと丸め、隠すようにうつむいた。
「なんだよ、ずるいぞー、顔を見せろ」
「やだよ…っ！絶対今の僕、カッコ悪い顔してるから」
「いつもと同じだって、ほら」
「ぐ……言ったな？長谷部くん状況わかってないでしょ」
「は？……あっ！？ま、待てバカ！ひきょうも、の！」
「聞こえないなあ」
滑稽な顔を笑ってやろうと燭台切の顔をぺたぺた触っていた俺の手首は、いつも折れそうだと優しく触れてくれていたのがウソみたいな力で掴まれ、一瞬で布団にうつ伏せに倒された。
そのまま尻たぶを持ち上げられたかと思ったら、体勢を変えた弾みで抜けてしまった男根を後ろからずぷんと埋め込まれる。串刺しにされたような圧迫感に、俺の性器からびゅっと透明な雫が飛んだ。
「あーあ。軽くイッちゃった？じゃあ次は、このやらしい口で僕のを全部飲み干してね」
さっき全部飲んだのに、と言い返す余裕は与えられずに、ぱぁん！と高く上げられた尻を平手で打たれた。
「痛っ――！なにす…あっ！あっ、や、め！」
ぱんっ！ぱんっ！と折檻される稚児のように尻を打たれながら、ぐっちゅぐちゅんと中をかき回すペニスに紛れもなく俺の体は喜びの汁を垂れ流していて、プライドをぶっ壊されながら食べるディナーの美味さに発狂しそうだ。
「あーー……すごい、もう僕のもちょっと出ちゃってるよ、二人分のにおいが混ざってる、もうこの布団使えないんじゃない？」
聞いてる？とひりひり痛む尻を撫でながら、俺の背中に体重を乗せて、背骨をべろりと舐め上げられた。首筋に舌が近づくほどに太いペニスが奥深くを蹂躙し、いよいよ声も出ない。もうおしゃべりできないね、と満足そうな声がすげえむかつく、あとでぜったいころしてやる、と心には誓いながら、行為に集中した燭台切に気持ちいいところを何度もずっぷずっぷ抜き差しされて、吐息しか出せない口を革手袋の指でかき回されながら俺は射精した。
「もう…もうやだって…出したばっか、感じすぎ……」
うんうんそうだね、と雑な返事をしながら燭台切は俺の中に精子を塗りこめるように長い射精をして、やっと終わったかと思ったら、ぶるぶる自然に痙攣しているアヌスを使って萎えたペニスを扱き、硬くしてまた突っ込んできた。どうしよう、殺される。
「……あのね、君はちょっと生意気になって帰って来たからさ。可愛いことしか言えなくなるまで、ぐちゃぐちゃに犯すことにした。好きだよ、長谷部くん」

好きだと言えば何でも許されると思ってるのかおまえ、と言いたかったが喉仏が震えて話せない。気絶したらお風呂には入れてあげるから大丈夫だよ、と次々に酷い台詞が飛び出してくる。
そういえば、初対面の男を殴って拉致したあげく薬漬けにして洗脳レイプするような奴だった。改めて文字にすると本当に酷いな。
「燭台切、光忠……」
「ん？なぁに、みつただって呼んでくれるの嬉しいね」
燭台切光忠が、いい刀なわけがなかったな。そして俺は、そういう悪い刀に魅入られてしまったのだから、いまさら後悔したって遅いのだ。
「……何でもない。早く犯せよ、ダーリン」
「可愛くないなぁ。愛してるよ、ハニー」
ゆるゆるとまた熱病のような快感にさらわれながら、俺は燭台切が俺を騙した言葉の数々を、ひとつひとつ丁寧に思い浮かべていた。
（恋人なんだから。君を抱く。僕を好きになって。とか）
（おまえは本当にばかなやつだよ）
まもなく師走だ。忙しくなるな。この男に気取られずに、俺がやるべき仕事を終わらせてしまわなければ。せっかく栄養をたっぷり摂って強くなった骨がまた折れそうだと溜息が出る。
それが終わった後は、おまえの望むような世界が来るといいんだが。俺とおまえが恋人で、喧嘩ばかりだとしても、決してかなしいことばかりじゃない世界。それは、俺にも優しい世界のはずだ。
「長谷部君、考え事してるでしょ」
「ああ。おまえが話してくれた本の話を」
「えっ、今！？萎えちゃうからやめて？」
「おまえの最悪な改変版の方じゃない。思い出したんだ、俺もそのタイトルの小説を読んだことがある」
かつて俺が殺したいほど憎んでいた燭台切光忠が、逃げた先の世界で書いた小説。それは私小説だった。俺のことも書いてあったし、俺ではないへし切長谷部と添い遂げたことも、政府の研究のことも書き残されていた。
置いてくるんじゃなかったな。ロザリオのせいであのときは内容を認識できなかったが、歌仙が俺に貸してくれたのは、なぜか違う本のカバーを掛けて渡されたあの本だった。間違いない。あいつらにとっては恋愛小説ではなく、歴史の参考資料だったようだが。
「どこにでもいる、ありふれた僕ら」
「……ああ、もう他の刀にあげちゃってね、本はないんだけど。僕は、君とその本のようになりたいんだ」
「そうかよ。悪いがそれは叶わないぞ。ここにいるへし切長谷部の方が、ずっとおまえに執着しているからな」
さっきまでの鬼畜面はどこに落としたのか、燭台切は真っ赤になって、自分の方が可愛いことしか言えなくなってしまった。

11　師走めぐる記憶

スライドショーのように季節は流れた。
研究所の各居室には、天井に四季の風景を投影するプロジェクションライトが設置されており、放っておいても時間の経過に合わせて、梅、桜、菖蒲と、主に季節の植物を選んで映し出していた。
毎日実験の時刻になると俺を呼びに来る研究員がいた。彼は、自分がこのライトを作ったのだがどうだろうか、と感想を俺に求めた。今はまだ地下暮らしの慰め程度だけど、いずれはもっとリアリティを追求して視界３６０度に桜の花が咲き誇るような投影機能を実装したいんだ、と興奮して話していた。匂いもあった方がいいんじゃないかと俺が言ったら、それは良いと喜んだ。
クリスマスの夜には、別の研究員が来た。この研究所に連れて来られたばかりの頃はあまり人間から話しかけられることはなかったのだが、連日の実験で逃げも折れもせず残っているのは俺だけだったらしく、この頃には姫のように丁重に扱われるようになっていた。ただし実験中はその限りではない。
「何かほしいものはあるかい」
白衣の下に赤いセーターを着て、綿で作った白髭を鼻に貼り付けた研究員が尋ねた。「燭台切光忠」と俺が答えると、彼はいま別の実験場にいるから駄目なんだ、と何度も聞かされてきた答えが返ってきた。
「だったら聞くな。それより今日は剣舞の日なのか？」
剣舞というのは戦闘実験のことだ。裸で寝かされ何時間も体中を切られたり縫われたりされるより、気絶するまで戦わせられる演習の方が俺は好きだった。その時だけ着ることを許される武装一式を差し出されたので、俺はいつもよりマシになりそうな一日に期待して袖を通した。
「ちがうよ。今日は君に会わせたい子がいるんだ」
「なんだ…じゃあこれはただの正装ってことか。また偉い人とやらが見学に来て俺をべたべた触るのか。最悪だ」
「いやいや、大きい声じゃ言えないけど、彼らよりずっと可愛いから安心してよ。君が『主がほしい』って言ってくれたらサプライズで引き合わせようと思ってたんだ」
「主……？審神者のことか。俺はその審神者の近侍に任命されたのか？」
「まぁ、そうかな？こないだまで人の形をしてなかったから紹介できずにいたんだけど、やっと食事をしてくれて言葉も話せるようになったから、ここからは君と組ませる。とても強い審神者なんだ。君が殺したがってる燭台切光忠が仕えている審神者とどちらが強いのか、いずれ比較検証をするつもりだよ。その実戦データを取るときには、念願の果し合いができるかもしれないねぇ」
今日はそれに向けての顔合わせ。楽しみにしといてよ、と話しながら、研究員は作り物の髭面を下げて膝を折り、

俺の靴下を履かせ、ソックスガーターのベルトをぱちんと留めた。

ここに連れて来られる前、俺はとある本丸で近侍として一人の青年に仕えていた。青年といっても、服装や態度が幼稚で子供と変わらない男だった。顔は不細工だったのであまり記憶に残っていない。

不細工に忠誠心など生まれなかったが、近侍に任命されたからには、自分が本丸で一番の刀でなければ治まらなかった。自分のために剣の腕を磨いたし、練度の低い他の刀を気遣うことも忘れなかった。特に太刀の燭台切光忠は顕現したその日から審神者に嫌われ嫌がらせを受けていたので、審神者に隠れてひときわ目をかけてやった。

猫のような金色の目をした、美形の刀だった。何もない粗末な部屋に寝具や調度品を揃えてやるのも、手合わせの後に初めての酒の味を教えてやったのも、上等な人形を愛でているようで、気分が良かった。

しかし、俺の人形遊びはちょっとした油断が原因で審神者の知るところとなり、常から俺の見てくれに性的な衝動を抱いていた彼は、俺たちがそういう仲だと勝手に誤解し、勢い任せに俺の身体を暴いた。

敵の刀で斬られることの何十倍も痛くて不快だった。憎悪を隠しきれずに俺が睨むと、挿入している息子が小さくなってしまうと言って、最中は笑うことを俺に強要した。蛙のような体勢で鳴かされている己の醜さに、いつしか俺は笑顔を作ると条件反射で涙をこぼすようになっていた。

審神者に逆らえば刀剣男士は存在できないと聞かされていたから、こんな辱めを受けるくらいなら竹刀と錬結された方がどれだけマシかと思いながらも、日々の任務をこなし、夜伽を命じられれば応じていた。だというのに、俺という国宝級の人形を手に入れておきながら、審神者は「今度はアイツにも奉仕させるか、俺の刀なんだし」と、俺の髪にお粗末なチンポを擦り付けながら言い出した。

こんな豚野郎の肉便器にされた挙句、大切な美しい人形まで取り上げられ、汚い精液で汚されるのか。それは審神者に性交を強要されて以来久しぶりに我慢のできないことだった。俺は、彼の燭台切への負の感情を利用して、一つ提案をした。

「ご存知でしょう。あいつは俺に懸想している。その俺に貴方の前で無理やりレイプされたら、さぞかし面白い見世物になるとは思いませんか？」

他人の手で汚されてしまうくらいなら、自分の手で壊してしまった方がいい。俺は燭台切からの信頼を裏切り、彼を審神者が満足するような下品なやり方で犯し、そのまま部屋に捨て置いた。俺の狙いどおり、審神者は嫌っている燭台切が傷つけられた光景に満足し、それ以上に燭台切をどうこうしようという気はなくしてくれた。

燭台切とはしばらく距離を置いた。向こうも一日に何度も出陣を繰り返して俺と会わないようにしていると見えた

ので、どこへ出陣していようと口を出さずに黙認した。
だが、半年も経たないうちにまた平然と俺に接してくるようになった。俺を先輩の刀と慕い気を許していたときと同じように、廊下ですれ違うと手を挙げて挨拶され、厨で会うと料理の出来や季節の変化にかこつけて晩酌に誘われた。あのときのことを恨まれていないという楽観は到底できなかったので、何を企んでいるのかと警戒し、初めのうちは冷徹に断り続けていたが、ほのぼのと声をかけられ続けているうちに、どうやらこいつは、自分が俺からされたことを覚えていないようだという結論に思い至った。ショックのあまり辛い記憶を封印してしまったのだと。
それはひょっとしたら、俺自身がそうであってほしくて強引に解釈したのかもしれない。
実際は、やはり都合よく忘れてくれたなんてことはなく、それは燭台切が俺に復讐するための作戦だった。彼は俺が再び自分に気を許す瞬間を待っていた。そしてまんまと欺かれた俺は晩酌の誘いに乗ってしまい、自分が奴にしたのと同じことをされたのだ。

俺の部屋がある地下十三階から、専用のエスカレーターを使ってさらに降りてゆく。研究員の男は俺を先導しながら途中で何度も鋼鉄の扉のロックを解除し、その行動はこの先にいるという審神者の重要性を示唆していた。
「前から一度聞いてみたかったのだけど、君にとって燭台切光忠とは、どういう存在なのかな」
「それは、実験と何か関係が？」
「いや、ただの興味さ。刀派も違う、共通した逸話があるわけでもない、同じ主人の元にあった期間も短くて、そうすると刀剣男士として顕現してからの因縁が執着の原因なのだろうけれど、君の方が恨む理由が分からない。どちらかといえば、恨まれるべきは君の方だっただろう？」
次のエスカレーターへと誘う扉が開く度に、強い向風に煽られて目が乾く。どこまで知っているのかと問いただしかけた言葉は、その強風に中断されたまま腹に飲み込んだ。一つ知っているなら、おそらくは全てを知っているのだろう。正規政府というのが正義の味方ではないということは、ここに来てからたっぷり思い知ったことだ。
「俺は、完璧な刀だった」
近侍に気に入られ、政府から次々与えられる任務をつつがなく達成し、他の隊員を気にかけ、時には気さくな冗談も言うが、常に佇まいは凛として美しき誇り高い刀。そんな完璧な刀である俺が贔屓にした刀が燭台切光忠だ。
「燭台切のあの美しい目の中には、完璧な俺の姿が映っていなければならなかった。たとえ向けられる感情が思慕や憧憬から憎悪や殺意に変わったとしても、侮蔑であってはならなかった。人間の男に穢され貶められた弱い俺の姿をその目に映した燭台切は、いてはならないんだ」
「それはまた。行き過ぎた自己愛による攻撃衝動か。神様というのはもっと、他者への慈愛に満ちているものだと

思っていたけどなぁ」
「慈愛が欲しいなら仏門に入るんだな。古事記の昔から、日本の神が愛するのは自分と、自分が美しいと認めた者だけだ。それに、おまえらのグロテスクな研究に俺という生贄が耐えていられるのも、完璧な強さを求める俺の自己愛の賜物だと思うがな？」
「ああそれを言われちゃね、君のナルシシズムに感謝するしかないよねぇ」
　さて到着、長いピクニックにお付き合いありがとう。と言って男は足を止めた。
　三十分は歩かされた先の突き当たりに現れた扉は、鉄格子がいくつも複雑に噛み合った巨大な彫像のような形状をしていた。壁のパネルに何桁もの数字を素早く打ち込み、研究員の男がロックを解除する。すると鉄格子は玩具のからくり箱のように決められた順番で外れていき、最後に両開きの扉がごんごんごんと歯車の軋む音を鳴らしながら眼前に開いた。
「紹介するよ。もう一体の生贄、君と違って他者への慈愛に満ちた僕らのマリア様、製造停止になった最後の人造審神者９９９号――名付けて『トドメ』ちゃんだ」
　赤い液体の流れるチューブが所狭しと張り巡らされた部屋、そのチューブが天井、床、左右の壁から十字の形に伸びて、ある一点の結び目に繋がれていた。結び目に固定された格好で長い白髪をうなだれていた人間が、声に応じてのろのろと顔を上げた。毛髪が白いので痩せた老婆かと思ったが、赤い色の瞳をした少女だった。
「……かえって」
　それが彼女――俺の新しい審神者が発した第一声だったし、全然好みじゃないがまあ美形、というのが俺の審神者に対する第一印象であった。

　俺は審神者を止女様、と呼び、審神者は俺を長谷部、と呼んだ。審神者を宛がわれたのだから、てっきりまたどこかの本丸住まいになるのだろうと思っていた予想は裏切られ、相も変わらず白い壁で覆われた研究所に二人とも閉じこめられていたし、お互いにマッドサイエンスな生体実験に呼ばれるスケジュールで忙しい身なので、変わったことといえば、彼女の部屋が俺と同じ十三階に移されたことと、朝起きてその日の実験場まで移動するときに、廊下ですれ違う彼女と出勤途中の会社員のような哀愁ある目配せをするのが日課になったことくらいだった。
　いや、もう一つ増えた日課があった。彼女の食事の面倒は俺が見なければならなくなったのだ。
「……たべたくない」
「駄目です、食べてください。食べていただかないと、俺が部屋に帰れないんです」
「今日は、いくつ刀を食べてきたの？」
「え？そうですね…今日は短刀が多かったですよ。単騎で

函館にいた今剣、竹藪に隠れていた秋田藤四郎、そうそう京都に珍しい奴がいて、明石国行という、これは太刀ですね、食べごたえがありました」
　さっさと食ってください、と血の流れる左腕を鼻先に突き出すと、オエ、とわざわざ言葉に出して拒み、研究員が買い与えたダイオウグソクムシのぬいぐるみを腕に抱えてそれに顔をうずめた。
「その気色悪いぬいぐるみ捨てなさい。貴女は五年も絶食したりできないですよ」
「五年と四十三日」
「は？」
「五年と四十三日生きた。絵本にそうかいてた」
　絵本まで与えてるのか。つくづくこの施設にいる人間は気持ち悪い奴ばかりだと思い、俺も真似して「オエ」と舌を出した。すると彼女は顔を上げて、なにが良かったのか嬉しそうにニヤリと口元を歪めた。
「ねえ、どうして血を飲まなくちゃいけないの？」
「そうしないと、生きられないからですよ」
「だったら、いらない。生きていたくない」
「またそれですか……」
　かといって舌噛んで自殺するかといえばしないくせに、女の結論のないネガティブツイートに付き合わされるのはうんざりだ。大丈夫？俺がついてるよ？とでも言えばいいのか？俺だってそんなにヒマじゃない。
　この人造審神者を製造するとき、アヤメという人間の審神者が一人犠牲になったと聞いた。アヤメは母親役として止女様のそばについていたそうだが、長くは生きられずに死に絶え、その死体を捕食したことで彼女は人外の姿から人間の女の容姿をトレースできたのだと聞いている。
「……じゃあ、こうしましょう。貴女が俺の願いを叶えてくれたら、俺が貴女を殺してあげます。その代わり、貴女はそれまでの間、俺の血を食ってください」
「イヤ。長谷部の血は、他のいきものの命をうばった血だから、食べたらそのいきものの気もちが流れこんでくる。いろんな気もちが話しかけてくるの。オエ。吐きそう」
「この…クソ女……」
「本音がでた。あるじに汚いことばを使うな」
「貴女なんて主なものか。人間のフリをしてるだけで、元々はドロドロの醜悪な姿をしていたそうじゃないですか。母親の肉を喰っておいて今さら菜食主義とは笑わせるな偽善者。チューブで与えられる血液なら大丈夫な理由は？あれだってね、死んでから採取されたってだけで、いきものの命に違いないんですよ」
　む、と唇を噛みしめて、泣きそうな顔で押し黙った。顔だけ見ていると本当に人間のガキみたいだ。なぜこの俺がこんな子供のために危険を冒してまで刀剣男士の呪力を集めてこなければならないのか。全く腹に据えかねるが、絶食を決め込むこいつに呪力を補給しなければ、あの研究員が話していた「燭台切光忠が仕えている審神者と戦わせる検証実験」の機会は与えてもらえない。俺はその実験にお

いておまけであり、主役はこの審神者であるからだ。
　とても信じられないが、こいつと燭台切と共にいるもう一体の人造審神者は、二体とも審神者のくせに実戦に出ることが可能で、一体だけで一部隊を壊滅させられる程の力があるらしい。科学が飽和した結果オカルトに傾倒し刀の付喪神まで引っ張り出しておいて、人間というのは新しい兵器を作らないと死ぬ病気か何かなんだろうか。
「すきで、こんなからだに生まれたんじゃない。長谷部にはわからないんだ、だからそんなに食べても聴こえないんでしょ、よわい者の気もちが」
「はっ、生憎と強いものでねぇ、弱い刀の遺言なんて聴こえもしなければ、耳を貸してやる気もありません。それで？誰も殺したくないお優しい主は、代わりに汚れ仕事を引き受けてくれている懐刀のささやかなお願いも聞いてはくださらないのですか？」
「……長谷部なんて、だいきらい」
「だから？」
「だけど、はやくここからいなくなりたい。もうお母さんもいないし、私をころせるくらいつよいのは、長谷部しかいないみたい。……おねがい、きいてあげるよ」
「有り難き幸せ……では、俺の血を飲み、呪力を増幅させてから、ある実験に一緒に参加してください」
「お姉ちゃんを探し出して、どっちがつよいか分かるまでたたかえっていうんでしょ」
　ご存知なのでしたら話が早い。俺が愛想笑いでそう言って、塞がりかけた腕の傷を再度爪で抉り、彼女の唇に指先から注いでやると、しかめっつらで指を銜え、こくこくと飲みながら、笑い涙の混じったそれを「薄い。水っぽい。まずい」と散々に批判した。

「――おひさしぶりですね、止女様」
　白髪の少女は、最初に会ったときとよく似た姿でそこにいた。チューブではなく、いくつもの氷の針が刺さり、まるで標本の蝶のように氷の壁に縫い止められている。
「いつぞやは約束を守れず、申し訳ありませんでした」
　この審神者は、検証実験の結果、明らかに全ての能力において先に作られた人造審神者７７４号に劣っていた。俺もまた、『ＲＣＳ成長体』である燭台切光忠とその同類たちの前に刃先届かず、絶命する寸前で敗走する結果になってしまった。
　検証実験は、実験とは名ばかりの実戦だった。俺が９９９号を餌付けして呪力を肥やしていた間に、別の実験場で飼われていた７７４号とＲＣＳ成長体の一味はどのような理由があってか正規政府に反逆し、高度な呪術を用いて追跡の難しい時間軸へと逃亡したのだ。９９９号の力で逃亡先を突き止め、やっとそいつらと戦えたと思ったが、無様にもボロ雑巾と見紛う姿にされ研究所に逃げ帰った。
　政府が俺たちに与えた任務は７７４号の回収または破壊だった。そのどちらも果たせなかった俺たちは用済みとさ

れ、引き離されてそれぞれ別の用向きに再利用される運びとなった。
「俺は人間が使う不老不死の薬の材料に、貴女は刀が使う時間遡行機の部品としてね。氷漬けにすれば、肉体が老朽化しても呪力コンデンサとしての機能は果たせる。結局、貴女は俺と約束するまでもなく、殺されてしまう運命だったというわけだ」
話しかけても反応はない。呪力はあるが心がない。ここへ来るまでに何体も喰ってきたゾンビと似た状態だ。
五年前、２０５０年にこの部屋で見た彼女は、まだ氷漬けにされておらず、代わりに何百本もの細い電極を刺され、うわごとのように俺の名を呼んでいた。長谷部、長谷部、どこにいるの…と。７７４号に敗北した９９９号と引き離されて以後、何も知らずに再び実験体としての日々を過ごしていた俺は、その声を聞いて彼女を探し、見つけたときにはそんな瀕死の状態だった。
勝手に実験室を脱け出し９９９号の体から電極を取り外そうとしていた俺の行動はそれもまた反逆行為と見なされた。俺はなにも二人で別の世界に逃げようだとかそんなロマンチックなことを考えていたわけではなく、ただ自然に彼女を救おうと手が動いてしまっただけだったのだが、続々と押し寄せた警備の人間たちから銃を向けられた瞬間、反射的にそいつらを斬り殺していた。何十体もの刀剣男士を派遣してようやく俺を取り押さえた後、このときの出来事は『六本木占拠』と呼称されたそうだ。
「その後のことは、お恥ずかしい話続きなので割愛します。あっけなく記憶を奪われ、操作され、貴女のことを五年も忘れていた。さぞ不甲斐ない刀とお思いでしょう」
でもねおかげさまで、弱い者の気もちというのがよく分かりましたよ。
気を研ぎ澄ませて放った一太刀は、彼女を飲み込んでいた氷塊を粉々に砕いた。彼女の小さな体が落ちてきたのを受け止めると、天井や床や壁を覆っていた氷がしゅうしゅうと溶けて水になり流れてゆく。
彼女は時間遡行機を通して刀剣男士を引き寄せ、ここで感染した刀剣男士は他の刀剣男士を喰うことで呪力を保持し続け、その呪力を彼女が吸い上げ、それを原動力にして時間遡行機を動かす……彼女を起点としてこの建物全体を覆っていた氷は、呪力を飲むために伸ばされた舌だったというわけだ。いま彼女から無理やり引き剥がされたことで、ただの氷となり融解していく。
俺はしばらくその場で彼女の屍体を抱き締め、冷凍庫の肉みたいに固まったそれを温めた。もう意識は残っていないはずだが、彼女はなぜか俺から呪力を吸い上げることはせず、大人しく解凍されていた。腕の中で時折気まぐれに揺すってやると、まるで寝る子をあやしているようだ。
こんな風に眠らせてやったことも、退屈しのぎに絵本を読んでやったこともなかった。俺はただ毎日餌を食わせに通っただけ。一度一緒に戦い、負けただけ。
「貴女なんて、主なものか。けれど、約束を破った負い目

があります。あのとき殺して差し上げられなかった償いとして、『はやくここからいなくなりたい』と仰った、その願いは叶えましょう」
　手足が冷たくて壊死しそうだ。たぶんもうしてると思う。帰ったら燭台切に風呂を沸かしてもらおう。そんなことを考えながら、半生の少女の肉に噛み付いた。
　なんて臭い血だ。凝縮された濃厚な呪力がどろっと臓腑に纏わりついて体の中が焼けるように熱い。こんなものを全部食ったら胃袋が爛れてしまうんじゃないかと思うほど贅沢な肉だった。自分の目尻がぶるぶる痙攣しているのを感じながら、小さな骨と骨の隙間にまでしゃぶりつき血を啜った。腕の中でばらばらにほぐれていくのに従い、俺は床に這いつくばる格好になっていって、夢中で喰っていたから、誰かが入ってきた足音にも気が付かなかった。
「は…せ、べ、くん……？」
「ん……」
　なんだ燭台切か。
　よくここまで来られたな、と、血やら涙やらでべったり汚れた口を手の甲で拭って起き上がったら、びくんと怯えて後ずさった。
「は、は、そんなに怖がるなよ。傷つく」
「僕、アルジの数字がここに変わっていたのを見て、君を追いかけてきたんだ。すぐに見つけないと死んでしまうと思ったから……」
「そうか。ベッドに一人にして悪かったな。ちょっと小腹が空いたから外に出たんだ」
　いま食べ終わったところだから帰ろう。そう言って男に近付くと、彼は咄嗟に太刀の鞘に指を掛けた。
「なんだ、俺を殺すのか？それとも、またその鞘で俺の頭を殴って気絶でもさせるか」
「君、やっぱり、記憶が戻って」
「記憶なら元々ある。おまえに捻じ曲げられていただけだ。ああ、だが怒ってないぞ。人形遊びが楽しいことは、俺も身に覚えがあるからな」
　それと、俺は感染してないぞ。と付け加えて両手を挙げて見せても、燭台切は警戒を解こうとしない。最初からそのやる気を見せてくれていれば、とっくに俺は死んでいたのにな。今さら俺を殺そうったって遅い。
「河豚は自分の毒で死ぬことがあるそうだが、俺は毒そのものなんだ。人間が世界中にばら撒いた俺の一部をまた俺の体に戻したからって、俺がどうなるって言うんだ？」
　俺の言葉に、燭台切はわけが分からないという表情を返す。勉強不足なやつだな。仕方ない、俺と俺の中の全教科の教師が、おまえに冬季講習をしてやるとしよう。
　正月休みはないと思えよ？と目の前に立ち、燭台切の顔を見上げて俺が言うと、いよいよ理解不能という様子で、「もういいよ。噛まれたら噛まれたでいい」と言って俺を骨の折れるほど抱き締めた。

12　睦月は帰らない

ここ数日の長谷部君の罪状を挙げてみる。

大晦日には、年最後の掃除をする掃き納めとして二人で手分けして本丸の床を掃いていた最中に行方をくらました。夕刻になって、金目鯛を二尾手に掴んで嬉しそうな顔で帰って来た。築地で安くなっていたらしい。いやいやいや。寒いから煮付けにしてほしい、だめか、とぼろぼろ泣きながら（つまりそれは満面の笑顔ということなのだが）せがまれて、刺身と煮付けにして熱燗と一緒にやっている間に年を越していた。

お正月には凧をあげて独楽を回して遊んでいた最中に、長谷部君のベイブレード（B-66スターター『ロストロンギヌスN・Sp』）が飛んで行ってしまい、探してくると言ったままいなくなった。このときもそれからも、日を跨がず帰っては来てくれるものの、ちょっと目を離した隙に一人で出陣（？）してしまう悪い癖がついていた。

「今度一人で行ったら、僕本当に怒るからね……」

「なんだよ、築地に連れていかなかったこと、まだ根に持ってるのか？」

「そうだよなんでウニも買っ……いやいや違うそうじゃなくて、長谷部君はどうしてそんなに出陣したがるの。ここにいても何も不自由しないだろう？」

「腹が減る」

「ごはんは毎食僕が作ってるじゃないか」

「呪力が足りない。こないだ話したろ。俺は刀剣男士が近くにいると呪力を分け与えて自分が弱ってしまう。補給をせずにおまえと暮らしてたら、また骨密度スカスカだ」

確かにそれは聞いた。

僕が恋愛小説だと思って読んでいたあの小説は、どこかの燭台切光忠が書いた作り話ではなく、ノンフィクションの歴史資料でもあった。一年前に演練で会った刀剣男士にそのようなことを言われ譲り渡した本は、彼が持ち帰った本丸で飼われていた長谷部君の手に一度渡ったらしい。

飼われていた、というのは長谷部君の言だ。六本木の研究所からその本丸へ『人型の手入部屋』として下げ渡された彼は、うちの本丸の薬研君が発明した夢見水と同じような記憶改竄作用を及ぼす装置を首に掛けられ、自分のことを記憶喪失の鈍刀と思い込まされて、日がな、そこの近侍の薬研藤四郎から血液という餌を与えてもらえるのを待ちながら、おとなしく暮らしていたらしい。なにその完全なる飼育、うらやましいんだけど。どうして今はおとなしくしていてくれないのだろうか。

「血が欲しいならさ、僕の血を飲めばいいだろ」

「呪力っていうのは、五渡して五受け取れるものじゃないんだよ。自分の体から離れるときにいくらかこぼれ落ちてしまう。俺がおまえの呪力を喰って、その呪力をおまえがまた喰って…を繰り返すのは消耗戦だ」

「僕は君を食べたりしてない」
「喰ってるじゃないか」
昨夜だって、といやらしく口を歪めて、長谷部君はさっき切り揃えてあげたばかりの足の指の爪を炬燵の中からすいと伸ばし、僕の足にちくりと傷を付けた。
「…またそうやって、僕を煽るようなことして」
「煽ってるんだよ」
ほら、ほら、と恥じらいの欠片もなく僕の胡坐の中心に足を突っ込んで、ぴくぴくと反応してしまう正直な息子をいたぶってくる。
あー、口吸いひとつで真っ赤になって突き飛ばしてきたあの初心な長谷部君はどこへ行ってしまったんだろう。僕が嫌味たらしくそう呟くと、彼は別段気を害した風もなく卓上の蜜柑を指先でころころと転がして、それが僕のところまで来て止まるのを見届けた後、いじけた顔をしている僕と視線を合わせた。
「おまえがおぼこいのが好みだと言うなら、また人形遊びをしたっていいんだぞ」
「……いじめないでよ。第一、もうあの水は作れない」
「あの水なら、別に審神者の肉がなくても作れるぞ？」
「えっ！？ほんとう！？」
「ここの薬研の部屋にそう書いてあっただろう。おまえが勉強不足なだけだ。だが作れたとしても、もう今の俺にはあの水は効かないと思う」
こちとら世界最強の審神者の肉を喰ったからなァ、と、おぼこどころか悪の親玉にしか見えない顔で笑う。
「世界で一番強い審神者は７７４号なんじゃなかったの？９９９号はそれと戦って負けたんでしょ」
僕が教えてもらったばかりの知識を披露すると、長谷部先生は上機嫌に肩を揺らし、いい質問だ、と偉そうに言う。
「そうだな、アルジが運用されていたということは、もう人間の審神者はほぼ死滅したのだろうし、最強の審神者を選ぶなら間違いなく７７４号がそうだと思う。でも、アレはこの世界を捨てて別の世界へ逃げた。だからこの世界で最強なのは、止女様…９９９号だったんだよ」
９９９号の話をするときの長谷部君は、少し、本当によく見ていないと気付かない程度少しだけ、悲しそうな表情をする。自分で喰い殺したくせに、と釈然としない気持ちになるのだが、そのあたりの事情はまた次の授業のときにと言われて、この年末年始の間には教わっていなかった。
目の前で蜜柑の皮をむき始めた男の口元に、あの十二月に見た鮮烈な赤が一瞬よぎる。あれは、背筋の凍るような光景だった。
彼の姿がどこにも見えず、まさかと思いアルジのリールに残っていた数字を見たときは呼吸が止まりそうになった。それが六本木の『氷の美術館』――僕らの本丸がまだ全員揃っていたときでさえ攻略できなかった、最高難度の戦場を指し示していたからだ。
一人で行ったら死ぬ、一人で追いかけても死ぬ、それは明白なことだった。そう分かっていたのに僕は、彼があの

場所で感染した刀に噛まれ、やがて発症して理性を失うまでの時間を寒さに凍えながらじっと耐えているかと思うと、居ても立っても居られなくなり、同じ数字を目押しで止めてゲートを開けた。長谷部君は弱い、だからあまり奥の階までは潜っていないはずだと願って。

ところが、いざ美術館の地下、政府の研究所跡に足を踏み入れたら、そこはしんと静まり返っていた。大型の獣が踏み荒らした後のように、感染した刀と思われる刀剣男士や時間遡行軍が死屍累々と倒れており、それらは首や腹を食いちぎられていた。一度も到達できたことのない階まで進んでも、いっこうに生きている敵に出くわさず、死体で出来た道の上を恐怖に震えながら進んだ。

この先にはいったいどんな化物が待ち受けているんだ。獣か、鬼か、それとも、と、一歩進むごとに恐怖と好奇心の境目が曖昧になっていき、遂に行き止まりになった最深部の扉を開けたところで、正体を見た。

僕は昔、こんな小説を読んだことがあったな、と思った。

賊が恋し、愛していた美しい人の正体はおそろしい鬼であったという話だ。『桜の森の満開の下』という題だった。その話の中では、恐怖に我を失った賊が鬼の首を絞め上げ、正気に返ったときには、鬼は美しい人の姿に戻り、満開の桜の花びらに埋もれて消えてしまう。僕は、血まみれの姿で泣きながら笑っていた彼の体を抱き締めて、屋敷に連れて帰った。彼が鬼でも構わないと思ったからだった。

「……別の世界って、どこにあるのかな」

「なんだ急に。処女プレイの話はもういいのか？」

「そんな話してないよね！？記憶戻ってからこっち、長谷部君のボケスキルが天井知らずで、僕のツッコミスキルもカンスト寸前なんだけど！」

「うぬぼれるな。おまえのツッコミなんてまだまだだぞ。明石のキレとスピードには程遠い。もっと高みを目指せ。修行道具を買ってやろうか？」

「君は僕をどう極めさせる気なの？ていうか自分がボケって自覚あったんだね？」

突っ込むのはおまえの担当だろ、とか、いよいよもって発言に可愛げがない。こんなに明け透けになってしまって、いったいどうおぼこくなってくれる気なのだろう。

「さっきの、どういう意味なの」

「ん？」

「人形遊びをしてもいいってやつ。あの水が今の長谷部君に効かないのなら、どういうつもりで言ったのさ」

「ああ。だから、もっとそのままの意味だよ。人形のようにおまえを見つめ、おまえの言う言葉に従い、おまえの望むままに振る舞い、おまえが欲しい言葉をやる。俺はおまえのことが好きだから、おまえのしてほしいことなら手に取るように分かるさ」

迂闊にも、好きと言われたくらいで喜んでしまったことは顔に出さずに耐えた。さらなるご褒美の予感にどきどきしながら、そうと悟らせぬよう、さっき手元に届いた蜜柑の皮をむいて何の気なしに話を続ける。

「へー。じゃあ長谷部君、いま僕が君に望んでいること、わかるんだね？」
「ああ、分かるぞ」
「言ってみて」
「あ、アタシ…こういうの初めてで…」
「全然違うよね！？さっきのドヤ顔はなんだったの！？」
「だ、だからね…燭台切さんが、一人目のお客さん…／／」
「……」
「どうだ、俺の初出勤に当たったラッキーな気分は」
「……きらいじゃないです」
そらみろ、と彼は得意げにふんぞり返り、憮然と蜜柑を食べる僕の指を取ると、橙色に染まった指の腹をペロリと舐めて上目遣いに微笑んだ。涙腺が湿って瞳が濡れるのがどうしようもなく婀娜っぽい。こんなの絶対処女じゃないじゃないか、設定ミスだよ長谷部君。
彼は炬燵の上に身を乗り出して、僕の指をアレを彷彿とさせる仕草で舐り始めた。人差し指を根元まで咥え込まれて時々歯を立てられるとギクリと背筋がすくんだ。
「研究所で、おまえを何匹も喰ったよ」
「匹で数えないで」
「はは、気にするのそこか？燭台切光忠の血はうまかった。やたら何振りも襲ってきたが、俺に噛まれると、どいつも満足そうな顔して逝くんだ。愛おしかったよ」
「みんな、君のことが好きなんだろう」
「ああ、そうなんだろうな。そうなると決まっているんだ」
みしりと天板が軋む音がしたので、彼はそのままの体勢で続行することをやめて僕の隣に回り込み、スラックスの金具を指先で器用に外すと、そのまま鼻先を近づけてきた。
「あ、…のさ、君が、養殖ウナギだった頃の、ことだけど」
「ブフッ…いまその話やめろ、あと、誰が養殖ウナギだ」
しゃぶってやらないぞ、と、下着越しに唇でもどかしい刺激を与えながら文句を言われる。
「いや、ええと、君が前の前の…前？ＲＣＳ成長体の燭台切光忠と同じ本丸にいたときのこと、なんだけど」
「ん……何だよ、嫉妬か？」
「うわ結論早すぎ。あーもう…そう、嫉妬だよ。君さぁ、その燭台切光忠のこと、好きだったんだろ」
「……勿論。好きだったよ」
やっぱりなぁ、と聞いておいて胸が痛くなった。研究所から帰ってきて数日間、冬季講習と称して様々なことを彼から教えられたけれど、そもそも普通の本丸にいた普通のへし切長谷部だった彼がＲＣＳ合成体なんて特殊な存在に改造されてしまったきっかけが、その本丸での燭台切光忠との関係だったと聞かされたときは、非常にもやもやした気持ちにさせられた。彼がそこにいた僕をアナルファックしたという部分は、聞いているだけで尻が痛くなったが、彼から強い執着を向けられるということが、それだけなら羨ましくも思った。
「そう、好きだったんだ。――でもそれは、強い俺を認め憧れてくれる存在として好きだった」

そういうのは自己愛というらしいぞ、と彼は笑う。
「俺にはいまひとつ、突き詰めればどれも自己愛に思えてしまうのだが、どう違うんだろうな？でも、あいつとおまえに対する自分の気もちの違いなら、はっきりと分かっているつもりだよ」
どう違うの、と僕が尋ねるのを見計らったように、というか確実に見計らってフェラチオを始められた。ちょっと待って先にいまの教えて！と僕が声を上擦らせながら頼んでも、あとえおひえるはら、と舌っ足らずに取り下げられて、なんかすんごい舌遣いでつまりこのように語彙がなくなってしまうくらいあ、あ、やばい出るもうはせべくんだめってそんな吸ったらうわこれとまらな――――。

「……またやられた」
早朝、すっかり冷たくなった炬燵の中で、自分の出した精液でかぴかぴになった下半身を露出している自分がしたくしゃみの音で目が覚めた。
炬燵の天板の上には食べかけの蜜柑と一枚の書き置き。長谷部君の漢らしい字で、『腹がへったから出かけてくる』と書かれてある。
「ひどい…やっぱり長谷部君は鬼だったんだ……」
もう、今日という今日は許さないんだから！とか言いながら、いそいそと食事の支度をし、いつ帰ってきても彼が風呂に入れるように薪割りなんか始めてしまっている自分は、悪い男に入れ揚げている女のようだと思った。
結局、僕に対する気持ちって何だったんだろう。うまくはぐらかされてしまったが、いまや、あのウイルスに感染しないという時点で最強の刀剣男士である彼が、初対面の男を殴って拉致したあげく薬漬けにして洗脳レイプするような僕を好きでいる理由が見当たらない。…改めて文字にすると本当に酷いな。
「あーあ、暇だし長谷部君を逃げないように捕まえておく手枷とか足枷でも作ろうかな……えっ、なにそれ我ながらいいね…悪くない…！」
その日、僕なりに象が踏んでも壊れない拘束具を作ったつもりで、どこからか帰って来た長谷部君に装着したら、一秒で破壊された。ですよねとしか言う言葉がない。
粉々になって床に落ちたそれを見下ろしながら、弱い刀というのはこういう気持ちなのだなと、おぼこかったころの長谷部君の気もちが分かったような気になった。

13　如月、ふたたび

燭台切が一人で出かけるなとあんまりしつこいので、じゃあ二人で行くかと言い返したら、金色の目を丸くして「いいの！？行く！」とあっさり同行を決めた。
おい分かってるのか俺は大丈夫だがおまえは噛まれたら感染するからな死ぬからな、とノンブレスでくどく言ってやったのだが、そうなったら残さず食べてねとウインクを投げられ、それ本人は気づいていないのだろうが、俺から見たら両目を瞑っているようにしか見えないのだった。
俺が出陣したいとしきりに訴えていた頃は、何かっちゃ例の水を飲ませて洗脳セックスに持ち込み有耶無耶にしていた奴に情をかける必要なんて全くないはずなのに、あまりにも嬉しそうな顔をして、朝五時起きで弁当まで作り始めたので、今さらやっぱり連れて行きませんとは言い出せない雰囲気になってしまった。
「長谷部君、どこ行く？ＴＤＬ？ＵＳＪ？」
「どっちも廃墟だから嫌だ」
燭台切はつっけんどんな俺の返答にも全然めげず、じゃあどこがいい？と、いつどこで拾ってきたのか、おもむろに全国版るるぶを取り出し、二月のイベント情報のページを熟読し始めた。ちょっと待てよその情報は二百年は前のものじゃないのか。
「……ごめんね、僕だって分かってるんだよ。君がそんじょそこらの刀に殺られるわけがないって。僕を連れていくと足手纏いになってかえって危険だってことも」
俺の前にるるぶの長四角い地図を広げて自分の顔を隠し、頁と頁の隙間から今度は殊勝なことを言い出した。半分が作戦で半分は本気ってところかな、とアタリをつけ、俺は譲歩案としてもう少し後になってからしようと思っていた提案を彼にした。
「行きたいところなら、ある。おまえに例のやつ、アルジの目押しをしてみせてほしい」
「お安い御用だよ！……って言いたいところだけど、君も知っての通り、最近アルジの調子が悪くて、特に君が不在のときに電気が通らなくなるんだよ。うまく動かないかも」
「大丈夫だ、それはない」
俺はアルジの前まで歩いて行き、箱の天辺にばんっと手の平を置いた。ちょっと長谷部君、旧式のテレビじゃないんだからと燭台切が言い終わるのを待たずにアルジが点灯し、ぶぉんと起動音を立てる。
「えええええええ？？？」
「……なんか気づいていないみたいだし、気まずいから黙っていたんだけどな。かつて万屋へ行けなくなったのと同じように、９９９号からこのアルジへの接続が切られた今、俺という代わりの電池がなければこいつは動かない。さすがに電気がないと不便だろうし、言おう言おうとは思ってたんだが……」

「不便だったよ！なんで教えてくれなかったの！？」
「黙ってたら、おまえが薪割りとか始めたから…ちょっと面白くなってきてな……」
「ひどい！僕、部屋の明かりも行灯に変えたのに！」
「それはその方がいいと思うぞ。おまえのあの照明は」
「あれはオシャレです！」
「あと、『超なつい』はかなり古いと思う」
「それもオシャ……なんで知ってるの！？」
　人の日記を勝手に読むなんて！と、内容が拉致監禁ウキウキ洗脳日記なことは完全に棚上げでプリプリ怒りながら俺の隣まで来た。それじゃよろしく頼む、と言ってレバーを下げると、問題なくリールが回り始めた。
「やれと言われたらやるけどさ……どこに行きたいの？函館？それとも六本木？」
「数字じゃない。西瓜の絵を四つ揃えてくれ」
「……それって」
「演練」
　俺の意図を既に察しているのか、燭台切は急に喋るのをやめて、アルジの正面で膝を折り、まるでダンスパートナーの手にキスをするかのような体勢で、じっと回転するリールを見つめ始めた。
　さすが得意と豪語するだけあって、数分も経たずに彼は演練を引き当てた。ちょうど一年ぶりに聴くチップチューンの祝福音がノイズ混じりに鳴り響き、背後で光輝く虹色のゲートが口を開け――次の瞬間、ぱんと消滅した。
「……もう一回、やる？」
「いや、いいよ。俺が何をしたかったのか、おまえはもう気づいてるんだろ」
　さっきの話からしてヒントだったんだから流石にね、と溜息をついて体を起こし、ぴかぴかとエラー表示用なのか点滅を繰り返すアルジのライトをさらさらと撫でた。
「演練のゲートは現れた。けれど開かない。これは、入口に対応する出口が見つからないからだ。接続先が見つからない……つまり、演練に出られる刀剣男士が存在しない」
「大正解。素晴らしいな、ちょっとさっきのめでたい感じの曲もっかい流してくれ」
「電気は大切にね」
「俺の作った電気なんだから、いいだろ」
「だから言ってるんだよ」
　で？次はどうしたい？と俺の言葉を待ち、燭台切は縁側に腰を下ろして、ついさっきゲートが一瞬現れて消えた庭先をぼうと眺める。俺も隣に座り、同じようにした。
「もう少し見ていたかったな。演練のゲートはほら、美しいだろう。初めておまえを見たとき、まるで虹の衣を纏って天上から降りて来るようだった」
「君は、肩を掴んだだけで骨が折れたとか言い出したから、正直当り屋っていう印象がでかかったよ」
「何だと。俺の儚げなところに惚れたんじゃなかったのか」
「うーん、『はかなげ』と『骨がもろい』はイコールじゃないんだよね、残念ながら……」

「じゃあ、おまえは俺のどこを好きになったんだ」
「ええ？知ってるくせに。君が食べた他の燭台切光忠たちとたぶん同じだよ。自分の知る限り最も美しい存在から、おまえは美しいとか言われて、落ちない人っているかい？僕は、君の瞳を通した世界でなら、仲間殺しの畜生じゃない存在でいられると思ったんだ」
「なんだ、それじゃ昔の俺と大差ない理由だな」
「自己愛ってやつ？なら、今の君はどう違うの」
「その前に、さっきのおまえの告白の真偽を見抜こう。おまえは別に、自分がお綺麗な存在だと思われたかったわけじゃない。もしそうなら、俺は毎日の日課としておまえの美しさを讃えるよう調教されていたはずだからな」
　そうならなくて本当に良かったと思う。ぞっとする。
「おまえの背中につけた傷から血を飲んだときに、記憶の一部を貰い受けたよ。おまえや、ここにいた薬研のことも――ああ、そんな青い顔するなよ、俺は恋人の過去は気にしない性格だ。そういうことじゃなくてな、俺は、おまえが理性的な刀だと頼られ感情を殺して行動させられていたことが、気の毒でならなかったんだ」
「実際そうだったんだ。僕はみんなと違って感情がなくて、だから幻覚も見れなくて、それで」
「感情がないだと？ブログにでも書いてろそんなことは！感情がない奴が自分を好きになってなんて望むかよ。おまえはな、ただ寂しかったんだ。最初は俺じゃなくても良かった、ただ一人じゃ寂しすぎただけなんだ」
「そんな…そんなこと、そんなの、自己愛よりかっこ悪いじゃないか。君で寂しさを埋めようとしたなんて」
「俺は、それでもいい。むしろ、なくても困らないものを与えるより、なくちゃ生きられないほどつらいってものを埋められる方が俺は嬉しい。だって今の俺は、自分にとってのそれを、おまえに全部埋めてもらったから」
　出会ったその瞬間から、俺が強いということ、俺が弱いということ、そのどちらも同時に認識し、受け入れて傍に置いてくれていた。俺はおまえの前では、完璧でなくても良かったし、卑屈に振る舞う必要もなかった。
　ずっと、自分が強者か弱者か、必要か不必要か、分からないまま、燭台切光忠を憎むことでしか自分の存在を定義できずに、それでも漠然と足りないと感じていた。じゃあなにが欲しいのか、自分でも分からない有様で。
「俺は、ずっとそれが、俺がいてもいいっていう場所が欲しかったんだ。たとえそれが、寂しさを埋めるために用意された椅子だったとしても。俺のような弱い刀は、おまえみたいなどうしようもない寂しがりの隣に座っているのが自然なんだよ、燭台切」
　俺と、燭台切の二振りを除いて、刀剣男士はもういない。感染した刀剣男士は互いを喰い合い、それでも足りなければ人を、それでも足りなければ獣を襲うだろう。どれほど俺があくせく介錯したところで、食事のスピードと感染のスピードはまるで釣り合わない。すなわち遅かれ早かれ、この戦争はウイルスの勝利で終結するのだ。

「……なぁ、正月に、別の世界がどこにあるのかと、俺に聞いたことがあったよな」
「うん。聞いたよ」
「この本丸はどこにあると思う？昔あった万屋は？過去の人間が大量に喰い殺され、喰った猛獣はその時代に生き永らえているというのに、俺はいったいどこの築地で穏便に金目鯛を買ってきたんだろう？」
「ウニも買ってきてほしかった」
「悪かったって。まあ要するに、別の世界があるとするならば、それは最初から、どこにでもあるんだ。あいつらを追いかけて、ここに亡命させてくださいって言うことも、たぶんできないことじゃない」
　でも、俺はそうはしたくないんだ。
　今の俺は、おそらく限定的ではあるものの審神者の力を受け継いで有している最後の存在だと思われる。歴史改変の喜劇と悲劇に関わった、審神者という存在の。
　それならば、外の世界へ逃げるより、俺一人くらいは、この世界の行く末に同行してやるべきなのだと思う。世界が燃え上がり、砕け散り、泣き叫びながら滅んでいくそのときに、隣で見ていてやろう。そうしたいのだ。
「できれば、おまえにもそれに付き合ってほしい」
「……いいよ。元々は、去年君の刃に捧げるつもりでいた命だ。君の命をくれたお返しに、僕の命は君にあげよう」
「ありがとう、燭台切」
　これから二人で、気の遠くなるような長い年月をかけてこの世界が滅び、そうしてまた永遠にも近い時間をかけて再生していく様を、特等席で眺めよう。
　ただちょっとばかし、おまえの方が寿命が短いかもな、と呟いたら、それじゃ僕の方が先に新しい世界に到着してしまうねぇとむしろ得意げに言い返された。
「先か後かは問題じゃないんだが、ただ俺が着いたときにおまえがあまりにもジジイになっているようだと、来世は惚れないかもしれん」
「嘘でしょ、運命の相手なのに年齢制限とか」
「精々若作りして来てくれ」
　あーあ、あんまりな仕打ち、と愚痴を吐きながら、燭台切は縁側に寝そべり、庭に生えている大木から四方へ伸びている枝に向けて、手の平をかざした。
「……もう春だよ、長谷部くん。そろそろ春の景趣に変えてくれないか」
「雅じゃない頼み方だな。分かったよ。さあ、移り変わる日々と、ふりゆく我が身を感じてくれ」

「おおーい、長船！こっちだ、こっち！」
　俺が手を振って合図したら、高校時代から親友の長船がやっと気づいて、パートナーの女性とその子供の手を引きながら精一杯の早足で俺の車まで寄って来た。
「どこで迷ってたんだよ、相変わらずの鈍足だな」
「悪い、久しぶりに来たら出口間違えちまった。横浜駅ってまだ改築してるのか？」
「おまえがいた頃の工事ならとっくに終わったよ。今やってるのはまた別の工事だ」
　へぇー、と彼はおのぼりさんのように駅周辺のビル群を見回して感嘆の声を上げた。その隣で所在なさげにしている二人を見て、早く紹介しろと小声で催促し、長船の脇腹を肘でどつくと、ぐえ、と蛙のような声を上げた。
「ああ、えっと…俺のカミさんと、その息子…でしゅ」
「でしゅって、おまえ」
　いきなり緊張し出して語尾を噛んだ彼の姿に、ようやく隣にいた彼女が笑顔を見せる。暗い女というわけではないようで、話すきっかけを得たという風に、俺に頭を下げて「今日はありがとうございます。ご迷惑おかけしますけど、私たち二人とも運転が得意でなくて。どうぞよろしくお願いします」と、即席運転手を仰せつかった俺に菓子折りを差し出した。おい、いいって、と長船が慌てて下げさせようとしたが、彼女に恥をかかせるのも良くないかと思い、軽く礼を言ってそれを受け取った。

「それにしても、おまえが結婚して帰ってくるとはな」
「なんだよ長谷部、大学で彼女見つけたらすぐにでも結婚しそうだな、って俺に言ったのはおまえだぞ」
「そうだっけ？そんな昔のことは忘れた。つうか、嫁さん年上じゃん。大学で見つけたんじゃないのかよ」
「ああ、バイト先」
　サービスエリアの喫煙所で一服つけていると、車に二人を置いて追ってきた長船が、おまえ実は先越されて僻んでんだろと笑いながら二本指を立てて煙草を催促してきた。
「なんだ禁煙させられてんのか？やっぱ結婚は墓場だな」
「いや…まあ、その…なんだ、腹の子のためにも、さ」
　子供ならもういるだろ、と言いかけたとき、喫煙所の柱のかげから、ひょこっと噂の子供が顔を出した。
「うわっ！びっくりした～、駄目だよこんな所に来ちゃ、君のお母さんに俺が怒られちゃう」
「おかあさんは、トイレにいってます」
「あ、ああ、そうなんだ。…コレ、内緒にしてな？」
「はい」
　なんだよカッコつけといてやっぱり禁煙は強制なんじゃないか、と俺が言うと、俺にも人差し指を立てて「内緒」と共犯になることを要求した。

「まったく。困ったお父さんだね？」
興味があるのか、俺たちが煙草を吸っているのを表情を変えずじっと見つめてくる子供にそう声をかけて、彼に煙がかからないよう灰皿に吸殻を捨ててからしゃがみ、目線を合わせた。
「……おじさんは、誰ですか？」
おいおい先に紹介しておけよ、と長船を睨むと、わざとらしく明後日の方向を向いて、山がきれいだとか雨が降りそうだとか話を逸らしやがる。
俺の名前を聞くために来てくれたのかな、と尋ねたら、こくんと一度頷いた。くせのない黒色の前髪がぱさぱさと揺れて、それを見た瞬間に、長い間止まっていた心臓が、ようやく動き出した気がした。胸の奥、誰にも触れさせず閉じ込めていた場所が、燃えるように疼く。
どうして泣いてるの？とその少年が俺に尋ねた。違う、笑っているんだと答えると、ぽろぽろ涙をこぼす俺の目を不思議そうにじっと見つめた。
ああこれで、ようやく、生きていける。
「俺は長谷部国重。これからよろしくな、光忠くん」

如月、ふたたび

刀剣乱舞　アンオフィシャルファンブック　＃4
燭台切光忠×へし切長谷部

「うしろがみ」繪子
ugm.echo@gmail.com
Pixiv:2660047
Twitter:ecosan

印刷：丸正インキ様
2017 年 1 月 8 日発行

カバー写真："St. Agnes Parish, Detroit"
https://www.flickr.com/photos/squirrel_brand/

この本は個人的に作られたファンブックです。原作のゲーム・アニメ・その他公式とは一切関係がありません。内容に関してはフィクションであり、実在のものとは一切関係がありません。ネットオークション等への出品・無断転載を禁じます。